



かごめかごめ



磐田 匠

かごめかごめ

1

「行くよ、茉莉」

兄はつぶやくように言った。

私は黙っていた。

私が何を言っても、兄は計画を変えることはないだろう。

私の声はもう兄の心には響きはしないのだ。

私には見守ること、ただそれだけしかできないのだ。

兄はズック靴の紐を結び直し、立ち上がった。

兄の行動は機敏そのものだった。

最初に待合にいた警備員が殴り倒された。

「全員動かないで。動くとは死ぬことになりますよ」

同時にロングコートの下に隠し持っていた猟銃を構える。

兄はカウンターに仁王立ちしている。

閉店直前の銀行内に残っていた客のうちほとんどは、あまりに突然のことに口をぽかんと開けてこの成り行きを見守っている。

「客は全員伏せて頭を両手の上へ。立っている者がいれば撃ちます」

身体向きを変えたときに兄のコートが大きくはだけた。

腹に巻き付けたダイナマイトがちらりと見えた。

「行員は全員デスクから離れなさい。両手は頭の上。妙な動きをすると、発砲します」

行員たちが一斉に席を立とうとした、そのときである。

「あれは・・・非常灯？誰か、非常ベルを操作しましたね」

兄が言った。

入り口の非常回転灯が回っている。

行員たちの表情が一斉に青ざめる。

はるか遠くでサイレンの音が聞こえたような気がした。

「・・・シャッターを閉めてください。籠城します。あなたがたは人質です」

シャッターが閉ざされる。通用口も封鎖され、この空間は完全に外部から遮断された。

兄はそこから、行員たちと客たちを一カ所に集めた。

そして一名の男性客と二名の男性行員の身体に、靴から出したダイナマイトの腹巻をくくりつけた。

「リモコンで起爆装置が作動します。最低でも我々四人は道連れです」

兄は小さく笑った。

そして行員・客をフロアの一カ所に集めた。

「銀行とやらの忠実な人のせいで、皆さん全員に迷惑をかけることになりました。恨むなら非常ベルを押したバカな銀行員を恨みなさい」

私はこの一部始終を銀行の待合ベンチからながめていた。

「あの・・・」

人質の行員の一人が私の存在に気づいた。

「放っておいてもらいましょう」

兄の一言で、行員は私から目をそらした。

「茉莉、ちゃんとみておけ。俺のやることを」

兄の唇がそう動いたような気がした。

兄は支店長と二名の行員を残し、全員を鞆から出したロープで縛った。

そのうち一名の行員の腹には、ダイナマイトがくくられた。

そして空になったその鞆に、金庫室の古い一万円札を詰めるように指示した。

重い金庫室の扉が開かれ、札束が運び出される。

五分ほどで鞆は女の手では運べないほどの重量になって戻ってきた。

ここまでで籠城から一時間ほど経っただろうか。

電話のベルが鳴った。

兄は汗だくで鞆を運んできた若い男子行員に、電話をとるように指示した。

「はい・・・サツキ銀行県庁前支店でございます・・・」

腹巻のようにダイナマイトをつけたままの男が対応する。

「あの・・・県警の藤本警部補という方があなたと話したいと言っておられます・・・」

「藤本という人に伝えなさい。五分後に人質を四名解放します。人質の一人に我々の要求を伝えておきます」

解放する四名はすでに決められていたようだった。

客うち、親子連れが一组と妊婦一名。そして爆弾を巻かれた銀行員。

ダイナマイトを巻かれた若い行員は、一時的に外へ出る代償として兄の要求を暗記させられた

。

① 人質に配布する毛布・食料・紙製の簡易トイレ。

これらの搬入は一時的に解放した男子銀行員にさせること。

② 複数のテレビ局による銀行外部の中継。

③ 以上二点の要求が一時間以内に実行された場合、さらに三名の人質を解放する。

④ 男子銀行員の腹に巻いた爆弾は外し、分析してもかまわない。

⑤ これらの指示が実行された後、改めて人質解放の交渉を行う。

要求は受け入れられたようだ。通用門を開けろという連絡が入った。

兄の手に爆弾のリモコンスイッチと猟銃がある限り、警察には妙な手出しはできない。

人質の手によって通用口のバリケードが撤去され、鍵が開けられる。

毛布・食料・簡易トイレがさっき出ていった若い銀行員によって運ばれてきた。

警察はとりあえず、兄との交渉のテーブルにつこうとしているようだ。

行員の腹のダイナマイトは外されていたが、資材運搬の役目を終えた彼は再び人質となることとなった。

兄は男子行員たちにテレビをロビー中央に運ぶよう指示した。

しばらくテレビを見た後、兄はおもむろに立ち上がり、次に解放する人質の人選をはじめた。

解放される人数は、予告された三名どころではなく、十五人を超えた。

女子全員と六十歳以上の男子、十八歳以下の男子。

「女子全員」には行員も含まれている。

戻った若い行員は、連絡係として再び警察への要求を覚えさせられている。

解放される女と老人、子供は慌ただしく準備をはじめた。

残される男たちは彼女たちをうらやましげな表情で見上げている。

残される人質はあと十人である。

かごめかごめ 籠の中の鳥は

いついつでやる

夜明けの晩に

鶴と亀がすべった

うしろの正面だあれ

2

「東都テレビ、報道局デスクの東山です。あなたは？」

「名前は言えません。サツキ銀行県庁前支店を占拠している者です」

一瞬、東山の目の前は真っ白になった。そして彼の頭は瞬時に現状を判断した。どうせまた性質の悪いイタズラだ。

「・・・あなたが犯人であるという証拠は？」

「何ならいまここにいる支店長を電話口に出しましょうか？疑われるなら結構。他の局と交渉します。テレビ局はあなたがただけではない」

臆するところのない、威厳に満ちた口調。

もしかすると今、俺はとんでもないことに巻き込まれようとしているのではないだろうか。

「待ってください。重大事件が発生すると、このてのイタズラ電話がかなりあるんです。信用しないというわけじゃない。どうでしょう、犯人、というか銀行の中にいないとわからない情報を教えてもらえませんか。そいつを知らせてくれれば全面的に信用しましょう」

男はしばし黙り込んだ。

「・・・次に解放される人質は十六人。女性十三人と男性三人。女性のうち十人は行員です」

「・・・警察発表では次の人質解放は三人のはずですが・・・」

「よくご存じですね。しかし気が変わった。女性全員と老人と子供を解放します。解放は五分後。私の次の要求はさっきの銀行員に伝えています。私からの要求は警察から発表されているのですか？」

「かなり早い段階で発表されています。ただ、警察庁から報道規制の指示がきていますので現時点ではニュースにはできません。規制された情報は事件解決後に一気に報道されます。こういうことがあることは知っておられますよね」

「もちろんです。ただ、あなたにだけは申し上げておきます。警察への要求はダミーです。私の本当の要求はあなたがたマスコミに対してのものです」

「・・・どういうことでしょうか」

「改めて電話します。これから解放される人質の人数と、ニセの要求をあなたが確認してからお話ししましょう」

兄は電話をきり、おもむろに立ち上がって言った。

「さっき選んだ十六名を今から解放します」

再びバリケードが通用口の前から動かされ、人ひとりがやっと通れる幅にドアが開いた。

十六名の人質が一列になって通路からでていく。

列の最後に並んでいたさきほどの男子行員が通用口から姿を消した。

ドアがゆっくりと閉められ、硬い音をたてて施錠された。

「今、人質が解放された模様です・・・十名以上います。人質は順次、警察官に保護されていきます。人数は確認できません・・・解放された人質のなかには、先程食料を持って入っていった山部さんの姿も見えたのですが・・・こちらからははっきりと確認できません・・・解放された人質の氏名など、詳しくは警察発表を待たなければならないでしょう。サツキ銀行、県庁前支店の山部さんは再び犯人からの要求を伝えるために解放されたのでしょうか・・・」

テレビ局のアナウンサーがヒステリックに叫んでいる。兄は表情ひとつ変えず、リモコンでチャンネルを変えた。

「・・・犯人は爆発物に関しての相当な知識を持っているようです。県警・爆発物専従班の発表によりますと、犯人が所持しているとみられる爆弾は実に精巧なもので、一時解放された山部さんの証言どおり、山部さんの身体につけられていた爆弾と同程度のものがあと複数あるとすれば、かなり深刻な状況であると考えざるを得ません・・・」

兄は微かに笑ったように見えた。

かごめかごめ 籠の中の鳥は・・・

3

再び解放された山部純一は、現場本部の藤本警部補の前に座っていた。

「じゃあ山部さん、確認しますよ。犯人からの次の要求は・・・逃走用の乗用車を一台用意すること。乗用車のトランクには古い紙幣で三億円を乗せておくこと。車両の一切の追跡は行わない

こと。検問も行わないこと。衛星などによる追尾も行わないこと・・・逃走用の車両が用意された時点で残る人質のうち九人を解放、犯人は一名の人質を同行させ、安全が確認された時点で最後の一名を解放すると、こういうことですか？」

「はい、間違いありません」

そう言いながら山部は現在の自分にどこか現実感のなさすら感じていた。昨日までは自分の人生はだいたいのところ、うまくいっていた。若いころは多少の脱線もあったが、概ね合格点の生きかただった。それがどうだ。今日の午後三時から、三流刑事ドラマの主人公のような時間が続いている。

「中の状況を教えてください。人質は十人。間違いありませんね」

「はい。犯人は二十代の後半から三十代前半くらいの若い男です。自分とそんなに年齢はかわらないと思います」

「犯人が所持しているのは猟銃が一丁。爆弾はあと三組ある。一組は犯人、あとの二組は人質の腹に巻き付けられている。起爆装置らしいリモコンは犯人が所持している・・・ここまで間違いはないですね」

「はい・・・」

捜査本部が置かれているのは近所の喫茶店で、ここには山部も何度か足を運んだことがある。

据えつけられたテレビからは今日の事件の映像が流されている。突然、画面が切り替わって自分の顔写真が映しだされた。就職活動のとき履歴書に貼ったマヌケ面の写真だ。

「事件が終わったら、手記でも書くといい。あんたすっかり有名人だよ」

藤本警部補は笑いもせずに言った。

「・・・山部さんは五年前入行の若手社員です。山部さんは捜査本部からの回答と要求された人質への物資を手し、再び犯人の元へ戻るように指示されています・・・」

できることなら戻りたくはない・・・

「山部さん、あんた、すっかりヒーローだな。犯人に伝えておいてくれ。犯人との交渉は俺が全責任を持つ。頼むから直接話をさせてくれってな・・・」

山部は冷めかけたコーヒーを飲み干して立ち上がった。自分があの場所へ戻る時間がちかづいていた。

「今、山部さんの姿が見えました・・・表情には少し疲れが見えるようですが、足どりはしっかりしています・・・捜査本部はどのようなメッセージを山部さんに託したのでしょうか。山部さんがゆっくりと、銀行に向かって歩いていきます・・・」

アナウンサーは相変わらずアジテーションにも似た調子でがなり続けている。自分の局の番組とはいえ、悪趣味なものだ。東山は電話口で相手の次の言葉を待っていた。

間違いはない。この男は犯人だ。事件記者として報道に携わってきた東山の勘がその結論をあと押ししていた。

たっぷりと間をとったあと、男は意を決したように話しはじめた。

「おたくの局と取引をしたいのです。私があなたがたに提供するのは銀行籠城犯との独占電話イ

インタビューです。視聴率、とれますよ。それだけじゃない。番組内で私は面白い発言をする。三日前にH市で起きた殺人事件犯人の実名です。いかがですか？」

「三日前のコロシの犯人ですって？」

東山はデスクトップパソコンのキーボードをたたいた。東都日報ホームページ。日付と場所、キーワード『殺人』を入力し、検索キイを押す。

事件の記事が画面に表示される。被害者の顔写真。事件現場の雑居ビルの写真・・・

「私はこの事件の目撃者なのです。いかがですか？取引しませんか？」

これはとんでもない話だ。現在進行中の事件の当事者との電話インタビュー、それだけでも充分すぎるほどセンセーショナルなできごとだというのに。

「・・・取引とおっしゃるからには、何らかの見返りが必要なのですね」

「・・・そうです。では私の要求を申し上げます・・・私の要求はひとつだけ。十年前に起こったある事件の、当時未成年だった加害者少年の実名報道です」

長い電話を終えて、兄は受話器を置いた。テレビの画面には通用口の前で待っている銀行員、山部が大写しにされている。兄は残っている人質に、通用門を開けるように指示した。

ダイナマイトを腹にまきつけた銀行員たちが大騒ぎしながらバリケードを移動させている。

遠い目をしてそれを眺めている兄の表情は、どこか寂しそうだった。

「かごめかごめ 籠の中の鳥は
いついつでやる

夜明けの晩に

鶴と亀がすべった

うしろの正面だあれ？」

「おにいちゃん？」

4

「妙だな」

藤本警部補は誰に話しかけるでもなく、つぶやいた。

「は？」

盗聴器の無線周波数を調整していた警官が聞き返した。

「犯人の武器は猟銃のほかに、無線で発火させる仕組みの爆弾が四組。そのうち一組は惜しげもなく警察に進呈している。最初の要求は食料と毛布と簡易トイレ。犯人からの要求は包囲された直後だ・・・犯人は覆面どころか、サングラスさえしていない・・・妊婦、親子、女性の順に人質を解放していくやりかた・・・そこへきて次の要求は現金入りの逃走車両。わからん」

喋り続ける警部補の意図を図りかねたのか、警官は困惑の表情を浮かべるだけだ。

「わからんか？銀行強盗だぞ、こいつは。銀行に押し入って、金を奪って逃げる。そういう計画だったはずだろ？どうして爆弾が四組も必要なんだ？荷物になるだけだろう？奪った金を持っ

て逃げなければならないんだから。要求するものもおかしい。最初はまず逃走手段の確保だろうか？そうでなければマスコミを遠ざけるように指示するとか。こいつはやることがまるで逆だ。最初から籠城することそのものが目的だったようにも見える」

藤本は喋りながら動物園の檻に放された熊のように室内をうろうろと歩きまわっている。

「奴はマスコミを呼んでいるが、銀行内では覆面もサングラスもしていない。人質も解放している。人質を解放すれば似顔絵やモニタージュが即座に作成される・・・それくらいわからないわけでもあるまい。銀行からの脱出に成功したとしても、日本中の行く先々に指名手配のポスターが回ることになる。そこまでして銀行に籠城を続けて何の意味があるというんだ・・・まるで逃げる意志がないようだ・・・」

警官は藤本の話聞くふりをして無線の調整をはじめた。

「人質は女性全員を解放している。これもおかしい。籠城犯は抵抗しそうな男性を先に解放して、服従させやすい女性を残すものだ。何故老人や子供や女性の解放が先なんだ。世間の同情でもひこうと思ってるのか？さらにこのタイミングでの逃走手段と現金の要求・・・事件を長引かせようとしているとしか考えられない・・・」

藤本はさっきまで山部が座っていた席に目をやった。そこにはすっかり冷めてしまったコーヒーが、ぽつんと置かれていた。

「警察は時間が欲しいと言っています。すぐに金を用意するのは無理だそうです」

若い銀行員、山部はふりしぼるように言った。

「あなた、銀行員の割に交渉ごとが下手ですね。あなたが警察を説得させることができなければ、この事件で最初に死ぬのはあなたになるのですよ」

兄が冷徹に言い放った。籠城をはじめてから、兄はずっとこの丁寧な口調を崩さない。

しかし、だからこそ。強烈な威圧感を与えることに成功している。

「それともあなたの同僚のかたに吹っ飛んでもらいましょうか。これからのあなたの人生、さぞや後味の悪いものになるでしょうね」

山部がごくりと生唾を飲み込んだ。一カ所に集められた人質たちは息をつめて二人の会話に聞き入っている。

「あなたに最後のチャンスをあげましょう。行員だけを残して人質を解放します。これであなたがたの顧客はここには残らないことになる。警察、銀行ともに突入しやすい状況になるわけです。あなたには残った三組の爆弾のうち二組を警察に届けてもらいます。これで私の武器は爆弾一組と猟銃だけです。私としてはこれ以上の譲歩はできない。警察サイドからよい返事を持ってきていただかねば困ります。あなたがここに戻るタイムリミットは一時間後の午前零時。その時間を過ぎれば五分ごとに一名ずつ、あなたの同僚を射殺していきます。よろしいですか？」

山部は口をぱくぱくさせながらうなずいた。

兄は無言で解放する人質たちのロープをほどきにかかった。

これで残る人質は山部を含め、五人になった。

東都テレビの報道デスクでは、東山をチーフとして特別放送のVTRが編集されていた。十年前に起こった当時の少年による「事件」。三日前の殺人事件。そして今回の銀行籠城事件。三つの事件は今、東山の手でひとつの環としてつながろうとしている。

東山は軽い目眩のような感覚をおぼえていた。これほどの事件に、俺のブイ（VTR）が関わろうとしている。

あるいはこれはマスコミによる個人の断罪になるのかもしれない。

かまわない、いってしまえ。

論調は、殺人犯人の告発。

その根に当時の少年犯罪があったとしても。

それが事件加害者の人権を無視する結果となるとしても。

籠城犯に同調することが視聴率をとるキイになる。

籠城犯は言った。次の動きは午前零時ごろ。

それまでに三つの事件をつないだVTRを完成させなければならない。ブイは殺人の犯人像をぼかした形で終わる。そこで独占電話インタビューが入る。

そして、テレビ史上空前の瞬間がやってくる。

現在進行中の銀行籠城犯人による、殺人事件犯人の告発。それが生放送で日本中にオンエアされる。

東山に残された時間はわずかだった。

「次の回答が犯人の気に入らなかつたら、人質の誰かが殺されることになるかもしれません」

藤本は部下からの報告を黙って聞いていた。

「本部からは突入せよ・射殺やむなしとの指示がでている・・・賭けるしかないか・・・」

長い沈黙の後、藤本は口を開いた。

「あの若い銀行員・・・山部さんだったかな。彼の服に隠しマイクを仕込む。彼に要求を全て受け入れると伝えさせよう。そうすると、これまでの経緯から、犯人は次の人質解放の準備をするに違いない。その瞬間、突入だ。山部さんには突入準備ができ次第、銀行に向かってもらう。時刻は犯人が設定した期限の時刻、午前零時前後。突入班は準備にかかれ。狙撃班はそのまま待機。マスコミ各社には突入班がカメラに映らないように細心の注意をはらうよう通達しろ」

警官たちが慌ただしく動きだした。

「山部さんをここに呼んでくれ・・・」

藤本は沈痛な表情で言った。あるいはこの人は犯人の犠牲になるかもしれない。

突入の際、猟銃はある意味では問題にならない。この武器のリスクはむしろ突入する特殊部隊の隊員たちが負うことになる。警察が把握している限りの情報では、犯人が所持しているタイプの猟銃の弾数は最高でも二発。そこからは弾丸を装填し直さなければならない。だから突入時には最初の二発の弾丸さえしのげば、犯人の身柄確保はじゅうぶんに可能である。

（犯人の生死は別として・・・）

犯人からの凶弾が人質に向けられる可能性は極めて低い。突入を知った犯人はほとんど例外なく

警察官にむかって応戦する態勢をとるからである。

しかし微妙なのはむしろ爆弾である。リモコンスイッチは犯人が握っている。突入後の最初の狙撃で、犯人の行動を完全に制止できなければ、人質に被害が生じる可能性がある。

最悪の場合、残された人質全員が死亡するかもしれない。

藤本は苦々しい表情で憂鬱に光る蛍光灯をにらみ、突入の決定を下した県警上層部を恨んだ。

俺の人生はだいたいうまくいっていた。

そう、あのときも、次のときも。これまでいつもうまく切り抜けることができたじゃないか。

今度も大丈夫。きつとうまくいく。

山部純一は自分にそう言い聞かせた。

「午前零時前後に警官隊が突入します。その際、残っている人質全員に伏せるように伝えてください。銃撃戦が始まる可能性があります。突入直前に銀行への電気の供給が停止されます。その際、爆弾を巻かれた行員の人から爆弾を外し、できるだけ遠くに投げるようにお願いします。突入箇所は通用口、支店長デスク真上のエアダクト、待合ソファ上の排気口、正面玄関シャッター横出入り口の四カ所です。爆弾を捨てるのはこれ以外の場所をお願いしますよ。警官隊が爆弾でやられちゃ話になりませんからね。よろしくお願いします」

瓢箪のような顔をした、スーツ姿の男が言った。

ひとごとだと思って。こっちはまたあのならず者の所へいかなくちゃならないんだ。しかもこんどは警官隊突入の手引きときた。

山部はいつもの癖でスーツの襟を軽く触った。

「ああーっ。すみませんが、襟さわるの、気をつけてください。こっちはものすごいノイズになりますから」

大きなヘッドホンをつけたまま、スーツ姿の警官が言った。そう言われて自分の襟元には小型のマイクが仕込まれていたことを思い出した。

なんだよ、お前。えらそうに。

まあいいか。もう少しの辛抱だ。午前零時過ぎ、すべては終わる。きっとあの男は良くて病院送り、悪ければ射殺される。自業自得だ。

悪事を働くなら、頭をつかわなきゃ。

しかしこの俺が警察の手助けをするとは夢にも思わなかった。

若い頃、町で遊んでいただけの俺たちを、お前ら警察はさんざんいたぶってくれた。おまえたちの態度が高圧的だから、俺たちも反抗した。それだけだったのに。

でもいいさ。それはそれ。昔の話だ。あれは誰にでもある、「ワカゲノイタリ」ってやつだ。

それはそうと・・・

事件が終わったら・・・そうだ、あの刑事が言っていたように手記を書こう。俺は銀行籠城事件の当事者の一人なんだから。

「山部さん・・・そろそろ行きましょうか」

いつのまにか自分のそばにプロレスラーのような体型の男が立っていることに山部は気づか

なかった。

この男は・・・確か警部補の藤本とかいう男だ。

「山部さん・・・あなた・・・どこかでお会いしませんでしたかね」

どこで会っていても不思議はない。あの頃なら。

「さあ・・・」

山部は曖昧な返事でごまかした。

しかし今の俺はあの頃の不良ではない。警察の要請で、銀行籠城犯と交渉する、勇気ある銀行員なのだ。

山部は思う。俺が警察との交渉役に選ばれたのは、偶然だったのだろうか。自分は学生時代、さんざんな悪さをしてきた。その報いなのだろうか。いや、もしかして、事件の最終局面に、自分にとってとんでもない活躍の場が用意されているのではないだろうか。

犯人との銃撃戦？

犯人との格闘？

もしかすると、爆弾のスイッチを押そうとする犯人を説得する役回りか？

まさか。そういう派手な役まわりは自分には巡ってくるはずはない。

アクション映画のヒーローじゃあるまいし。

俺はランボーでも、ジョン・マクレーンでもない。

学生の頃は、多少は腕に自信があった。

しかし、今もし、そんな場面が現実にくぐってきたら・・・

俺は戦えるだろうか。

午前零時まであと二十分ほどしかなかった。

・・・夜明けの晩に

鶴と亀がすべった・・・

5

十一時四十五分になった。

兄は立ち上がり、支店長の手足を縛っていたロープをゆるめた。

「まもなくあなたたちを解放します。準備をはじめてください」

兄はそうやってテレビをつけた。リモコンを操作してチャンネルを東都テレビに合わせる。銀行の出入り口をうつしていたカメラがふいに切り替わった。

兄の表情が一瞬、緩んだ。

「交渉役の男・・・今や日本中の注目の的、山部さんと入れ替わりに皆さんを解放します」

兄は皮肉めいた口調で言った。

「さてここで、我々東都テレビが独自に入手した情報を皆さんにお伝えしたいと思います」

男性アナウンサーが重い口調で言った。女性アナウンサーが続ける。

「東都テレビは、銀行籠城事件の犯人との接触に成功しました。この後、犯人は我々との独占電話インタビューに答える予定です」

「インタビューに先立って、犯人は前代未聞の情報を提供すると申し出てきました。そのやりとりの一部始終をVTRにまとめています。ごらんください」

大袈裟な音楽とともにVTRが始まる。銀行の映像の上に白文字でテロップがのせられている。

「緊急特番・サツキ銀行県庁前支店籠城事件。犯人が語る驚愕の真実・事件に隠されたもう一つの事件とは？」

最初は再現映像。

犯人と報道デスクとのやりとりが忠実に再現される。

軽くモザイクがかけられた画面。

電話のやりとりにあわせ、テレビ局デスクと犯人らしい男の口許が交互に映される。

素材画像は過去の『事件再現映像』の使い回しだ。

短い時間で編集したわりにはよくできている。導入としてはこれで充分だ。

問題はここから。ここから先は一気に運ばないと警察や局上層部からの横やりが入る。

東山は調整室の時計をにらんだ。

このブイの残り時間はあと二分。

次のブイが五分。アナウンサーのつながが一分三十秒。つまり、八分三十秒でインタビューに入ることができる。

インタビューが終わった時点でまとめのブイが入る。

とりあえず八分三十秒間、放送中止の指示が入らなければ俺の勝ちだ。

電話インタビューが電波に乗ってしまえば簡単には中断できなくなる。

「事件」はすでにエンタテイメントに転位しつつあった。

「藤本警部補・・・東都がえらいことやっていますよ」

「どうした？」

若い刑事が無言でチャンネルを操作する。

男女のアナウンサーが喋っている。

画面の端に見える文字を見て、藤本は愕然とした。

『緊急特番・サツキ銀行県庁前支店籠城事件。犯人が語る驚愕の真実・事件に隠されたもう一つの事件とは？』

「何を考えているんだ、東都は・・・県警の記者クラブと連絡をとれ。東都日報経由で番組の中断を要請しろ」

対策本部を兼ねている喫茶店は一気に緊迫した。

マスコミを犯人の味方につけるわけにはいかない。

現場は強行突入を前提として動いている。ここで犯人がマスコミに出てしまうと、視聴者は犯人側に思い入れをするように傾くかもしれない。そうなれば人質救出のための作戦が、犯人の人

権を無視した暴挙ととられかねず、強行突入という選択肢がふさがれてしまうことになる。

犯人の狙いは何なのか？

やはり強行策に対する予防線のつもりなのだろうか。

「藤本警部補・・・犯人から・・・電話です」

この瞬間、藤本の思考は停止した。

これまで山部氏を通してしか本部と交渉してこなかった犯人・・・

犯人が本部に電話をかけてきている。

今になって・・・何故・・・

「はじめまして、というよりお久しぶりですと申し上げたほうが正しいですがね。藤本警部補。あの頃は巡査長でいらっしゃいましたかね・・・もうお気づきでしょうが、今、東都テレビで面白い番組をオンエアしています。警察庁や東都新聞記者クラブからのいらぬ圧力はただけはご遠慮願います。あなたにとっても懐かしい、ある事件の特集をやってくださるそうですよ。ごゆっくりお楽しみになってください。あなたがこの籠城事件の担当だと聞いて一度ご挨拶はしておかねばとは思っておりましたがね。奇遇ですね。事件関係者がまたこうして集まるなんてね」

「待て、お前は・・・誰なんだ」

「そろそろ名前を明かしてもいい頃だろうと思っていたところです。私の名前は杉下洋介。十年前、あなたが担当された女子高生暴行事件の被害者の兄です」

藤本の脳裏にある少年の顔が浮かんだ。

「山部がこちらにもどる期限時間の変更はしません。必ず十二時までに戻してください。山部が戻り次第、残りの人質を解放します。これで人質は山部だけになる。これが何を意味するのか、あなたにはおわかりですよ」

藤本は舌打ちして立ち上がった。やっとわかった。犯人・・・杉下の狙いはこれだったのだ。山部・・・そうか、山部はあいつだ。

「山部・・・銀行員の山部を戻せ。奴を銀行に入れるな」

「は？」

「銀行員の山部を止めろ。早くしろ・・・」

若い警官が慌ただしく出て行く。

「もう遅いですよ、藤本さん・・・」

電話の向こうの声が冷たく言い放った。

マスコミにもみくちゃにされながら銀行へと向かう、山部の姿がテレビに映っていた。

「・・・以上が三日前に起きた事件のあらましです。この殺人事件に重大な関連があると思われる、十年前のある事件をVTRにまとめています。ご覧ください」

『事件は十年前の八月七日に起こった・・・事件の被害者は市内の高校に通う、十八歳の少女だった。彼女は通学の帰り道、突然何者かに襲われた・・・』

テレビから流れてくるのは私の事件のことだった。

もう十年も前の事件になるのか・・・

銀行の外が騒がしい。山部という銀行員が姿を見せたようだ。

『・・・犯人として逮捕されたのは当時十七歳の少年だった。彼は少年であるということから家庭裁判所に送致された。当時の目撃情報から、犯行は二人組によるものとみられたが、もう一人の少年は特定できなかった・・・』

「奴らを取り調べたのが当時所轄で強行犯を担当していた俺だ」

藤本がぼつりつつぶやいた。

若い刑事はじっと画面に見入っている。

「奴は高校生の分際で、完全黙秘を貫いた。最後まで主犯の少年の名前を言わなかった。我々にはその少年の目星はついていて。しかし、市会議員でもある少年の父親からの妨害が入って捜査は打ち切りになった。主犯の少年の名前は山部純一。籠城する犯人と対決する日本のヒーローが十年前のレイプ殺人の実行犯だ」

「では被害者の女性は・・・」

「少年たちに輪姦された後、近くに落ちていた石で頭部を殴打され、死亡した・・・」

テレビに私の顔写真が映った。杉下茉莉さん、当時十六、と書かれている。

そうだったね、兄さん。私、十六で死んじゃったんだね。

兄は引きつったような笑いをうかべながら、ずっとこちらを見ている。

待合のソファには、私の遺影と位牌。

兄が銀行に籠城をはじめてから、人質の行員たちはずっと『私』そのものであるそれらを見て見ぬふりをしている。

兄に私の声は届かない。こんなこと、してほしくはなかったのに。

VTRが終わり、カメラはスタジオに戻った。

男女のアナウンサーが立っている。

「・・・さて三日前の事件ですが、今回殺害されたのは、この十年前の事件で家庭裁判所に送致された当時の少年、林田 輝さんであることがわかっています。家裁送致後については被疑者の人権に対する配慮から公表されておりませんでした。林田さんはある市会議員の紹介で城西区の工場に勤務していたそうです。仕事ぶりの評判はあまりよくなかったようで、職場の同僚によると、『俺にはいいスポンサーがいる』というのが口癖だったということです・・・」

「サツキ銀行県庁前支店に籠城している男は、この殺人事件を目撃したといっています。その口から語られる犯人像は、どんな人物なのでしょう」

「どうやら犯人とつながったようです・・・もしもし・・・」

最終局面だ。藤本警部補と同様、ビデオ調整室で生番組の主導権を握る東山も、籠城犯杉下が指摘する殺人犯の目星がついていた。

杉下が命がけで告発しようとしている人物は一人しか思いつかない。

少年法の壁。議員や会社上層部からの圧力。

東山もまた、十年前、この事件に携わっていた人間の一人だった。

十年前に闇に葬られた「真実」。

警察もマスコミも、たどりついてはいたが、権力というものにおしつぶされてしまった事実。

「現場カメラ。聞こえるか？銀行に向かう山部純一を狙えるか？・・・よし。できるかぎりアップで奴を追え。指示があるまで続ける」

東山はインカムで現場に指示をだし、自らカメラの切り換え卓に座った。

最高のタイミングで最高の絵をだしてやるよ、杉下サン。

「もしもし・・・」

「こちらスタジオです。あなたがサツキ銀行県庁前支店に立てこもっている方ですか？」

「そうです。お騒がせして申し訳ないと思っています」

「残る人質は無事なんですか？」

「ケガひとつさせていません。午後零時に一人を除いて解放するつもりです。今、その準備が終わったところです。支店長の体調がよくないようです。念のため救急車の用意をお願いします」

「そちらは警察のほうで準備されていると思います。ところであなたが今回、このような行動にでられた理由をお聞かせ願えませんでしょうか」

「・・・一番の動機は告発のためです。私の妹は十年前、獣のような男たちに弄ばれ、殺された。ある日、突然、命を奪われたのです。しかし彼らは善良な市民のような顔をして普通に暮らしている。私にはそれが許せない」

「しかし犯人はすでに法による裁きを受けたはずです」

「一人はね。しかしもう一人は罰をうけるどころか、逮捕すらされていない。それどころか、さらに罪を重ねている。私は、自分の生命を賭けてこの男と、この男の背後にいる人物を告発しようと思ったのです」

「・・・その男とは誰ですか？」

「私の妹をレイプし・・・当時の共犯者『林田 輝』を殺害した男は・・・」

マスコミ記者たちにもみくちやにされながら、その瞬間、山部純一はひやりとした視線のようなものを感じた。

「・・・サツキ銀行、県庁前支店に勤務する、山部純一。マスコミや警察に圧力をかけ、妹の捜査を妨害したのは彼の父の市会議員、山部初穂です」

その瞬間、東山はスイッチを押した。テレビ画像が縦に二分割される。右半分にはスタジオの男女アナウンサーが。そして左半分にはマスコミに囲まれ、顔を醜くしかめている山部の顔のア

ップがあった。

「うしろの正面だあれ？」

「おにいちゃん？」

「あたり・・・」

6

山部が銀行内に戻るのと入れ替わりに、兄は残りの人質を解放した。

銀行内に残ったのは、私のレイプ事件の『加害者』と『被害者の兄』二人きりになった。

「こういうことだったのか・・・俺にあてられた役割は正義の味方じゃなくて、悪の親玉だった・・・」

「そういうことになりますね」

テレビ各局では銀行籠城事件と並行して、三日前の殺人事件と十年前のレイプ殺人の報道がはじまっている。この騒動の余波が山部議員に向かうのも時間の問題だろう。

銀行内は静まりかえっていた。

「・・・俺を・・・殺すのか？」

長い、沈黙。

「いいえ。あなた自身に決めていただきます。あなたもあなたのお父様も、もう社会的には立ち直れない。例え法があなたがたを許しても、社会は許してはくれない。違いますか？」

山部は答えなかった。

憔悴しきったその顔は、混乱しながらも短時間のうちに自分に起こったこと全てを受け入れようとしているようだった。

兄は手に持った猟銃をカウンターに置いた。

「弾は一発しか入れていません。これをあなたに差し上げましょう。私を撃つもよし、ご自分でお使いになるもよし。私の代わりに警官隊と銃撃戦の末、玉砕するというのもいいかもしれませんね」

兄は皮肉っぽく笑った。

「・・・仕方なかった。あいつは・・・林田はオヤジの筋から、俺の職場を捜し当てた。十年前のことを週刊誌に売るといいだしやがった。・・・確かに俺にはあいつに対しての負い目があった。奴は少女暴行の犯人として家裁にまでいった。事件が元であいつの家庭はバラバラになっちまったらしい。それにひきかえ、かばわれた俺のほうは親の力もあって無傷だった。脅迫がはじまったころは奴の言うままに金を工面してやっていた。でも・・・いくら親が議員でも、俺はただのサラリーマンだ。用意できる金には限界がある。俺は永久に奴から金をむしり取られ続ける・・・そう思ったとき・・・俺はあいつを殺そうと決めた」

「レイプ事件はどうだったのですか？」

「・・・俺は殺していない。あれはレイプでもない。あの娘とは合意の上の・・・」

「死人には証言できませんからね」

「本当だ。俺たち、ちゃんと金を払って・・・」

「・・・家裁でもそこが争点になったと検察官から聞きました。あれは和姦だったのか強姦だったのか。殺人だったのか、事後の偶然だったのか・・・」

「そうだよ、林田が言った。裁判でそういう意見書が出されたそうだ。終わったあと、現場の空き地近くの崖から石のようなものが落ちて、あの子に当たったという可能性もあるって・・・本当に俺たちはやってないんだ」

「・・・真実などどうでもいいんですよ。私はただ、妹が命を落とす原因をつくったあなたがたを許すことができなかった。それだけなのです」

突然、銀行内の電灯が一斉に消えた。

杉下は爆弾のリモコンを手にした。

「そろそろ警察が突入してくる。決断のときですね」

電気が消えるということは、警察の突入が近いということ。

「奴ら」は俺たちの会話から突入のタイミングをはかっていたのだろう。

「俺たちの会話」から？

・・・聞かれてしまった。

背広の襟に仕掛けられた盗聴マイクのことを思い出した。

殺人の告白も。十年前の事件に自分がかかわっていたことも。

「奴ら」に聞かれてしまったのだ・・・

俺は・・・本当に・・・もう終わりだ。

見上げたカウンターの上に、午後から自分を脅し続けていた猟銃があった。

「あの事件以来、私は死に場所を探し続けていたような気がします。最後にあなたを告発できてよかった・・・」

兄は立ち上がって金庫室へ向かった。

兄が金庫を開けさせたのはこのためだ。

一人で逝くために。

山部がすべきことを、彼自身に決めさせるために。

あの日以来、死に場所を探していた・・・兄。

私が命を落とす原因をつくった山部が許せなかった・・・

そうなのかもしれない。

そうでないのかもしれない。

兄が本当に許せないのは、山部ではなく、自分自身だったのかもしれない。

何故なら・・・

私を殺したのは兄なのだから。

山部という男とは友人から紹介をうけた。

屋外で、二対一のレイププレイ。

報酬は相場の三倍。

私は引き受けた。

私の初体験の相手は兄だった。

受験でノイローゼ気味の兄は、両親が留守の夜、私を自分のものにした。

私はまだ中学一年生だった。

だから・・・

私には普通の女の子の貞操感覚などなかった。

高校を卒業したら兄と離れて暮らそう。

兄と自分のために。

そのためにも私にはお金が必要だった。

その夜。

いつものように空き地でのプレイが終わった。

プレイのなかで破られた下着や泥のついた制服。

紙袋に入れてある予備の服に着替えようと思ったそのとき・・・

背後から足音がした。

うしろの正面だあれ・・・

おにいちゃん？

兄の手には大きな石が握られていた。

その石が、私の頭めがけて、おもいきり・・・

兄は本当に、私を愛してくれていたのだと思う。

だから、私を殺した後も、泣きながら私を抱いたのだし・・・

兄に犯され、殺され、売春をしていた妹という事実を消すために・・・

兄は証拠の紙袋や、プレイの報酬や、不自然な金額が記載された貯金通帳などを全て持ち去って・・・

それがために私の名誉は守られた。

そして。

これからも私の名誉は永久に守られる。

これから起こることによって・・・

藤本警部補が突入部隊へ最後の指示をするより一瞬早く、銀行内からくぐもった爆音が聞こえた。

それに少し遅れて、銃声。

サツキ銀行県庁前支店籠城事件は発生から九時間後、解決した。

かごめかごめ

かごの中の鳥は

いついつでやる

夜明けの晩に

鶴と亀がすべった

うしろの正面だあれ

山麗館事件

1

許せない。あの男だけは。

彼は男の顔を思い浮かべながら、もう一度思った。

愛する彼女がその命を失ったのも、この男が原因だ。その罪は、死をもって償われなければならない。

彼はこの日のために、周到な計画をたて、リハーサルを繰り返してきた。

その日、男は事故死する。

準備は全て整った。

決行は、一週間後。

クリスマスイブの夜。

2

「女なんてなあ、みんなこの地球上から消えてなくなったらええんじゃ」

今日の兄は驚くほど機嫌が悪い。

いつものことながらこんなせりふを、仮にも女である私の前と言うなんて。まあ、兄が私を女性として認めてないのはわかっているつもりだけれど。

早紀はそう思った。

兄の気持ちもわからないではない。委細は聞かされてはいないが、どうせまた女性問題で会社から引導を渡されたのだろう。最初の職場～早紀の今の職場～を女性がらみのトラブルで追われてから、兄の女難はひたすら続いている。

まがりなりにも女性である早紀には、兄が抱える問題への対処法がわからない。兄の心境がわからないのだ。だからこれまでもあたりさわりのないアドバイスを繰り返してきたし、そしてこれからもそうするしかないのだ。

兄の女性問題は、世間で語られる女性問題というものとは少し違う。兄は女性によからぬ手出しをして職場を変わり続けているのではない。それならば早紀もここまで心配したりしない。

兄の場合はむしろその逆で、女性と全く会話ができないのである。女性対人恐怖症・対女性赤面失語症とでも言うのだろうか。とにかく早紀以外の女性の前では全く話ができなくなる。無理に喋ろうとすると顔面から耳にかけて紅潮し、下手をすれば泡をふきながら倒れるのではないかとと思われるほど心理的に追い込まれるのである。

これさえなければ、父の期待を背負って警視庁入りするのは私ではなく、兄だったはずなのに。早紀はいつもの愚痴を自分のなかで繰り返した。

父は本庁のエリート警視。母は資産家の娘で犯罪心理学の教授。こんな二人の息子が並の頭脳の

はずはない。両親の思惑では、兄は日本警察のトップに立つ人材となるはずであった。しかし。しかし。このご時世でまともに女性と話のできない人間が警察機構のトップにたてるはずもない。神戸の有名私立全寮制進学校・もちろん女子禁制という環境のなか、小学校から高校までの十二年間を女性に対して無菌状態で過ごさせた父母のエリート教育方針が見事裏目にでたことになる。

兄の人生は女性との関わりが増すにつれ当然のように険しくなった。兄はセンター試験で信じられないような、散々な、どうしようもない成績で国公立大学進学の間を閉ざされ（これは後で聞いた話だが、試験当日は前後左右は女子受験生だったらしい）、どうにかこうにか合格した私立大学でも、初年度で（女子と同席し、なおかつ喋らなければならない）語学科目の全部と体育・おまけに女性教授の科目の単位をことごとく落とすという偉業を達成した。

父母は兄のこのていたらくを憂慮し、精神分析に赤面解消心理講座、催眠術による治療、果ては女性の前でしゃべる訓練と称して劇団に入れるまでして女性失語症を克服させようとはしたが、兄の症状はとりあえず用意された原稿や台詞を喋れるようにまで回復するのがやっとだった。これさえなければ、自慢のかつこいい兄貴なのに。

小学校の頃から兄は早紀のヒーローだった。兄の学校の関係で遊んでもらった記憶はほとんどない。でも小さい頃から、本当に小さい頃から早紀の学習机の上は兄の写真で占領されていたし、いまだに定期入れの中には兄が一番素敵な笑顔で写っている写真がおさまっている。

実際、兄は妹の目からというひいき目を差し引いても、かなりイケテル部類に入る。顔つきはどちらかというところ精悍な感じだし、体つきも高校時代、フルコン空手と陸上競技と筋トレで鍛えあげただけに無駄のないものだ。

兄にとっての不幸は、タレントの山本太郎が兄に似ていたこと。兄が山本太郎に似ているのではない。ゴールデンタイムのテレビ番組で水着一枚着て踊っていた変なタレントに兄が似ているわけがない。あいつが勝手に兄に似ているんだ。

実際、「メロリンQ」こと山本太郎の登場が、女性に免疫のない兄に与えた影響は小さなものではないだろう。

ほとんど喋ったことのない女という生物が、ただテレビの出演者に似ているというだけで意味もなく兄を笑い物にするのである。

兄が今まさにつかみかからんとしている男、白土秀樹にしても、いまだに兄を「めろりん」と呼んでいる。

「しかしなあ、めろりん。女がこの地球上から消えたら、この世界はほんま、おもしろいもんになるぞ」

「うるさい。女なんかいらんのじゃ。女なんか、ほんま、ややこしいだけじゃ」

白土さんがチラリとこちらを見た。その視線はうろたえたように泳いでいる。

「早紀ちゃんの前やぞ。かわいそうやないか」

「いいですよ、私は気にしないですから。これは大学時代からの兄の口癖ですし」

早紀は事務的に言って、部屋を見渡した。いつ来てもとんでもなく汚れた部屋である。兄の親友の部屋とはいえ、ここに座るのだけは勘弁して欲しい。

神戸。六甲。響きもイメージも悪くはないこの街に住みながら、ここまで部屋を汚くする白土の神経が理解できない。

山麗館。兄も白土もこの賄い付きの下宿の住人である。一応、女子禁制。近隣の大学の男子学生が下宿人の大半を占めている。学生向け下宿に『はぐれ社会人』の二人が居座り続けているのには複雑な事情があるらしいのだが、早紀にはそういう事情は興味なかった。

しかし。それにしても。この部屋。

敷きっぱなしの蒲団はじめじめしてそうだわ、あちこちにスナック菓子やら缶ビールの空き缶やらが転がっているわ、流しには二十世紀の頃から忘れられたかのような食器が放置されているわ、意味不明の紙屑やティッシュペーパーがあちこちに散乱しているわ・・・

入るとき、部屋の中に妙な空気が充満していそうな気がして、早紀はわざとドアを閉めずにいた。ささやかな抵抗である。

こんなことになるなら兄の呼び出しを無視すればよかった。

ぬるりとしたいやな感触。足元には茶色に変色した元バナナの皮が転がっている。上がり框でスリッパを脱いだことが悔やまれる。

「早紀ちゃん、飲もか？兄貴と違っていける口やろ？」

白土が元は透明だったではあろうが、今は底が薄茶色で周囲が白濁したグラスを差し出す。

御免ですわ、と言えたらどんなに楽だろう。早紀は促されるままにグラスを受け取った。

「まだ九時やで一。イブの夜はこれからやで一」

白土はなぜか浮かれている。

時計を見ると「まだ」ではなく、「もう」九時だ。

兄の前にはグラスに入ったオレンジジュース。兄は酒が全く飲めない。

「おう、そういえばさっきから聞こえてたへったくそなギターの音、止まったな」

兄が唐突に口を開いた。

「202の奥村っちゅう高校生やろ。あいつほんま下手くそやな。エレキの練習するぐらいやったらアタッチメントくらい使えっちゅうねん」

言いながら白土がプルタブを開けた缶ビールを差し出す。早紀はグラスを出さずに缶ごと受け取って口をつけた。あのグラスを使うよりはこうしたほうがいくらかました。

「どうせクソ女どもにもてるやろ思てバンドやってるんやろ。ええ加減にしてもらいたいな」

そういえばここに来た八時頃には確かにギターの音が聞こえていた。妙に音がしゅりしゅりしていたのはギターの音色を電氣的に変化させるアタッチメントボックスを使っていなかったからなのか、と早紀は一人合点した。最もギターの技術そのものは早紀には決して下手には聞こえなかったのだが。

「あいつええギター持ってたぞ。この前見せてもらったけどな。フェンダーのストラトキャスターや。俺はよう弾かんかったけどな。ははは」

フェンダー・ストラトキャスターといえば、ディープ・パープルのリードギタリスト、リッチー・ブラックモアのトレードマークともいべき高級品だ。このフェンダー社製のギターはとりあえず高い。高校生でフェンダーのギターなんてなんて贅沢な子なんだろう。それにしても

この色黒の野蛮人でも恐れおおくて弾けない高級ギターがあるんだ。早紀は妙に唇のぶあつい白土の顔をぼかんと見ながら思った。

「ストラトかいな。でもさっきのギターはセミアコみたいな丸い音してたような気がしたけどな」

「それにしてもあいつ、高校生のわりに選曲が古いな。さっきまでツェッペリンとかチャイナ・グローブとかジェフ・ベックとか弾いてたやろ？」

「ジェフ・ベックねえ。レッド・ブーツやろ？あの曲をコピーしてほんまに値打ちがあるのはギターよりむしろドラムやで。それよりあの高校生、今日の晩飯前までスモーク・オン・ザ・ウォーターとかハイウェイ・スターとか練習してたぞ。四期の東京ライブバージョンやったけど」

「トミー・ボーリンのギターのやつやろ。あかんあかん。パープルいうたらリッチーや。それ以外のギターは認めん」

早紀は二人の会話を聞かないようにしてこの悲惨な部屋を見渡していた。ダブルネックギターを抱えたジミー・ペイジの大きなポスターが貼ってある。二人は年齢のわりに妙に古いハードロックに詳しい。そんな早紀はビーズとミスター・ビッグのファンである。

「まあトミー・ボーリンはギタリストの風上にも置けん奴やからな」

と兄が言ったところで白土が早紀に会話の解説を試みる。

「早紀ちゃん、トミー・ボーリンっちゅうのは、ディープ・パープルの後期のギタリストでなあ、こいつは酔って変な寝かたして指がしびれて動かんような状態で来日公演したアホや。指が動かんもんやからスライドギターで公演をしのいだんや。ほんま日本のファンをバカにした話やで。スライドギターいうのは知ってるかな。左手に鉄の筒みたいなんをはめて、ネックの上を滑らす演奏法やね」

それぐらいは知ってるわよ、と早紀は思った。こう見えてもオールロックフリークの磐田匠の妹である。小学生の頃から、たまに実家に帰った兄とふたりでハードロックを聴き続けてきたのだ。大好きだった（もちろん今でも大好きだけど）兄に近づきたくて、人一倍音楽を聴きまくった彼女なのだ。兄と違って楽器だけはやらなかったけれど。

早紀はデュアン・オールマンだとかレイラだとかとスライドギターの講釈を延々とたれ続ける白土から兄に視線を移した。兄、匠は面白そうに早紀をながめている。早紀が白土の部屋と関西弁が苦手なことを熟知しているようだ。

もともと関東人であり、警視庁に採用されたはずの早紀が、なぜ兵庫県警に出向を命ぜられ、クリスマスイブの宵に白土の部屋で缶ビールを飲んでいるのか。それは匠の父、磐田勝行警視の超法規とでもいうべき人事配置の結果であることを早紀は理解していた。極端な女性恐怖症の兄の監視役兼お目付役。とりあえず警察大学は卒業したものの、実地研修で警察史に残る大失態を演じたという伝説の兄。

まあ普通に考えれば放っておけない兄貴には違いないか、とも早紀は思う。

県警での待遇は驚くほど良い。本庁キャリア候補が警部の肩書を持って、意味不明の出向研修を行っているのである。県警の人間にとってはこの人事配置の意味が解しかねるだけに、早紀の

存在は脅威であるらしい。父の親友でもあるという県警本部長をはじめとする一部の人間を除いては、まるで腫れ物にさわるといふ思いで早紀に接している。

「おおーっし、ギター弾くぞ、ギター」

色黒の野蛮人が部屋の隅のガラクタ置き場からぼろ雑巾のような色のアコースティックギターを取り出した。

「ツェッペリン行くぞ。あんな兄ちゃんに負けてられへん」

白土はそのごみ溜めのような部屋とその南方系の風貌からは想像もつかないような繊細なギターを弾く。

これがライブになると人格が変わるそう。演奏中の派手なアクションでコードをアンププラグからブチ抜くなんていうのは序の口で、マイクスタンドは壊すわ、ドラムセットは倒すわ、照明機材は壊すわで、神戸のホール音響業者とライブハウス関係者のブラックリストに載っているそう。

部屋の一角には弁償買取りの各種ホール機材コーナーがあり、その意味不明の戦利品が彼の部屋をいちだんと見苦しくしている。全部彼自らが修理して、使用可能な状態であるらしいのだが、何に使うのかもこれまた意味不明で、ここまでやるとただのバカであると早紀などは思うのだが・・・

白土の左手がギターフレットの中ほどを握る。妙に太いひとさし指が六本の弦を同時に押さえ、薬指が別のフレットを押さえる。バレーコードというやつだ。早紀はこの指遣いがどうしてもできなくてギターを断念した。

ギターでいうコードというのは「和音」という意味で、指で複数の弦を押さえて鳴らすときの指の形をさしたり、和音を意味したりする。

親指が上から下に弦をはじいていく。低音にゆっくりと高音がかさなり、哀しげな和音をつくりだす。

このフォームはかなりの握力が必要である。早紀がこのコードを押さえると、ギターはいつもまるで鳴らずにピキピキと悲惨な音をたてるだけなのだ。

カメハメハ大王の歌が似合うような白土の浅黒い指先が名曲「天国への階段」を奏でる。イントロが終わり、歌のパートが始まるが・・・兄も白土も歌わない。

「めろりん、お前、この曲よう歌わんの？」

「俺はベース担当やっちゅうねん」

「ほな、チャイナ・グローブは？」

「どなんやっけ？」

「これやん」

曲調ががらりと変わる。暗くもの悲しいブリティッシュロックから、陽気なアメリカンロックへ。

七フレットあたりからはじまって、五フレット・四フレットと、徐々に音程が下がっていくコード進行。これまたバレーコードである。

「あかん、知らんわ。リッスン・トゥ・ザ・ミュージックやったら歌えるけどな」

「あれは俺コード知らんわ・・・ミカバンドのタイムマシンはどうや？」

これも明るいロックンロール調の曲。六弦全体を押さえた白土のひとさし指が、今度はだんだん上がっていくコード進行。

「声でえへんって。女ボーカルの曲やんけ、これ」

「しゃあないなあ。ほなジェフ・ベックいこ。レッド・ブーツや」

「ほなおれはリズムいこか。ラナダ・マイケル・ウォルデンに挑戦じゃ」

匠が両手で太股をたたきながら変拍子の複雑なリズムを再現する。マイケル・ウォルデンというのは確かジャズ系のドラマーで、確かジョン・マクラフリンのマハビッシュ・オーケストラにいた人で・・・と早紀が遠い記憶をたどっているとき、白土の太いひとさし指がまたネックの中程を押さえ、へんてこなバレーコードを作っている。

ああそうだ、ジャズの人こんなへんてこな指のコードが好きなんだっけ。

早紀がそう思ったとき。

何かはじけるような音とともに部屋じゅうのすべての電気が消えた。(21:15)

3

「おい、今日はクリスマスとちゃうんかい。なんで電気消えんねん。それともお誕生日ケーキのろうそくでもでてくるんか？」

盛り上がってきたところで演奏を中断させられた白土が不満気に言う。どうやらこの野蛮人はクリスマスがイエス・キリストの誕生日であることすら忘れていているらしい。今年が本当に二千数回目であるのか、それが本当に十二月二十五日の出来事であったのかは別として。

「どっかのアホがブレーカー飛ばしたんとちゃうか？俺、ちょっと見てくるわ」

匠が腰を浮かせながら言う。冗談ではない。早紀は思った。兄がいるから早紀にとってのこんな未開の地にも耐えられるのだ。兄がいない状況で、しかも停電中で、しかもクリスマスイブ。もしも白土が妙な気でも起こしたら、末代まで語り継がれる恥となる。

「兄さんは白土さんと話ししてなよ。ブレーカーだったら私が見てくるから」

ぴょこんと立ち上がりながら、今夜は「磐田匠の妹」以外のなにものでもない小柄な女警部は言った。

廊下は突然の停電のせいか、しんとしている。配電盤は廊下のつきあたりにあった。

この山麗館は二階建ての木造アパートである。一階は食堂と大風呂、洗濯室、管理人夫妻の部屋が割り当てられており、不良住人たちの部屋は全て二階にある。もともところは学生たちのなかでもバンカラたちが集まる寮で、昔は部屋ごとの仕切りもなく、雑魚寝があたりまえだった。それが時代の流れで部屋が仕切られ、相部屋制から完全個室制になったらしい。今ではユニットバス・トイレが各部屋につけられている。

南北に通る廊下を境に、西側が奇数番号の部屋。東側が偶数番号の部屋。

部屋番号は奥、すなわち突き当たりにあるブレーカーの左側が201、その正面が202、201の隣が203・・・となっている。

色黒の酋長の部屋は208号室。東側の一番南の部屋だ。一階からの階段はフロアの南東の端、白土の部屋の横にある。階段の正面は匠の部屋である209号室である。

見ると、西側の部屋は異常ないようで、五部屋のうち二部屋は電気が灯っている。廊下にも陰気くさい、薄暗い灯がついているところをみると、電気が消えたのはどうやら東側の四部屋だけのようだ。

目的のボックスの前にはすでに「にわか修理工」が立っていた。

男は204号室の大学生、小野 海。彼の後ろにはぴったりと少女が寄り添っている。兄だったら彼女の存在を認めたこの瞬間に失語症に陥るだろう。建前だけは女子禁制のこのアパートの中である。精神的に無防備になっている場所であるだけにこういう状況に遭遇した兄のパニック状態は容易に想像がつく。

「メリークリスマス」

青年の頭越しにブレーカーボックスを見上げていた彼女に早紀は声をかけた。

「あ、どうも。メリークリスマス」

少女はぺこんと頭を下げた。背の高い青年は配電盤のスイッチをチェックしている。

「どうかな、すぐ直りそう？」

「ブレーカーが落ちただけみたいですよ。また隣の奥村が無茶したんでしょう。あの部屋、なんか電気製品が多いみたいだから」

細い右手がブレーカーのスイッチに伸びる。親指の腹から第一関節のあたりにかけて、大きなタコができてるのが見えた。このタコは兄の右手にもあった。ということはこの小野という大学生もベースを弾くのだろうか。早紀は高校時代、ベースを弾いていた兄の姿を思い出しながら思った。

修理工が小声で続ける。

「奥村の奴、エレキやるでしょ。しょっちゅうブレーカー落とすんですよ。それでいて今日もそうだけど、出てきもしない。クリスマスにバラの花束いくつももらったりして、チャラチャラしてる。本当、嫌な奴ですよ」

ブレーカースイッチが一度オフにされ、再び「入」の位置に戻される。

東側の部屋から冷蔵庫の低いモーター音や蛍光灯が点灯するときの小さくしかし甲高いガラスの音など、雑多ではあるが微かな音が一斉に鳴る。すこし遅れて住人たちの歓声。

白土の部屋からも「おおっ」という野太い野蛮人の嬌声が聞こえた。(21:20)

しかし。

明かりが灯った後も、ただ一部屋、沈黙を続けている部屋があった。

202号室。件の高校生ギタリスト、奥村博之の部屋である。

山麗館全体がにわか騒がしくなったのはそれから三十分ほどしてから(21:50)であった。

早紀たちが部屋に戻った後、しばらくしてからやってきた奥村の彼女と名乗る少女が、彼の部屋の前で大泣きをはじめたのがきっかけだった。

奥村の部屋の前に立つその少女に最初に気づいたのは203号室の大学生、菅田正夫であった。彼は近くの大学のラグビー部に所属する、骨の髄まで体育会系の青春野郎である。この日も彼は練習を終え、部活の友人たちと食事した後、折しも降り出した雪の中（20：15）を駅からランニングをして寮に戻った（20：45）らしい。彼は帰宅してからも部屋で延々とダンベルで筋力トレーニングをしていた（21：45）。いい汗をかいて大風呂に入りに行こうと部屋から出てみると（21：50）、202号室の前で高校生くらいの女の子がしくしく泣いている。気になって声をかけてみると彼女は急に取り乱したように泣きじゃくりはじめた、ということらしい。彼女の声で早紀と匠が「南サモアの酋長の部屋」からでたときも、少女はまだ泣き続けていた。

「ここじゃ何やから、俺の部屋にこの子を連れて行ってやってくれへんか。ここの住人どもときたら性格は別としてルックスに問題があるやつが多すぎるからな」

呆然と立ち尽くす菅田を見て早紀は兄の言葉に納得した。ぐっしょりと汗に濡れたランニングに短パンの男。その肌は夏の日焼けと汗でぬらぬらと光り、まるで未開の大陸に住む首狩り族の戦士のようにしか見えなかった。

こざれいに片づけられた兄の部屋でホットココアに口をつけた少女、月村由美は、いくらかは落ち着いた様子で、今日のことをぽつぽつと話した。

「今日の夜は君のために時間をあけておく。午後八時に駅で逢おう」

奥村と電話で約束したのは午後五時（17：00）のことだった。約束の時間になっても奥村は駅にはこない（20：00）。雪が降り出した。クリスマスイブの夜である。携帯にも部屋にも電話をかけてみたが、まるでつながらない。一時間ほどして（21：00）、彼女は奥村の部屋に行こうと決心した。

彼女はこの下宿の停電騒動のことは全く知らなかったから、彼女がここに着いたのは電気が復旧してからということになりそうである。

奥村の部屋には電気がついていて、出かけてはいないということだ。少女はここで考えた。クリスマスイブの夜である。奥村は部屋にいるらしい。電話にはでない。ノックしても返事はない。部屋の中は妙に静かである。奥村はバンドをやっているだけあって、けっこうもてる。かなりもてる。クリスマスイブの夜である。扉を開けると、女ものの靴があったりするかもしれない。しつこくノックして、バスタオルをまいただけの奥村が出てきて、「すまん、今とりこみ中やねん」とか言ったらどうしよう。バスローブをまとった女がでてきて「誰、あんた」とか言ったらどうしよう。くどいようだが、クリスマスイブの夜である。妄想が勝手に暴走をはじめ。涙腺がゆるんで目がうるうるしてくる。

そんなとき、背後に人のけはい。オスフェロモンをまき散らすような格好で、首狩り族の戦士が立っていた・・・

「そりゃあ、普通泣くわよね、高校生の乙女なんだから」

早紀にとっては不本意ながら、場所はサモアの酋長の館に戻っている。

クリスマスイブ・少女突然泣きわめき事件の特別捜査本部がこの未開の地におかれたため

ある。残念ながら早紀にとって居心地の良い兄の部屋は、月村由美とさきほどのわか修理工・小野 海といた少女、伊豆景子が使用している。

伊豆景子は明らかに情緒不安定な月村由美の介抱役を買ってでてくれた。クリスマスイブだというのに奇特的な娘である。

女性二名が匠の部屋を使用しているということは、自動的に兄はその部屋に入れないことになる。かくして早紀たちは再び蛮族の歓待を受ける身になったというわけである。

「ところでさっきのかわいい娘、景子ちゃんやったかな、ええんやろか。彼氏ほっといて」
珍しく酋長が気のきいたことをしゃべる。

「それがね、あの娘、小野さんの彼女とかじゃないみたい。バイトの配達でここに来たんですって」

「配達って何やろ。ピザか何かやろか」

「もっといいものですよ。お花の配達ですって」

「花の配達かいな。何や、食えるもんやないんか」

「あの娘のバイト先ゆうのは駅前のウチダフラワーやろな。クリスマス時期に花の宅配やってるとこや。今日の夕方にもここに来てたぞ。まあ、俺やお前には縁のない店やがな」

兄が酋長をからかう。

「お前、そなんん言うけど、俺はお前よりはよっぽど花屋には行ってるで。お前はどっちかゆうたら舞台とかで花もらうばかりやろ。俺は花を買う側や。花いうのはもらう側は店には行かんでええけど、買う側は店まで行かな買えんもんや。つまり俺のほうが花屋に出入りしてるわけや。とゆうことはこの後、景子ちゃんをお茶に誘う資格があるのはどっちかというとお前より俺やろ」

「別にあの子を誘うとか誘わんとか言うてへんがな」

「そやな。お前は女がらみの楽しい遊びには寄られへんからな」

「ほっとけ、アホ」

兄と酋長は楽しそうに濃い漫才をやっている。

そうこうしているうちに首狩り族の戦士が長髪のニセ木村拓哉みたいな若者を連れてやってきた。彼は二〇五号室の鷹尾和正という。二人とも泣きだした少女、月村由美のことを心配して様子を聞きにきたという体裁をとってはいるようだが、実のところは花屋のバイト伊豆景子のことが気になってしかたないようだ。

「ニセキム拓」は「首狩り族」と同じ大学に通う二回生。「修理工」の一学年下になる。「首狩り族」と同じ学年らしいが、「首狩り族」は一年浪人しているらしいので年齢はひとつ下、ということらしい。

学年や年齢が結構重要な意味をもつ年代らしく、会話の導入から「花屋」の年齢の話になっていた。刺身のツマのように月村由美の年齢も話題になったが、酋長は

「あの小さくて丸い子か？高校生やろ？」

と一言で終わらせてしまった。

やがて酋長の館の会話は、自然ななりゆきで「小さくて丸い子」が訪れた部屋の主の話へとシ

フトしていった。

「あいつ何しとんねんやろな」

「部屋の前であんだけ大騒ぎしとんの顔もださへんねんからな」

「やっぱりアレしてんのとちやいます？」

「そうかなあ」

「そらそうですわ、クリスマスイブやし」

「そらそうでしょ。ふつうやりますって。イブやねんから」

「ほなあの子ビマルはどういうことやろ」

「そらダブルブッキングちやいますか」

「はちあわせのメッカゆうくらいで」

「バービーボーイズかいな。古うー」

「でも、留守ゆうことも考えられますね」

「それはちゃうやろ、留守いうことはないやろ」

「ちやいますって。きっと留守ですって」

「そやな。留守やったらそらでてこおへんわな。留守やったんやろか」

「ちゃうちゃう、留守とちゃうって」

「そやで、留守なわけあらへんやないか」

「ちやいますって」

「ちゃうちゃう」

関西弁の洪水の中でひたすら耐えていた早紀だったが、我慢しきれずについ口が動いた。

「確かめに行けばいいんじゃないの？」

三人の純関西人と、一人の元関東人の視線がひとりの女性に集まった。

「おるやん、現職婦警が」

酋長がつぶやいた。

結局「ギタリスト」宅の搜索は現職婦人警部・早紀と元警察官・匠の両名が拝命した。

時刻はもう十一時近い。充分に非常識な時間ではあるが、いたしかたないところである。

「ギタリスト」の在・不在を確認しないことには「チビマル」も「景子ちゃん」も帰ることはできない雰囲気になってしまっているからだ。

202号室のドアは早紀が呼びかけても、やはり沈黙したままだった。大家から借りた鍵を使って部屋のドアを開く。すんなり扉は開いた。正面には大きな窓があり、そこには飾り格子がはめられている。窓の外には都賀川が流れているが、寮そのものが川崖の上に建てられているため、川面までは百メートル近くありそうである。ちなみに格子は昔住んでいた大学生が窓からの投身自殺をはかって以来、とりつけられたそうだ。

綺麗に整頓された室内。電灯がつけられているため、室内の様子がはっきり見てとれる。室内は物音ひとつしない。やはり留守なのだろうか。まあ、若い男女が裸でいちゃいちゃしていなかっただけでも肩の荷がおりたような気はするけれども。

それにしても、同じ間取りでこうも違うものなのだろうか。サモア族の酋長部屋とは大違いである。こんなに広い部屋だったんだ、と思わせるほど家具調度品が少ない。あるものも機能よりはデザインを優先した感じのものばかりだ。部屋の主はよほどのきれい好きで、几帳面な性格なのだろう。

早紀と匠は部屋の中へと入った。

窓の正面には大きなギターアンプがおかれている。百ワットくらいだろうか。もしこの中が空洞なら早紀がすっぽり入ってまだ余裕があるくらい大きさがある。

兄はアンプの前で渋い顔をしている。

「こんなことしてるから、スピーカーが痛むんだよ。バカだね、こいつ」

見ると、ボリュームをあげたままプラグを抜いたらしく、スピーカーからは小さなノイズ音が聞こえている。

「最近の若いやつらはこういう基本的なことを知らずにバントなんかやってるから駄目なんだよ」

匠はギタースタンドに立てかけられたフェンダーストラトキャスターのギター弦を、向かって左から右にしゃらんと鳴らしてから立ち上がった。アンプを通さない弦そのものの音が、高音から徐々に低音が加わって不協和音になって、やがて消えた。

兄は早紀と二人きりのときは標準語で話す。早紀にとってはまるで兄と自分の言葉が、二人だけにしか伝わらない特別な言葉であるかのような気がするときさえある。

「ところでどこに言ったのかな、この部屋の主は」

「やっぱり外出でもしてるのかしら」

「それはないな。ここに部屋の鍵が落ちている」

匠はアンプの前にあったキーホルダーを拾いながら言った。元警察官は続ける。

「それに俺たちがいた部屋の前を通らずに階段を降りることはできないだろ？」

それはそうだ。早紀はギターの音がしているときに白土の部屋に入ったし、ドアはずっと開け放してあった。早紀の記憶の範囲内では、それから階段を降りていったものはいない。

「強烈な音がするからな、ここの階段は」

匠が早紀の記憶を補足するかのようにつぶやいた。

「でも、だとすると、トイレか風呂ぐらいしか・・・」

そのとき、早紀は「ぽつ」と水滴が落ちる音を聞いたような気がした。

兄はまるで重量をもっていないもののような動作で、バスルームに向かった。

バスルームのドアに手をかける。

ドアが開く。同時にバスルームの湿気が室内に流れ込んでくる。

そこには最悪のものがあった。

高校生ギタリスト、奥村博之が全裸で浴槽に沈んでいた。

早紀の判断で奥村は一階の大家の部屋に運ばれ、そこで「首狩り族」と「ニセキム拓」が人工呼吸と心マッサージを続けている。事件性があった場合の現場保存を優先したわけである。

浴槽にはコンセントにつながったヘアードライヤーが落ちていた。

入浴していた奥村が通電したヘアードライヤーを誤って浴槽に落とし、感電したという状況が一番自然である。

しかし今回、事件性の有無を判断するのは、少なくとも早紀ではない。

早紀が一人で奥村の部屋に残っていると、匠が戻ってきた。

「一般の方は立ち入り禁止よ」

早紀はおどけて言った。

「在職期間は短いが、元警察官だ。大目にしろ」

テレビタレントに似た兄が切り返す。

「ところで早紀、奥村の右手、見たか？」

「え？」

「人指し指に傷があった。かなり深い傷だったな。あのケガでギターの練習するのは大変だったろう」

右手人指し指といえば、右利きならギターピックを持つ指である。その指をケガしたとなると、普通痛くてギターなんか弾けないのではないだろうか。少なくとも、普通通りの演奏はできないだろう。

「コンサートも予定していたみたいだな。彼は。そこであわてて当日の曲を変更したんだろう」

兄が指さした先にホワイトボードがある。「一月十五日・甲西高校軽音楽部・新春コンサート」と書かれている。

「彼は彼なりに真剣に音楽をやっていたようだ。高校時代の僕みたいにね」

アンプの上にはたどたどしい字で曲目を書いた紙が置いてある。

「全部ディープパープル四期の東京ライブの曲だよ」

ふいに涙がでそうになった。彼はコンサートでギターを弾くことができなくなるかもしれない。

「彼の様子はどうなの？」

「難しいな・・・自発呼吸なしの心停止状態が続いている。今、心肺蘇生をやらせている。五分五分といったところかな・・・」

匠は言葉を止めた。何かを考えているようだ。

「この現場はどうもしっくりこないことが多すぎる。何がどうということはまだできないが、何か違和感があるんだ。・・・警察に先駆けて少し調べさせてもらおうと思っているんだよ」

匠はゆっくりと、言葉を選びながら続けた。

「僕が考えていることが正しければ、これはただの事故ではなく、『事件』の可能性もある」

聞き捨てならないことをさらりと言われて、早紀は戸惑った。

兄の言う通り、だれかがひきおこした事件だとすると・・・

早紀は今夜の状況を思い起こす。

夕食後、奥村の部屋からはずっとギターの音が聞こえていた。ということは、凶行はギターの音がやんだ九時から停電があった九時十五分までの間ということになる。

いや、あの停電がそもそも仕組まれたものだったということも考えられる。停電の闇に紛れて犯行が行われたというのはどうだろう。いや、だめだ。ここの二階のブレーカーは東側の部屋と西側の部屋で回路が別になっている。むりやり停電にしたところで、犯行に有利なほどの闇にはならない。

しかしなぜ犯人は九時という時間を選んだのだろう。

九時というと下宿人たちの部屋への出入りが最も激しい時間帯である。そんな時間に犯行を行って、誰かに目撃されでもしたらどうするのだろう。

それだけのリスクをおかしてまでこの時間が犯行時間に選ばれた理由は何だろう。

あるいは突発的な犯行だろうか。犯人が犯行現場から脱出するために停電が仕組まれたのだろうか。

ならば部屋にあった鍵の問題はどうなる？ 犯人が部屋の合鍵を持っていなかったとすれば、密室殺人ということになる。

いやいや。冷静になろう。早紀は先走りしそうになる自分の推理にむりやりブレーキをかけた。そもそもこれは『事件』なのだろうか？

「兄さん、何か根拠があって言ってるの？」

「それを探したいんだよ。状況証拠ばかりで、物的証拠は少ないからなあ。決定的な何かが出てきたらいいんだけど」

いつのまにか兄は手袋をして室内のあちこちを探しまわっている。

「彼はいつもこの場所でギターを弾いてたみたいだね。アタッチメントがある。フランジャー、ディストーション、サスティナー、ボリュームペダル。おお、ジェットライザーまでではないか。早紀、ちょっと待ってろ」

兄はばたばたと出ていった。匠が騒いでいたあたりを見ると、ギターのアタッチメントがきれいに並んでいる。きちんと整頓された部屋ではあるが、ギター用品だけは片づけられずに出っぱなしになっている。それでもすべての目盛りがきれいにゼロに戻されてあるあたりに持ち主の几帳面な性格がうかがえる。

そうこうしているうちに、兄がギターを抱えて帰ってきた。

「ちょっと弾いてみよう」

完全に兄のペースである。兄は持ってきたギターについているコードの先を筆箱くらいのアタッチメントの入力側に差し、持ってきたもう一本のコードを出力側のプラグに差した。

「あまりこれはやりたくないんだけどな」

と言いながら残る一つのプラグをアンプに差す。ボリュームが上がりっぱなしのアンプは不快なノイズを出した。兄がギターを鳴らす。歪んだギターの音。

「ん、ディストーションは生きてるね。次」

などと言いながら兄はひとつひとつのアタッチメントをチェックしていく。五分ほどで全てのボックスのチェックが終わった。

「音を聞いていてわかったとは思いますが、アタッチメントの電池はどれも大丈夫みたいだね。全て正常に機能している。ということはどういうことなのかな・・・」

兄はギターを抱えたまま出ていった。さきほどの逆で、こんどはギターを持たずにもどってきた。次はまっすぐに格子のかかった窓に向かう。

「窓の鍵は閉まっていない。これ、メモしておいてくれ」

一方的に言ったかと思うと、すたすたとでていった。ほどなくして戻ってくると、早紀に向かって言った。

「今、この建物の中にいる全員を一階の食堂に集めてくれ。一人ずつ話を聞いて欲しい。あと、これもメモしておいてくれ。都合のいいタイミングで雪がやんでくれたようだよ。玄関の足跡は入ってくるものが三つだけ。出ていったものはない。足跡が残ったということは僕らには好都合だね」

「いったい何を考えているの？私には話してくれてもいいでしょ」

「まだ言えないね。早紀の聞き取り調査に先入観が入るといけない」

「聞き取り調査に先入観って・・・私が話をきくの？」

「当たり前だ。現職の警部だろ？」

「何を聞けばいいのかも全然わからないのに。そんなのってひどいよ」

言葉遣いがまるで学生のころのように甘えたものになってしまう。

「大丈夫。絶対に聞いておくべきことはちゃんと整理してあるから。聞いてほしいことは、今日の夕食から例の停電まで何をしてたか。それを証明する人はいるか。これまでに奥村君がギターを弾いているところを見たことがあるか。あと、十二月二十二日から昨日までの夜の予定みたいなものも知りたいな。それくらいかな。あと、世間話程度にギターを弾けるかどうか聞いておいてくれ」

「十二月二十二日って？」

「これは事件当事者全員が知っていることだから先に説明しておくけど、その前日、十二月二十一日に奥村君が指にケガをしたんだ。夕食直前にね。その日は白土と菅田以外の下宿人全員が食堂にいた。僕が考えていることが正しければ、二十二日から各人の行動が事件の鍵になるかもしれない」

そういうと匠は再び部屋を見まわしはじめた。

ハンガーにはちょっとおしゃれなスーツが掛けられている。

勉強机の上にはバラの小さな花束がふたつ。ファンからの贈り物だろうか。

花束の横に、CDショップの黄色い包みが見える。

匠は包みを手にとり、中身をのぞいて驚いたように言った。

「おおっ、パープルのラストコンサートインジャパンではないか。本当にレトロだね、こいつ」

まじめなのかふまじめなのかわからない。これだから男は子供だと言われるのだ。早紀は兄の「これだから女は・・・」という口癖に対抗するように心のなかで言った。

警察が到着するまでに山麗館の住人たちへの聞き取り調査は終わった。

匠は奥村のバンドメンバーから電話で話を聞いていた。

二人は主のいない酋長の部屋で調査の成果を報告しあった。

やはり新春コンサートの曲目は、奥村のケガの当日、変更されたようである。

(変更前の曲目)

レッド・ブーツ (ジェフ・ベック)

チャイナ・グローブ (ドゥービー・ブラザーズ)

天国への階段 (レッド・ツェッペリン)

タイムマシンにお願い (サディスティック・ミカ・バンド)

エンジェル・Oに捧ぐ (オリジナル曲)

(変更後の曲目)

バーン (ディープ・パープル)

ハイウェイ・スター (ディープ・パープル)

ラブ・チャイルド (ディープ・パープル)

ワイルド・ドッグ (トミー・ボーリン)

スモーク・オン・ザ・ウォーター (ディープ・パープル)

(以上全てアルバム『ラストコンサート・イン・ジャパン』のアレンジ)

エンジェル・Oに捧ぐ (オリジナル曲)

変更された曲はどれもバンドのかつてのレパートリーで、奥村のパート以外は問題なく演奏できるものばかりらしい。今日の午後八時から近くの倉庫で、奥村の負傷後はじめての練習をする予定だったが、倉庫側の都合で急遽中止になったようだ。

中止になったのは午後四時半ごろ。奥村はその連絡をうけてチビマルとのイブのデートを決めたようである。

ちなみに奥村にとっての本命はやはりチビマルで、彼女以外の女性は今のところ眼中にない様子だったそうだ。つまり、チビマルの泣きだした原因というやつは彼女の思い過ごしだったということになる。

早紀のほうの報告はかなり長いものとなった。

早紀の報告をもとに匠が作成したメモは以下のようなものだった。

(山麗館住人の当日の行動)

① 201号・森川康之 六甲大学三年。

十二月二十一日から、サークルの友人とスキー旅行に出かけていて不在。

十二月二十五日帰着予定。

② 202号・奥村博之 (ギタリスト) 甲西高校三年

朝からギターの実習をしていた模様。アンプを使っている練習をはじめたのは午後から。午後五時ごろ、管理人夫妻に夕食不要を伝えるに部屋から出る。このときの姿は浦上・白土に目撃されている。その後、部屋に戻って再びギターの実習。ギター音は断続的に続き、最終的に音が止まったのは午後九時ごろ。午後九時十五分ごろ、ヘアードライヤーを浴槽に落とし、感電したとみら

れている。

③ 203号・菅田正夫（首狩り族） 甲西大学二年

午前九時ごろラグビー部練習のため外出。練習後、部員たちと食事をし、午後八時四十五分頃帰宅。帰宅してすぐ、鷹尾と一緒に筋トレをしようと呼んでいる。結局、ひとりで筋トレ。九時四十五分頃のトレーニング終了まで誰にも会わなかったが、トレーニング中の「フン、フン」とか「ンアー」とかいう気合の声は隣室にいた鷹尾・浦上が聞いている。九時五十分頃部屋を出たときにチビマル泣き叫び事件が発生。

停電のことは西側の部屋でもあり、またトレーニングに集中していたこともあったので、知らなかった。

チビマル泣き叫び事件の後、廊下で彼女を介抱する伊豆景子を見かけ、そのかわいさに感激。風呂に入るのも忘れて報告のため鷹尾の部屋へ。それから二人揃って酋長の部屋へ。

二十二日から昨日までは、多少の時間のずれはあるものの、今日と同じような行動をとっていた。寮の食事は彼にとってあまりにも少なすぎるので、夕食なしの入寮契約をしている。そのため、奥村が指にケガをしていたことは知らなかった。

奥村とは同じ学園の高等部・大学部なので、学園祭でステージを毎年見ている。

ギターは触ったこともない。尚、寮に入る足跡のうち一つは彼のものである。

「ギターオタクの暗い奴」というのが菅田の奥村評。

④ 204号・小野 海（修理工） 六甲大学三年

風邪ぎみのため、一日寝込んでいた。あまりにも調子が悪いので、夕食もキャンセル。六時以降は断続的に友人と電話をしていたが、部屋からは一度も出なかった。午後九時十五分ごろ、花屋こと伊豆景子からの配達の花を受け取ったときに停電騒動が起きた。ブレーカー復旧の際、様子を見にきた磐田早紀と会話を交わす。そこから二十分くらい、大学の後輩として知り合いの伊豆景子と話をしており、伊豆景子が部屋をでた後は再び友人と電話。

二十二日からは、大学サークルの合宿で不在。二十三日深夜帰宅。

奥村とは挨拶を交わす程度の仲なので、彼がギターを弾く姿はみたことがない。

小野本人はエレキベースなら弾けるがギターは弾けない。

「高校生のくせにギターなんか弾いて、ちゃらちゃらしている奴」というのが小野の奥村評である。

⑤ 205号・鷹尾和正（ニセキム拓） 甲西大学二年

同じ大学に通う彼女とイブのデート。彼女のバイトの都合で午後五時頃デートを切り上げ、帰宅。夕食を寮でとり、そこからはずっと隣室の浦上とテレビゲームをしていた。八時五十分頃、帰宅した菅田がトレーニングを誘いにくるが、ゲームが盛り上がっていたため、断る。十時頃、浦上が自室に戻り、入れ替わりに菅田が部屋へ。伊豆景子のお話を聞き、彼女とお近づきになろうと、寮の主、酋長の部屋へ乱入。

二十二日からは、というよりも彼は基本的には夕食以後は外出をしないタイプのように、ずっと寮にいた模様である。

ギターについて。「僕、奥村師匠にギター教えてもらってました」と言い切り、自信満々で彼

が手にしたギターからはへろへろの音でドレミファソラシドが流れた。レパトリーは今のところスモークオンザウオーター一曲とのことである。

「奥村師匠を亡くしたら、誰が僕を女子高生との合コンに誘ってくれるんですか」と落ち込んでいた。

⑥ 206号・空室

⑦ 207号・浦上 哲 鷹羽外国語大学一年

寮でも有名なアイドルオタクでゲームオタク。休みの今日は一日じゅう某美少女ユニットのCDを聴いていたらしい。昼食前と夕食前に食堂で奥村を見かけている。夕食後は鷹尾がデートの帰りに買ってきた本日発売の某新作ロールプレイングゲームを楽しみ、十時頃、そのゲームを鷹尾から借りてこんどは自室でゲームを続けていた。十一時半頃、周囲の騒ぎをよそにゲームを完全制覇。それがいかに偉業であるのかを嬉々として早紀に説明した。

鷹尾同様、帰宅後はほとんど外出しないタイプなので、たいてい部屋にいるらしく、当然二十二日からも自室でアイドルビデオを見たりゲームをしたりしていた。

奥村にはアイドル曲のギターカラオケテープを作ってもらったりしていたらしい。

「あいつ、すごいんですよ。楽譜なしでも音を聞いただけで演奏することができたんですよ。一度、新曲のテープを貸してあげたら、ものの十分くらいでその曲を目の前で弾いてくれました」という浦上は、当然ギターは弾けない。

⑧ 208号・白土秀樹（酋長） 株式会社丸太トラベル勤務

本日は半日の休日出勤。帰宅は午後四時半頃。帰宅したとき、奥村の姿を目撃している。午後六時からの寮の夕食をたいらげた後、会社をクビになってしょげかえっていた匠をみて「励ます会」を主催する。宴は夕食直後から始まり、八時に早紀が入るまでは匠と二人で盛り上がっていたそうである。

白土も基本的には夕食後は外出しない。二十二日からも夜はずっと寮にいたそうである。

ギターは弾ける。セミプロとしての活動歴あり。

⑨ 209号・磐田 匠（めろりん） 本日より無職

会社でクビを宣告され、うちひしがれて午後五時半ごろ帰宅。そこからは白土と同一行動をしていた。

⑩ 伊豆景子（花屋） 六甲大学一年

夕方五時半ごろ、奥村の部屋に花束を届けている。匠はそのときの彼女の姿を見ている。花束は直接奥村に渡している。そのときは匠と奥村以外誰もみなかったとのこと。

そこから店に戻り、勤務。午後九時までの勤務予定だったが、男の声で九時半までに花を届けてほしいとの注文が入り、自宅に近い彼女が届けることになった。注文主は小野で、彼が支払いのため部屋の奥に財布を取りにいった際、停電となった。停電復旧後は、勤務後ということもあり、小野と話し込んでいたようであるが、チビマル泣きわめき事件が発生したため帰るタイミングをなくし、そのまま寮にいたところに奥村の一件が発生した。

尚、寮に入る足跡のうちひとつは彼女のものである。

⑪ 月村由美（チビマル） 桐影学院女子高校二年

山麗館に着いたのは午後九時半ごろ。泣きわめいたのは午後九時五十分ごろである。寮に入った足跡のうち、最後のひとつが彼女のものであることが確認されている。

⑫ 管理人夫妻

午後三時ごろから夕食の仕込みに入る。午後五時ごろ、奥村が夕食の不要を告げにきて、彼と少し会話をした。彼はそこからずっと部屋にこもりきりだったので、寮内で彼と最後に会話を交わしたのは管理人夫妻ということになる。六時の夕食の準備を済ませ、自分たちも自室で食事をした後、七時から片づけ。七時半ごろまでかかり、そこからは夫婦そろって部屋でテレビを見ていた。今日は二階にはあがっていないそうである。

二人が捜査会議をひらいていると、酋長が部屋に戻ってきた。

「おまえら、わしがおらん間に部屋のもんに悪戯とかしてへんやろな」

「アホ、誰がそなんするかい。それよりどないしたんや。関係者は下の食堂におらなあかんやろが」

「うるさい、ボケ。それよりビデオじゃ。今日は深夜の映画があんねん。ジョンウーの香港時代の名作や。こんなことになるとは思っへんかったから、録画の用意してなかったんや」

酋長が部屋のすみの古いビデオデッキにかけよる。

匠と早紀が打ち合わせを再開しようとしたとき、階下が騒がしくなってきた。ようやく警察本隊が到着した模様である。

二人が部屋から出ようとしたとき、背後で酋長が「ぎええええっ」という叫び声をあげた。

「録画でけてへん。今日のミュージックテレビスペシャル、夕食前にちゃんと録画予約しとったのにいっ」

「録画セットボタン押し忘れてたんじゃないの？間違えて他のボタンもいっしょに押しちゃったとか。白土さん指太いから」

「そうやろか。ショックやなあ。クイーンの東京ライブやる予定で、楽しみにしとったのに」

白土の大騒ぎを横で聞くとはなしに聞いていた匠が口を開いた。

「白土、そのテレビ、何時からやったんかな？」

「七時からや。こんなんなるんやったらお前なんかほっといてテレビ見とくんやったわ・・・わっちゃあ、タイマー止まって時刻合わせモードになっとるわ」

この言葉を聞いた瞬間、匠は考えこむように黙り込んでしまった。

「お兄ちゃん、どうかしたの？」

「そうか、やっぱりね、そういうことだったのか」

きょとんとして兄をみつめる早紀にかまわず、匠は言った。

「関係者と警察の責任者を食堂に集めてくれ。犯人と犯行のトリックがわかった」

ここで読者の皆様に改めて注意を喚起します

はじめに、不遜にも皆様に挑戦状のようなものを書いてしまった私をお許してください。
敬愛して止まない幾多の諸先輩がたがこれまでされていたように、私もここで宣言致します。
私は皆様の推理力に挑戦します。

推理のルールです。

① 奥村殺人（未遂？）事件は犯人の単独犯です。

共犯はいません。知らないうちに犯行に加担していた人物もいません。

② 事件の実行犯以外はこの事件のアリバイ調査に関し、虚偽の証言はしていません。

③ プロローグ部分を除き、皆さん（または早紀または白土）が知り得た情報は、全て磐田 匠も
知ることができたと考えてください。

④ ここでは動機部分は一切考慮していただかなくて結構です。

さて推理していただく内容は・・・

① 犯人の名前と、磐田 匠が犯人を論理的に推理したプロセス。

② 犯人の考えた物理的トリックとアリバイトリック

以上です。

こういう作品の常として、謎を解く手がかりは本文中に、「あからさまな」形で書き込まれて
います。

中途半端にページが余ったのでヒントを少し。

① 冒頭のプロローグに書いてあるように、犯人はかなり綿密な計画をたててこの日に臨みました。
。ということは、アリバイトリック・密室（？）トリック・事故偽装トリックとも、ある程度工夫
したものです。

② 犯人が予測不可能だった事実から、事故偽装計画が見抜かれます。

犯人と推理される人物が予測できたこと、できなかったこと、知っていたこと、知らなかったこ
とを整理すればかなりわかりやすいかもしれません。

③ ロックをよく聴いて、バンドなんかもする人なら、奥村君のバンドの曲目リストでピンとくる
かもしれませんが、特定の知識をもつ人しか謎がとけないというのもアンフェアなので暴露しま
すと、変更前の曲目はすべて作中のバレーコードという指遣いをしなければ弾けないものばか
りで、なおかつギターの高比重の曲ばかりです。ということは、奥村君の指はバレーコードを
弾けない状況だったということになります。

④ 時間帯べつに各人の行動を整理するとわかりやすいかも、です。

それでは皆様、引き続き物語後半をお楽しみください。

6

食堂には事件関係者が集まっていた。匠の指示で、花屋とチビマルは別室で控えている。

いかめしい顔をした鬼瓦のような男が、食堂全体を見渡せる正面の位置に仁王立ちしている。磐田早紀警部が到着するなり、つくりもののようなへの字の口がゆっくりと形を変え、もっちゃりと動いた。

「おたくが通報してきはった、本庁の磐田警部殿ですな。お噂はかねがねうかがっております。六甲署の鷺見と申します。巡查長を拝命しております」

丁寧ではあるが、明らかに敵意のこもった態度である。拝命してオります、という独特のアクセントから、彼の郷里は京都のようである。

「まあ、我々所轄が現場に入るまえに警部殿がいろいろとお調べにならはったようですので、我々としては出る幕もありまへんが、とりあえず形式どおりの調べにだけは協力してもらわんと、こっちも格好つきまへんさかいな。よろしゅうお願いだけしときますわ」

「こちらこそ、よろしく申し上げます」

早紀はぺこりと頭をさげた。

「電話では事件の可能性あり、いうことでしたな。強殺の担当もこっちに向かっていますんで、お話はそれからにさせてもらうということで、それまでにこちらはこっちの仕事させてもらいまっさ」

慇懃に言い放つと、鷺見巡查長はどかどかと食堂から出ていった。

重苦しい沈黙がさして広くもない食堂を支配する。

「事件の疑いって、この中の誰かが奥村をやってもたいうこと？」

外見のわりに小心者の首狩り族が言った。

「そんなアホな。できそこないの推理小説やあるまいし。事故やったんとちゃうんですか？」

アイドルオタクが口をはさむ。

「そやそや。そやかて停電の直前までギター之音してましたやん。ギター之音がやんでから停電までの間に、誰かが奥村に手をだしたやなんて、そんな離れ技できませんて。ここの寮は住人同士の部屋の行き来、多いほうやと思うんですよ。そんな危険なことしませんて、普通」

これはニセキム拓。

「そうだね、ここにいる誰かがやったとしたんなら、夕食後、寮生の部屋への出入りが一番激しい時間帯に事件を起こすというのは不自然だよな。誰にも見られないという偶然に頼るしかない。これが計画的なものなら深夜とかの時間帯を選ぶだろうしね。ということは突発的な事件だったのかな、これは」

早紀がひとりごとのようにつぶやく。

「それよりギター之音がやんでから停電前後までの全員の行動を確認してみたらええやないか。アライバイいうやつがない人間、そいつが犯人や」

酋長が建設的な意見を口にした。

「そやかてここにいる人間が犯人ときまったわけでもないでしょ」

「そうやそうや、外部の人間がやったということも考えられるやん」

食堂のあちこちから声のとぶ。

「ところがそれはないようなんです。雪で足跡が残っているんですよ。雪の上には入る足跡が三つ。伊豆さんと月村さんと菅田さんです」

「月村って誰や」

「チビマルのことですやん」

「ああ、あいつかいな」

「菅田さんが寮に帰ってきたのは八時四十五分ごろ。停電前です。伊豆さんが花の配達で入ってきたのは停電直前の九時十分ごろ。月村さんが入ってきたのは停電後の九時半ごろです。停電前から奥村くんが発見されるまで、この山麗館からは誰も出ていないことになります」

「後ろ向きに足跡たどって出たとか」

「推理小説であったやつやな」

「そういう可能性までは考えてないんとちゃいますか？」

早紀は言葉につまった。早紀の横に立っていた影がゆっくりと動いた。

匠である。

自分の視線の動きで考えを悟られないように、サングラスをはめている。

「まあ犯人にはそうやって寮から出て行くという選択肢もあった、いうところでもっと重要な話に移らせてもらおか。まず、これが事件やという根拠からや」

名探偵がここまで言ったとき、食堂の入り口から声がした。

「あーら、そのお話、私にも詳しく聞かせてもらおうかしら。素人探偵さんっ！」

最悪だった。

こうなる可能性に、早紀だけはもっと早く気づくべきかもしれなかった。

入り口に立っていたのは、真っ赤なミニのスカートに網タイツ、胸が大きく開いたデザインのシャツにこれまた真っ赤なジャケットを着た女。

彼女こそ匠の天敵。

六甲署、強殺係警部。杉田由美。

匠は肉感的な女性が一番苦手だ。

「久しぶりだわね、タロちゃん。ちょっとは女の子と話せるようになった？」

こういった扱いにもすこぶる弱い。早紀の予想通り、匠は顔から耳から首筋から真っ赤になっている。短く刈り上げた髪の毛のすきまから見える地肌まで赤くなっている。

「タロちゃん、相変わらずね。真っ赤になっちゃって・・・カワイイ」

「すいません、兄をタロちゃんって呼ぶの、やめてください」

「あら、誰かと思ったら磐田警部じゃないの。あんまり小さいからわからなかったわ」

敵意まるだしである。杉田と早紀はこれまでも何かにつけ反目しあっている。

「じゃあ、めろりんちゃんって呼ぼうかしら。『あのとき』みたいに、ね」

杉田警部の指先がつつと匠の頬をなでた。

匠は微動すらしない。

『あのとき』。

警察史に残る、匠の大失態のそのとき。杉田はまさしくその茶番の当事者のひとりだった。

「それにしても、この部屋、暑いわねえ。ジャケット脱がせていただくわね。大使館でパーティーがあったもんだから、こんな格好で失礼するわね」

ことさらに胸の大きさを強調するようなノースリーブのブラウス。

山麗館の不良住人たちが座る一角から「うおおっ」というどよめきが聞こえたような気さえする。

悔しい。悔しいが、迫力負けである。もともと杉田警部は署でも美形で有名である。顔だちといい雰囲気といい、一番むちむちしていたころの浅野ゆう子に似ている。胸が大きいことでも有名である。普通の婦人警察官なら業務に支障をきたすからという判断で、サラシをまいたりして小さく見せることに腐心するのだが、彼女は違う。

「大きいんだからしかたないじゃない。要は仕事ができりゃいいでしょ」

という理屈で、美形で胸がでかくて、なおかつ仕事ができる婦人警官として今の地位を築いた傑物なのである。

ただし、仕事のやりかたは汚い。でかい胸やむっちりした太股をちらつかせて、自分の成績に有利に働くようにあらゆる状況を操作する。ふざけんじゃないわよ。何が大使館のパーティーよ。何もなくてもいつもこんな格好で署内をふらふらしてみんなに色目使ってるじゃないのさ。

「ああら、どうしたの、めろりんちゃん。黙りこんじゃって」

杉田がことさらに大きな声をあげたとき、早紀は兄の異変にやっと気がついた。

匠がかけていたサングラスのせいで気がつかなかったのだ。

頬をなでられた兄は、「あのとき」のように立ったまま気絶していたのである。

7

食堂でのみじめな敗北のあと、捜査の主導権は完全に六甲署＝杉田に移った。

匠は酋長の部屋でうなだれている。

寮の若い仲間たちの前でのあの失態である。精神的ダメージははかりしれない。

あのとき。

匠が警察史上に残る大失態を演じたときも、杉田警部が直接の原因だった。

いまさらくどくど言ってもしかたない話だと早紀にもわかっている。

杉田は本庁では早紀たちの父・磐田警視と対立する長島警視の派閥に属している。長島警視派にとっては、当時の匠は目の上のたんこぶであった。女性恐怖症にさえ目をつぶれば、頭脳・人格・人徳ともに問題なしというのが匠の評価だったらしい。それが過大なものか、適切なものかは別次元の問題である。

匠が順調に出世し、本庁幹部ともなれば、磐田派の力は絶大なものとなる。

長島一派は陰謀を企てた。匠の女性恐怖症が悪用された。

某国国家首席の来日歓迎式典で、匠は立ったまま失神するという離れ業をやったのけ、国家クラ

スの恥さらしとして警察を迫われた。

そのときも彼の頬をやんわりとなでたのは杉田だったと噂されている。

あのデカ乳女。人をバカにして。

早紀が一人でカリカリしているところへ、デカ乳の手先・鬼瓦がやってきた。

杉田警部から話があるので降りてこいという。

私を呼びつけるなんていい度胸じゃないの。妙なまねしたら噛みついてやるから。

警察官であるという立場を忘れ、決闘場にむかうような心境で早紀は階下におりていった。

食堂の一番目立つ場所に陣取った杉田は、まるで女王のような品格にあふれていた。

「お兄様はお元気？まあどうせ『いつか』みたいにしょぼくれているらっしゃるでしょうけど」

「おおきなお世話です。兄にあんなひどいことしておいて、よくそんなことが言えたものですね」

「あら、私にしてみたら挨拶みたいなものよ、あれは。アメリカ流に再会のキスくらいさせてもらおうかとも思ったんだけど、心臓発作でも起こされたら後が面倒でしょ」

「どうしてそんなに兄を目の敵にするんですか」

「目障りなの。あんたもそうなんだけどね。あんたたち兄妹のことさえなければホントは今ごろ東京の新宿暮らしよ。どうして私が阪神ファンばかりの町で暮らさないといけないわけ？上司の命令とはいえ、勘弁してもらいたいわ。迷惑なの。あんたたちにごちゃごちゃされるのが。わかる？」

デカ乳女は一気にそういうと、大きく深呼吸をしてから続けた。

「ところで用件だけど。推理小説かぶれの夕口ちゃんは、どうしても今回の『事故』を『事件』にしたいみたいだけど、残念ながら現実はそうじゃないみたい。ここの山猿たちにもざっと話を聞いたんだけどね。事件性はゼロ。こんな明らかな事故を事件にしようなんて、ひどい話だわ。お願いだから単純な話をめんどくさいヤマにしないでちょうだい。まああんたにはどうせ磐田警視の助け船がすぐ出るんでしょけど、何だったら長島警視にお願いしてあんたの大事なお兄さんを公務執行妨害か何かの前科者にしてさしあげてもいいのよ」

言葉の端々に厭味が入る。

「でもね、私にも慈悲の心くらいあるの。あなたたちにチャンスをあげる。これが事件であるという明確な根拠を、当事者全員の前で示してさえくれれば、考え直してあげることもくらいはできるわ。どうかしらね。三十分間だけ時間をあげるわ。みんなの前で、名推理を展開できるかしらね、あなたのお兄さんは」

当事者全員の前で、ということは、兄の目前にはデカ乳、景子ちゃん、チビマルが並ぶことになるだろう。無理だ。そんな状況で兄が喋れるわけがない。

「私ではだめなんですか？推理を披露するのは」

「あんたの身長じゃ、役不足よね。ふふ。身長は関係ないか。でもだめ。推理を説明するのは、推理した本人でなくちゃ。名探偵の代役なんて聞いたことないわ。これは警察からの、というか私からの条件。探偵役はあなたのお兄さんに務めてもらいます」

この言葉で、彼女の考えが読めた。もう一度みんなの前で兄に恥をかかせようというのだ。

「じゃあ十分後。みんなを集めてここで待ってるわ。タロちゃんの持ち時間は三十分よ」

デカ乳女は一方的に宣言したかと思うと、ぷいとあちらを向いて鬼瓦との打ち合わせをはじめた。

準備時間はたったの十分。

持ち時間は三十分。

無理だ。ムチャだ。不可能だ。

どんよりとした気分で、早紀は山麗館の階段を上がった。

白土の部屋では、兄が携帯電話で誰かと話をしていた。

耳よりな情報でも入手したのだろう。機嫌はかなり回復したように見える。

「ありがとう、じゃあ待ってる」

そう言って匠は電話を切った。

「犯人の動機部分を追い詰める状況がやっと出揃ったよ。早紀、これからこの事件の全体像を説明する。とりあえず今日のところは探偵役を代わって欲しいんだよ。必要な情報は今から全部説明するから。俺ときたら杉田女史の前でだけは探偵役はつとまりそうにないからな」

「そうはいかなくなってきたのよ・・・さっきの呼び出しだけど、捜査本部の方針が決定したみたいなの。今回の件は事故として処理したいみたい。杉田警部は」

兄の表情に落胆の色が広がった。

「でもね、私たちにもチャンスがあるわ。今から十分後、もう一度関係者全員を集めてくれるの。そこで私たちの話を聞いてくれるんだって。ただし、杉田警部は探偵役にお兄ちゃんを指名したのよ。私が代役をつとめるのはダメだって。どうする？」

困惑の色が一段と濃くなる。

「だめだよ。あの人の前では探偵みたいなことはできないよ。お前もさっき見ただろ。俺、また気を失うかもしれんぞ」

「私だってそう思うわよ。あの女のことだから、どうせ途中でへんてこりんな質問とかして妨害するにきまってるもの」

「そうだよな。でもなあ。どうしようもないもんなあ」

早紀はだんだん腹がたってきた。彼女の怒りは最初のうちこそ無理な要求をだした杉田警部に対してのものだったが、怒りのベクトルは煮え切らない言葉を繰り返す兄へと方向を変えた。

「どうしてそんなに弱気なのよ。兄ちゃん悔しくないの？あんなデカ乳女にバカにされて、はいそうですかってすっこんでるの？兄ちゃんの負けは私の負け。ということはお父様の負けにもつながるのよ。わかってるの？兄ちゃん男でしょ」

「男だからこそ女性恐怖症になっちゃったんじゃないか」

「それよ。その女性恐怖症で私なんか何度も何度も恥ずかしい思いをしてきたんだからね。たまには兄貴としてきりっとしたところ見せてよ。兄ちゃん私がどれほど情けなくて、恥ずかしくて、哀しくて、つらい思いをしてきたかまだわかってないの？私が警察に入ったのは兄ちゃんの代わりなんだよ。私、ほんとはかわいいお嫁さんになるのが夢だったんだよ。お兄ちゃんみたいなすてきな男の人と結婚して、かわいい子供つくって・・・それなのに何よ。兄ちゃんのバカ。バ

カバカバカ」

言いながら涙がでてきた。

兄は何も言わない。

子供の頃は自慢の兄貴だった。ベースを弾きながらステージで歌う兄貴も、劇団で名探偵ポアロを演じた兄貴もきらきら輝いていた。

いつからこうなってしまったのだろう。

あんなに大好きだった兄が、いつからこんなに重荷になってしまったのだろう。

兄妹の間をきまづい沈黙が包み込む。

「ん？」

唐突に早紀はあることに気づいた。

「お兄ちゃん、確か名探偵ポアロ、劇団でやったよね」

「？」

「やったよね」

「あ？ああ」

「登場人物に女性もいたわよね」

「そりゃいたよ」

「観客にも女のひと、いたわよね」

「もちろん」

「前から不思議だったんだけど、どうして芝居だと女の前でも平気なの？」

「んー。どうしてなのかな。衣装を着て集中すると、自分じゃない自分が現れるっていうのかな。演劇の神様が降りてきてるっていうのかな。少なくとも、他の劇団員みたいに意識して演じてる感じではなかったんだけど」

「お兄ちゃん、アドリブの即興芝居とかもやったって言ってたよね」

「ああ、やったよ。基本設定だけ決めて、お互いに役になりきって演技するんだ。そのとき喋った台詞のなかでいいものが本番のときの台詞になるんだよ。そういう作り方の芝居もしたことあるな」

「そのときも女の人と芝居したんでしょ？」

「もちろん」

「平気だったの？」

「だから、芝居してるときの俺は俺じゃないんだって」

「そうか！そうなんだ！」

早紀は突破口を見つけた。

協力者が必要だ。

白土が適任だろう。

残された準備の時間はあとわずかだった。

再び関係者が集められた。

早紀は大きくひとつ深呼吸してから部屋に入った。

部屋の中央の目につくところにはやはり杉田警部・チビマル・花屋が座っている。

山麗館の不良住人たちはばらばらに座っている。匠の殺人事件説の後遺症だろうか、彼らの間にはお互いぎくしゃくした空気が流れているように見える。

早紀はすばやく白土の姿を探した。

彼は食堂の後方隅、理想的な位置に座っていた。

もう一度大きく深呼吸する。

「お待たせしました」

自分の声が震えているのがわかる。

豪奢な身のこなしで杉田警部が振り返った。

「あら、代役は認めないと言ったはずよ」

「兄は来ます。その前に皆さんにご了解いただこうと思って」

「何かしら。ひょっとして時間稼ぎのつもり？」

「いいえ」

早紀はもう一度、いままでより大きく深呼吸をした。

心臓がバクバクいっている。

口から心臓が飛び出しそう、というのはこういう状況のことを言うのだろうか。

「今日はクリスマスイブです。クリスチャンにとって今日は特別な日です」

「奥村くんにとってもね」

いやらしい指摘だ。動揺を隠して早紀は続けた。

「しかしそのイブに不幸にして事故、いえ事件は起きてしまいました。そして私たちのごく近い友人の一人が犯人の犠牲になりました。私たちはこの事件の犯人にこれ以上の罪を重ねさせるわけにはいきません」

「犯人が存在すればの話だけだね」

「今日のこの日に、この事件を解決するにあたって、私たちは特別な舞台装置を用意しました。この特別な夜にふさわしいものを、です。しかしその前に、私はこの部屋のどこかに座っている犯人に、いえ、その犯人の良心にもう一度問いかけようと思っております。どうですか、すべての罪を認めて、今ここで名乗り出るつもりはありませんか？」

早紀は住人ひとりひとりの顔を見渡した。

青白い顔色のアイドルオタク。

じっと何かを考えているかのような首狩り族。

おどおどと周りを見まわすニセキム拓。

力強く早紀を見つめ返す修理工。

兄の推理どおり本当にこのなかに犯人がいるのだろうか。

チビマルは真っ赤な目でときどきしゃくりあげている。

花屋は心細そうに少し目を伏せている。

管理人夫妻は不安な心情を押さえることができない様子で、小声でぼそぼそと会話している。そして杉田警部。

鷲見巡査長。

幾人かの警官たち。

組織に属する彼らだけは好奇と敵意が入り交じったような目で、早紀をみつめている。

真っ赤なリップを塗った杉田警部が勝ち誇ったような表情で言った。

「時間稼ぎね、これは」

「いえ、これは犯人の指摘に至る重要なプロセスです」

「だめ。認められない。ルール違反よ、警田警部。探偵役はあなたじゃない。あなたの哀れなお兄様よ」

ことさらに『哀れな』を強調してノースリーブの警部は言った。

「県警六甲署は、本件を事故と断定します。これをもって・・・」

解散します、と女警部は言おうとした。

そのとき。

みしり、と階段が鳴った。

赤く塗られた彼女の唇は、『解散』の『か』の形のまま固まってしまっている。

また、みしり、と階段が鳴った。

山麗館の住人は、全員がここにいる。ただ一人を除いて。

みしり。また聞こえる。

「謎の解体が始まります」

早紀は宣言した。

みし。みし。

足音は階段を降りきり、廊下をこちらにむかって歩いてくる。

みし。みし。

音に合わせて、食堂の電灯が一つずつ消えていく。

白土の太い指が、その外見に似合わぬスムーズさで電灯スイッチを操作している。

一列。また一列。

最後の一列の電灯が消される瞬間、強烈な光が入り口を照らした。

白土がかつてぶち壊したサイドスタンド型の照明機材。

彼自身の手で再生された機材が、彼の手で今宵の舞台を作り上げている。

強烈な凸レンズの光が食堂の一点を照らす。

真っ白な光の輪のなかには、神父が立っていた。

正確には、神父の格好をした匠である。

もちろんたった十分で神父の衣装など用意できるはずはない。

衣装は酋長の部屋のタンスに吊るされていた学生服を細工したものだ。

首には白土のステージ衣装の白いスカーフを加工したものがかけられている。

神父の帽子のように見えるものは、兄が舞台上で謎の中国人を演じたときにかぶっていた丸帽子。それはスプレーラッカーで黒く塗られている。

手にもっている聖書は、白土の英和辞書だ。

ライブ用の銀髪スプレーで髪を染め、早紀のファンデーションでメイクをしている。

必要なのは本物のメイク道具や衣装ではない。

兄が『神父探偵』を演ずるための舞台装置なのだ。

推理劇の終幕が近づいている。

9

「祈りなさい。そして悔い改めなさい。罪人に向かって天国の門は開かれることはない」

神父はここで陰鬱そうに大きく息をついた。

「過ぎてしまった時間はとりもどすことはできない。起きてしまった事件も同じです。私は警察や探偵ではない。人を捕らえることも罰なすこともできない。私にできることは不幸にして罪を犯してしまったものに、起こしてしまったことを悔い、自らの罪を償う手助けをすることだけです」

「ちょっと待ちなさいよ」

金縛りからようやく解放されたのか、デカ乳警部が声をあげた。

あまりに意外な展開に呆然としていた警察官たちも、催眠術が解けたかのように姿勢を正す。

「何ですか、マダム」

神父は悠然と言った。

マダムと呼ばれた杉田は口をぱくぱくさせている。

「今はまだあなたが発言すべきときではありません。価値のないときに価値のない発言をするのは愚か者のなすことです。そうはお考えにはなりませんか？」

「ちゅ、ちゅ、中止です、こんな茶番、今すぐちゅ・・・」

「お黙りなさい、マダム。このままではこの事件の真実の部分は永遠に閉ざされたままになってしまうのですよ。それでもかまわないとあなたはおっしゃるのですか？」

早紀すら驚くべき迫力である。

杉田は一瞬悔しそうに唇を歪めたが、彼女はすぐに作戦を変更し、次の行動を起こした。

デカ乳女は妖艶な笑みを浮かべ、ゆっくりと神父に近づいた。

「ふ。タロちゃん、無理しちゃって。本当は照れてるくせに」

「マダム。お止めなさい。私は神に仕えるものです。ご自重なさい」

杉田の手がす、と神父の頬に向かって伸びる。しかしその手は彼の顔に届くよりもはるかに早く、神父の優雅な動作で阻まれた。ワルツのパートナーを導くように手首をとり、そのまま杉田を席へと誘う。

「あなたにそんな言葉は似合いません。その瞳で、その耳で、真実の言葉をお聞き入れください。美しいかた・・・」

ややくずれてはいるが、実は美形の神父に耳元で囁かれ、杉田の瞳はうるんでさえいる。

このおばさん、年がいもなくときめいているのかもしれない。早紀は思った。

早紀自身、この仕掛けがここまで有効だとは思わなかった。

匠には杉田が『見えていなかった』のである。

舞台用の照明機材を用意した理由はこれだった。部屋のすべての電気を消す。照明はスポットのみ。光は匠に集中している。匠の目からは杉田の声は聞こえても、逆光になってノースリーブのデカ乳は見えない。杉田の最後の行動も、匠からはシルエットの手が自分の顔に向かって動いたようにしか見えなかったはずである。

性別のないシルエットの腕をとることは匠にとって簡単なことだ。彼は空手の有段者なのだから。

「さて、皆さんに異議がないようでしたら、私の仕事にはいらさせていただきます。これから私は犯人の心に問いかけようと思います・・・私の思いが彼の心に届くことだけを祈ります・・・」

神父は言った。

A) 本件が事故に偽装された事件であると推理される根拠

「まず、私はかなり早い段階からこれは事故ではなく、事故を装った『事件』ではないかと推理しました。その根拠から説明したいと思います。

「まず奥村君が発見された状況です。私と磐田警部が部屋に入ったとき、ギターアンプはプラグが抜かれ、メインスイッチはオンの状態でした。停電前からスイッチが入れられていたということになります。これをみて、私は奇妙な違和感のようなものを感じました。部屋はきちんと整理されています。アタッチメント類もすべてのプラグを抜かれ、すべての目盛りがゼロに戻された状態で置かれていました。思うに奥村君はかなり整理整頓が上手で、潔癖性に近い性格だったのだろうと思われます。

「ギター演奏の知識がない人のために少しつけくわえておきましょう。アタッチメントというのはギターの音色を変化させるための装置です。音を歪ませるディストーションや少し遅れて音を返すエコーやディレイマシン、長音を継続させるサスティナーなどがその代表です。ほとんどのものが角形で、プラス端子とマイナス端子が同じ側についている長方形の電池で動きます。アタッチメントの仕組みはほとんど同じで、音の出口、出力側にプラグを差し込むと電池の消費がはじまり、抜くと止まるようになっています。つまり、使い終わったアタッチメントは出力側のプラグさえ抜いておけば電池は消費しない。奥村君の持っていたもののように、必ずしも目盛りを全てゼロに戻す必要はないのです。しかし奥村君は使用したアタッチメントのつまみを全て戻していた。自分の音というものにこだわりをもつギタリストにはときどきこういう人がいます。自分のセッティングを他人に教えたくないという心理なのかもしれません。

「しかしそれほど几帳面だった奥村君が、どうしてアンプのスイッチを切らずに入浴などしたのでしょう。しかもアンプのボリュームはあげられたままです。アンプのボリュームをあげたままギタープラグの抜き差しをすると、そのときのノイズがアンプのスピーカー一部分に悪影響を与え

、アンプそのものの寿命を縮めてしまうこともあります。ギターを弾く人間ならだれでも知っていることです。しかし奥村君は、ギターを弾き終わりギターをスタンドに置き、アンプのボリュームをあげたままプラグを抜いてスイッチを切らずに入浴した・・・おかしいでしょう。よほど急いでいたのなら、プラグはアンプにささったままでしょうし、ギターはスタンドではなく椅子に置くとかアンプにたてかけたりするとかが普通です。これが例えばボリュームのつまみがゼロにされていてスイッチを切り忘れていたとか、プラグがささったままスイッチが切られていたという場合なら考えられるでしょう。しかし練習を終了したあとどのような手順で片づけたとしても、ボリュームをあげたままプラグを抜いてメインスイッチを切り忘れるというのは普通考えられない。何か意図があったのでしょうか。これが違和感のひとつめです。

「次に私が奥村君の部屋でつけたものについてです。彼の部屋の壁にはスーツがかけられていました。ライブの衣装だったのでしょうか。正月のライブの衣装はクリスマスの時点で部屋に飾られるものなのではないでしょうか。それはいくら何でも早すぎますよね。いうまでもなく奥村君は高校生です。スーツなど持っていてほとんど着る機会がなかったと考えていい。しかし彼の部屋にはスーツがかけられていた。コートや学生服ではなく、スーツが、です。さらに机の上にはバラの花束。レコードショップのCDもありました。まるでデートの準備です。そうです。奥村君はデートの準備をしていたのです。デートの相手は月村由美さんだろうと考えられます。しかしそれにしてもはつじつまがあわない。今日の練習の中止が決まったのは午後四時半。奥村くんは五時に月村さんに電話をし、午後八時に約束をします。そこからすぐ管理人夫妻に夕食のキャンセルを連絡しています。ウチダフラワーに電話したのもこの時間でしょうね。花は午後五時半ごろ届きました。

「ちなみにこの花束ですが、おそらく誰かから贈られたものではなく、奥村君が誰かに渡すために自分で注文したものだと思います。奥村君のような人なら、もらった花束はすぐに花瓶などに入れるか、それがないようなら洗面台とかで水に漬けておいたりするでしょうから。花屋から納品された花束を、花束のまま机の上に置いておくというのは、きわめて近いうちに誰かに渡す予定があるということです。CDもプレゼントでしょうね。レンタルショップのキャリーケースではなくCD店の袋に入っていたこと。中身がディープパープルのラストコンサートインジャパンというのもその理由のひとつです。奥村君が自分で聴くために現時点でこのCDを買うとは考えられない。コンサートにむけて彼はそのなかの曲をコピーし、実際に演奏しているわけですから。新品をあえて買うということは誰かへのプレゼントであると考えてるのが自然です。

「さて私が感じた違和感に話を戻しましょう。五時半ごろ花束が届きました。そこから彼は何をしたでしょう。彼はまたギターを弾きはじめました。アタッチメントを使わず、アンプの生音です。夕食後の演奏曲目はツェッペリンの天国への階段、ジェフ・ベックのレッド・ブーツ、ドゥービー・ブラザーズのチャイナ・グローブなど。これは私も白土君も聴いています。妙ですね。これらの曲はすべて奥村君の指のケガでコンサートの曲目リストから外されていたはずなのですが」

神父はここで部屋を大きく見まわした。

「彼はそこから延々とギターを弾き続けます。最終的に演奏を終了したのは寮の夕食時刻をはさ

んで午後九時頃です。指先の状態が悪いにもかかわらず、月村さんとの約束の時間を過ぎてても彼はギターを弾き続けている。しかも夕食はぬき。演奏されていたのはライブには関係のない曲です。八時ごろから月村さんから何度か電話が入っていたにもかかわらず、その電話を無視してギターを弾き続けているのです。これはどういうことなのでしょう。

「さきほどのアンプの件といい、約束の時間を過ぎてギターを弾き続けていた件といい、まるでそれまでの奥村君とは別人のような行動です。別人・・・ そうです。ここで私はひとつの仮説に行き当たりました。我々が聴いた、夕食後のギターの音。あの音が奥村君ではない別の人が演奏していたものだとしたら、すべての謎が解けるのです」

神父はゆっくりと修理工・小野に近づいていった。

「小野君、あなたは確かバンドでベースを弾かれていますよね。どう思われますか？何か、奥村君と同じく楽器を弾くものとしてのご意見があればいいのですが」

それまで挑戦的な目つきで神父を見つめていた小野は、片頬だけで笑うような表情を浮かべ、ゆっくりと言った。

「それがあなたの殺人説の根拠だということですか。いかにも希薄な理屈だと思うのですが」

小野は立ち上がった。

「磐田さん、いや、今は神父さんですかね。あなたは楽器を弾く人間を少し買いかぶりすぎているようだ。高校生の奥村君程度の子はあなたが展開したアンプの知識やアタッチメントの知識を知らない子はいくらでもいる。ボリュームをあげたままプラグを抜くとか、アンプのスイッチの切り忘れなんかはよくあることだ。高校生のケアレスミスを根拠に殺人事件をでっちあげるのはいささか無謀なのではありませんか？」

「なるほど。では待ち合わせ時間を過ぎてギターを弾き続けていた点についてはどうお考えになりますか？」

「こうは考えられませんか？奥村君は曲目変更をしたくはなかった。そこで変更前の曲目を試しに弾いてみることにした。思いのほか指の調子は良く、それらの曲を弾くことができた。そこから練習に熱中して気がついたら約束の時間を大きく過ぎていた。彼は慌てて風呂に入り、そこで事故にあった・・・」

「よくできたシナリオですね。ギターを弾く人は鳴っている電話に気づかないほど熱中するものなのですか？」

「アンプの音はかなり大きかったですからね」

「指の状態はどうだったのでしょうか。あの指でギターを弾くのはかなりつらかったのではないかと思います」

「あまり大騒ぎするほどの傷でもないでしょう。フォークギターならともかく、ほとんどのロックギターはピックで弾きますから。ピックを持つ右手のケガはさほど深刻なものではないんじゃないですかね」

神父はこの言葉を聞くと杉田警部に向き直った。

「警部。今の言葉を聞かれましたね」

「は、はい」

デカ乳が（なぜか敬語で）答えるのを待って、神父は言った。

「小野君、犯人はあなたです」

B) 小野が犯人であると推理される根拠

室内は水をうったような静寂に包まれた。

「お聞きしたいですね。あんたが私を犯人よばわりする根拠ってやつを」

「よろしいでしょう。説明に戻ります。皆さんには多少の異論はあるでしょうが、さきほど私が指摘した仮説、つまり夕食後は別の人間がギターを弾いていたのではないかという推理をもとに話を進めましょう。

「何故その人物は奥村君の代わりにギターを弾く必要があったのでしょうか。いうまでもなく、それはアリバイトリックです。奥村君の部屋からギターの音がしている限り、彼は生きているものとみなされる。今回のことに事件性があると判断されても、事件の発生はギターの音がやんでからとみられる可能性が極めて高い。だからその前後にアリバイをつくってさえおけば、事件の嫌疑から逃れることができると考えたのでしょう。具体的なトリックはあとで説明しますが、犯人はこのアリバイトリックを実行するにあたって、大きなミスを犯しました。結果、それがために私が犯人を特定する手がかりを残すことになったのです。

「犯人にとって予想外だったことは、奥村君が右手にケガをしていたことです。そのために新年のライブの曲目が変更になった。これによって奥村君が今日、演奏するギターの曲目が大きく変わってしまうことになりました。犯人はこの事実を知らなかった。または知っていたとしてもギタリストの奥村君と同じペースで新曲の練習をすることができなかった。おそらく前者でしょう。

「小野君は奥村君がケガをして以降、奥村君がギターの練習をする夜の時間帯はずっと留守にしていました。小野君はおそらく、奥村君がケガをする前に練習していた曲を聞き、時間誤認トリックを成立させるためにひそかにギターを練習していたのです。

「そして今日。奥村君は朝から練習をはじめました。しかし自分が弾くことのできる曲はいっこうに弾く様子がない。計画の変更はできない。小野君はこのときさきほどのピックの理屈を考えたのでしょう。山麗館の誰かが演奏曲目に不審をいただいたとき、説得するためです。でもね、小野君、ここで君はミスをおかしていたんだよ。ピックを持つ手をいくら工夫しても、奥村君には君が弾いた曲は演奏することができなかったんだよ。

「奥村君は左利きだったんだ」

この言葉を聞いて、小野はびくりと動いたように見えた。

「君にはこの事実が何を意味するかわかるだろう。私がこのことに気づいたのは奥村君の部屋に最初に入ったときだ。ギターをかまえたとき、ギターは低音弦が上にくる。白土君のように右効きの場合は左手でフレット、つまり指板を押さえ、右手で弦をはじく。この状態で上から下に弦を鳴らしていくと低音から高音へと移っていく。

「ギタースタンドに立てたギターもそうだ。右利きのギターをスタンドに立てた場合、低音弦は向かって左側にくる。左から右に弦を鳴らしていったら、低音から高音に音が混ざっていく。し

かし奥村君のギターは左から右にストロークしたとき、高音が先に鳴って、低音がそれに混ざっていった。この弦の張りかたをしたギターを、低音弦が手前にくるようにかまえると、ケガをして使えない右手でフレットを押さえないといけない。そして君が弾いた曲は・・・

「左ききの奥村君が右手人指し指を使わないと弾くことができない曲ばかりだったんだ」

早紀は思い出した。バレーコードだ。

神父はここで長い間をとった。

「私は奥村君の指のケガをみたとき、今日の夕食以降、奥村君の部屋でギターを弾いていたのは奥村君ではない別の誰かだったのではないかと推理しました。その人物が犯人だとすると、犯人はある程度ギターを演奏できる人物で、なおかつ奥村君のケガのことを知らなかったか、または奥村君が左利きであったことを知らない人物です。

「さて、下宿生のなかにコンサートなどでギターを弾いたことがあるのは、白土君しかいないようですね。しかし白土君以外にギターを弾くことができる人は本当にいないのでしょうか・・・実は私もギターを弾けます。私は学生時代、ベースを演奏していたのですが、ある程度はギターを弾くことができます。ベースはギターの低音四弦の音を低くしたものですからね。基本的な指遣いは同じです。学生時代はベース志望の者が少なくて、ギタリスト希望なのに、ポジション争いに破れてベースに回されるといった奴も多かった。私の知る範囲では、十人ベースマンがいたら、そのうちの八人はかなり巧くギターを弾く・・・この意見に対して異論はないでしょうね、小野君・・・」

小野は黙っている。神父は再び口を開いた。

「ケガのことを知らなかったのは奥村君がケガをしたときにいなかった菅田君と白土君。菅田君にはギターを弾くことはできない。もうひとりの白土君は夕食以降、ずっと私や磐田警部と行動をとともにしていました。これでは奥村君の代わりにギターを弾くことなどできません。

「さて、奥村くんが左利きであったことを知らなかったのは誰でしょうね。菅田君は学園祭で奥村君のライブを見ています。次に鷹尾君。演奏技術はさておき彼は奥村君から直接ギターを教わっていた。浦上君はアイドルグループの曲を目の前で弾いてもらったことがあると証言しています。残るのは白土君です。ギターを弾くことのできる彼が『奥村のフェンダーストラトキャスターは弾かれへんかった』と言っている。これはギターが高価だからおそれ多くて弾けなかったのではない。左利き用のギターだったから弾くことができなかったのです。これで白土君も奥村君が左利きであることを知っていたことが証明されました。

「小野君、わかるかね。君以外の寮生は全員、奥村君が左利きであることを知っていたんだよ。それだけではなく、ベースマンである君は、奥村君の代役としてギターを弾くことができると僕は確信している」

しんと静まりかえった室内に神父のリンとした声だけが響く。

神父はここで言葉をきり、大きく深呼吸をして言った。

「これで一つの仮説からスタートした推理が一つの形になってきました。さらに論理を補強しましょう。

「もう一度考えてみましょう。さきほども説明した通り、我々が犯人の思惑通りにギターを弾い

ていたのがずっと奥村君だと考えたとしたら。そうすると、奥村君は午後九時前までギターを弾いていたことになります。となれば事故発生は、自然な流れで、ギターの音が途絶えた午後九時前から午後九時ごろの停電までの短い間だということになる。

「さきほど説明したように、このトリックがアリバイづくりのためのものだとすると、逆の推理として、犯人にはこの時間帯にアリバイがなければならない。そうでなければこういう手の込んだ真似を行う意味がありません。

「この時間はほとんど全員にアリバイがあります。しかし興味深いのは小野君のアリバイです。それまで自室で寝込んでいて誰とも会っていなかった小野君ですが、ギターの音が鳴りやんだ直後から停電をはさんでしばらくの間、アリバイが成立しています。

「まるでこうなることがわかっていたかのようね・・・」

小野は黙って神父の話の話を聞いている。すこしうつむいているため、その表情は読み取れない。「・・・真の犯行時刻はいつだったのか。私にはこの時間の特定がどうしてもできませんでした。しかし実に身近なところに答えが隠されていたのです。それは私たちがずっと居た部屋の中にもありました。白土君・・・」

神父は照明を操作する友人を呼んだ。

「この部屋にいる全員の前で証言してくれたまえ。あー、まず、君の部屋にあるビデオデッキのことを教えて欲しい。品番とか、購入年度とか、そういった基本的なデータだけでいいから」

突然指名された酋長は、大きくて丸い目をぱちくりさせながら証言をはじめた。

「えーっと、ソニーのビデオデッキで、品番とかはわかりません。買ったのはかなり前かな・・・画像がいいからって、ベータのビデオ買ったんやけど・・・今は誰もベータなんか持ってないもんね・・・古いやつやから当然モノラルやし・・・」

神父は大仰に言った。

「今どきベータ！今どきモノラル！」

スポットを操作する白土のほうから、ほっとけアホというつぶやきが聞こえる。

「と、いうことは停電などのあと、自動的に時刻を合わせる機能などはもちろんついていないですね」

「はいはい、ついてまへん。えろうすいませんでしたな」

「時刻合わせ機能がついていない古いビデオなどの場合、停電などがあつたらどうなるのですか？例えば・・・現在時刻とか、タイマー録画予約情報とか・・・」

「ああ、データは全部消えますよ。昔のビデオはたいていそうやから。それで、停電が復旧したら、時計は時刻合わせモードになるか、午前零時のところからスタートするか、どっちかやね。俺のやつは時刻合わせになるけど・・・それがどないしたんや？」

「今日・・・あなたはビデオ録画予約を失敗しましたね？」

「ああ、そうや。お前も俺の指が太いから録画失敗したとか言うんとちゃうやろな」

「いいえ、あなたの指は確かに太いですが、録画予約は失敗していませんよ・・・ところでその番組の開始時間は？」

「夜の七時から八時までや。録画予約したのは食事前の午後五時四十五分くらい。番組名はミュ

ージックテレビスペシャルで、内容はクイーンの東京ライブや。これでええか？あんまり喋らすなよ。恥ずかしいやんけ」

神父は食堂にいる全員を見渡してからおもむろに口をひらいた。

「さてここで興味深い事実が明らかになりました。白土君の部屋で七時から予約されていたはずの番組が、録画されていなかったそうです。これはどういうことなのでしょう。考えられる可能性は二つ・・・白土君の指が太かったために予約ボタンが上手く押せなかったか・・・または午後五時四十五分から午後七時までの間に『停電』があったか、です」

室内に静かな驚きの声が広がる。

「そう、停電は一度だけではなかった。・・・実際の犯行は午後五時四十五分から午後七時までの間に起こった・・・恐らくそのとき、奥村君はギターの練習の最中か、それを終えるかというタイミングだったのでしょう。他の下宿人たちは階下の食堂へ降りているため、二階には奥村君と小野君だけだ。こんなチャンスはない・・・」

「小野君は理由をつけて奥村君の部屋に上がった。そして何らかの方法で彼を気絶させた。薬品で昏睡させるとか、鈍器で殴って気絶させる、などの方法はとらなかつたと思います。病院での自然死以外は例え事件性がなくとも司法解剖される、というのは今や常識ですから。可能性が高いのはスタンガンのようなもので昏倒させた、というところでしょうね。これなら感電だから、司法解剖でも不審な点は発見されない。

「そして風呂に湯を入れ、奥村君の服を脱がせ、浴槽に入れ、通電したドライヤーを浴槽に投げ入れる・・・」

チビマルが声を押し殺して泣きはじめた。しかし・・・事実の解体は続く。

「当然、東側の部屋のブレーカーは落ちます。ただし、この時間なら廊下に出ても誰かに目撃される可能性は極めて低い。小野君は廊下に出て、ブレーカーを元の状態に戻し、再び奥村君の部屋に戻った・・・」

「一度ショートしたドライヤーはそのまま浴槽に落としていても再びブレーカーが落ちるということはありません。小野君は部屋の電気式浴槽のスイッチを保温設定にした。理由はわかりますよね。奥村君の体温が下がり過ぎるのを防ぐためです。

「このまま奥村君の意識が戻らず、死亡と判断されると、遺体は司法解剖にまわされます。司法解剖での死亡時刻は、死後硬直・死斑・直腸温度などから推定されます。今回のようにトリックを用いて、死亡時刻を本来の死亡時刻からずらそうとする場合は、死体を温めたり冷やしたりするケースが多い。今回もそうです。犯行時刻から午後九時ごろまで、奥村君の身体はずっと温められていたことになる。そこで二回目の停電です。浴槽の保温機能はここでリセットされて、午後九時から湯温はゆるやかに下がり始める・・・同時に奥村君の直腸温度も徐々に下がり始める・・・自然に体温低下が演出できるというわけです。

「そのあと、ギターとアンプの細工をして、机の上にあった鍵を持って部屋を出て、外から施錠します。密室の完成です・・・」

ここまで黙っていた鬼瓦が唐突に発言した。

「ちょっと待ってください。どうもワシにはわからんのですが・・・あんたのさっきまでの話

やと、犯人はガイシャの部屋でギターを弾いておったわけでしょうが。この時点で部屋を出て密室にするという意味がようわからん。一旦部屋を出て部屋を密室にしてから、ギターを弾くためにまた部屋に戻ったということですか？どっちにしてもギターを弾き終わったあと、下宿人たちがうろうろしている九時やそこらの時間帯に被害者の部屋から脱出せんとかかんわけですやろ？そないな推理、納得いきまへんな。偶然誰にも見られなかったから犯行がうまくいったとでも言いたいわけですかいなあ？」

「いいえ、このトリックに偶然の入り込む余地はありません。恐らく現実には小野君は午後七時以降、一步も部屋からは出ていないと思いますよ」

「じゃあどうしたっておっしゃるんですか？神父様・・・」

とろんとした目つきで杉田が言った。どうやら彼女は完全に『マダム』になりきっているようだ。

「奥村君の部屋からギターの音がしていたから誰しも奥村君がギターを弾いているものだと思い込んだ。実際は小野君が弾いていたにもかかわらず、です。これと同じことがもう一重の意味で起こっていたのです。我々が夕食後、聞いていたギターの音は奥村君の部屋で演奏されていたものではない・・・そうですね、小野君・・・」

C) 小野の犯行の物理的トリック

「さて、ここでいよいよアンプとアタッチメントの問題に入りましょう。なぜ、犯人はアタッチメントを使わずにギターを演奏したのか。なぜ犯人はアンプのスイッチを切らずにボリュームを上げたままプラグを引き抜いたのか・・・これは偶然そうなったのでしょうか。いや、ひょっとしたらここに犯人の必然が隠されているのかもしれない。

「そう、こう考えることにしましょう・・・犯人はアタッチメントを使いたくても使うことができなかつた。アンプのスイッチを切りたくても切ることができなかつた。ボリュームを下げたくても下げることができなかつた・・・」

「何故なら、犯人は、奥村君の部屋ではなく、自分の部屋でギターを弾いていたからです」

小野の表情がまた少し歪んだ。

「少し考えればわかることです。アコースティック楽器や吹奏楽器ならば、演奏者と音源が別の部屋にいるなど考えられないことです。しかしエレキギターの場合はそうではない。コードの長ささえ充分ならば、アンプとギターは同じ部屋にある必要はない。

「小野君がアンプに施した仕掛けはまさにこれだったのです。アンプにコードを差しこみ、そのコードの端をアンプの正面の窓から一旦外に出す。アンプのスイッチを入れてボリュームを上げる。それから事件現場を施錠して部屋に戻り、自室の窓から手を伸ばしてそのコードの端をとり、部屋に置いてあったギターにつなげる。

「奥村君の部屋の鍵がアンプの前に落ちていたのもこのコードを使ったのでしょうかね。キーホルダーをコードに通し、外からコードを滑らせていけば鍵はアンプの前まで移動します。あとは演奏後、窓から手を伸ばしてコードを引き抜けば、鍵は発見された位置に落ちます。そこからはコードを回収して窓を閉める。窓枠には格子がかかっているのだから窓からの出入りはできないと

判断される。出入り口の鍵は室内だ。いくぶん不完全ではあるものの、これで密室が完成するわけです・・・

「犯人がアンプのスイッチを切ることができなかったのも、ボリュームを落とさずにプラグを引き抜いたのも、こう考えれば説明がつかます。

「アンプのプラグというものはちょっとした力の加減で簡単に抜けてしまうものですからね。ちょっと派手なアクションをただけで抜けてしまうぐらいにね。そうだろう、白土君・・・」

神父は再び自分に照明をあてている男の名前を呼んだ。そうだった。彼はかつて派手なアクションでアンプからプラグをブチ抜いたというエピソードを持っている。アンプのプラグからコードが簡単に抜くことができるのならば、この仕掛けは可能である。

酋長はにんまりと笑って頷いた。

「じゃあどうしてアタッチメントを使わなかったのかしら。同じ要領でプラグを抜くことができるんじゃないの？」

早紀が思いついた疑問を口にした。

「アタッチメントを使っていると、プラグを引き抜くことができないんだよ。アタッチメントというものは床に置いて、足で踏んで操作するものだ。犯人がこのトリックでアタッチメントを使うと、窓の高さとプラグの高さに差がつきすぎて、外からプラグが引き抜けなくなってしまう。さらに言うと、アタッチメントというものはかなりしっかりプラグがはまるような構造になっているし、重量が軽すぎてプラグが抜けるよりも先に本体が動いてしまう。今回は何より事故死を演出しなければならなかったわけだから、奥村君が発見されたときのように、それら機材は整然と並んでいる必要があった。

「そういう事情があって、アタッチメントを使うことができなかったわけだ・・・

「それからの小野君の行動は・・・」

神父が話を続けようとした矢先、小野が口を開いた。

「そこから先は私から話しましょうか？名探偵さん・・・」

挑発的な口ぶりで小野が立ち上がった。

「部屋に戻った僕は、ギターを弾き続けた。途中僕は友人と電話しているが、これは携帯電話のハンズフリー装置か何かを使ったのだろうとあなたは推理したんでしょ？僕は事故を偽装する午後九時ごろまでギターを弾いた。弾きながら花屋に電話をして花の配送を依頼した。同じ大学の伊豆さんが花屋でバイトしていること、伊豆さんの勤務が午後九時までで、自宅がここから近いことも知っていた。花屋の配達が予想される午後九時すぎ、ギターを片づけて部屋で待機。伊豆さんが来て、支払いのために財布を取りにいくふりをしながらコンセントを故意にショートさせて停電を演出した。停電の前後、僕のアリバイは伊豆さんが証言してくれる・・・」

「その通りです」

「しかしあなたの推理には何ひとつ証拠がない。そうですよね。ただの推論の積み重ねでしかない。僕を犯人とする根拠も証拠も何ひとつ提示されてはいない。違いますか？」

小野は気の強そうな表情で一氣にまくしたてた。

「始めに申し上げました。私はあなたの良心に語りかけると・・・」

「あなたが長い時間をかけて行ったのは事件の解体ではなく、可能性の提示にすぎない」

「それは私本人が一番理解していることですよ」

「いいですか、僕は今日の午後六時以降、一度たりとも部屋を出ていない。午後五時ごろ、管理人さんに夕食のキャンセルを伝えに出た以外はね。僕はこの証言を変えるつもりはない」

神父は不意に黙り込んだ。そして花屋に向けて奇妙なことを言い出した。

「伊豆さん・・・あなたは今日の九時十五分ごろ、小野君に花を届けてから停電が復旧するまでの間・・・小野君とどんな会話をしましたか？」

「は？」

「今日の夕方、奥村君に花を届けたとか、その花は何だったかとか、花束はいくつだったかとか・・・小野君に話しましたか？」

「いいえ・・・花を小野さんにお渡しして、それからすぐに停電になりましたから、話していません。停電になったときは、小野さんが大学の先輩であることにも気づいていませんでした・・・」

「鷲見巡査長、今の証言は重要です・・・小野君・・・君は君自身が気づかないうちに、犯人しか知り得ない事実を口にしている。じたばたするのはもうお止めになったらいかがですか？」

「何？」

「君は停電のとき、居合わせた磐田警部に奥村君のことをこう言いました・・・クリスマスイブにバラの花束をいくつももらってチャラチャラした奴・・・あなたは奥村君がバラの花束を持っていることをいつ知ったのですか？いくつも持っていることを何故知っているのですか？」

「・・・それは・・・」

「午後五時に管理人さんに夕食のキャンセルを伝えてから、一歩も部屋を出ていないあなたが、午後五時半に奥村君に届けられた花束がバラであると知っていた。妙ですね。午後五時半以降に奥村君の部屋に入った人はいないはずですよ。いたとしたら、その人物は犯人にほかならない・・・違いますか？」

神父はゆっくりと室内全体を見まわした。そして小野に向き直り、ゆっくりと言った。

「・・・ゲームオーバーです。小野君・・・」

「事件」は解体された。

10

「遅くなりました・・・石原と申します。こちらの磐田さんに言われて来ました・・・」

玄関で声がした。警備の所轄署員と話し合う声。

その一瞬、食堂に集まった関係者たちの意識が玄関に集まった。

チチチ・・・という小さい音。デカ乳がぐにやりと倒れた。

また小さい音。次は鬼瓦が顔に似合わずはんなりと倒れた。

「スタンガンや。危ない」

神父の扮装の匠が大阪弁で叫んだ。

ち、という音が早紀の真横で聞こえた。反射的に身をかわした女警部の髪を光りがかすめる。青白い火花を散らしながら、小野は山麗館の階段を駆け上がった。

「あかん、誰かあいつを止めろ」

小野を追う匠が出入り口近くに立っていた白土とぶつかる。

早紀には兄がすごい形相で白土に何か言ったように見えた。

白土を押し退けて匠が階段をかけあがる。

階段の脇には二名の警察官が倒れている。

やはりスタンガンか。

「石原君、君も来い。さっきの電話の話、あいつに聞かせてたってくれ」

階段をかけ上がりながら兄が叫ぶ。

玄関脇で立っている青年が兄に続いてかけだす。

不良住人たちも兄に続いて階段を昇る。

かんじんの警官は・・・完全にうろたえている。

小野を追うべきか、デカ乳や鬼瓦・倒れた二名の警官の介抱を優先させるべきなのか。

警部と巡査長が揃って気を失っているものだから仕方ない。指示を仰ぐべき上司がいないのだ

。

融通きかないなあ。こういうときは、管轄に関係なく、位が一番上のものが適切な指示をださないとダメなのに・・・

ん？

やっと気づいた。

ここにいる警官のなかで明らかに階級が一番上なのは早紀だった。

さっきまで兄を照らしていたライトはあらぬ方向を向いている。薄暗い部屋のなかを早紀は見渡した。

残っているのはチビマル、花屋、管理人夫妻、三名の警官と白土。

「景子ちゃん、そこの杉田警部の手当てお願い。倒れたときに頭打ってるかもしれない。白土さんは鷲見巡査長のほうお願いします。あなたとあなたは二階についてきて。残ったあなたは念のため出入り口の警備お願いします」

そのとき、二階から匠の怒鳴り声が聞こえた。

「早紀！合鍵や。小野の部屋の合鍵もってこい！」

「おじさん、小野さんの部屋の合鍵持ってきてください。私は二階に行ってます・・・」

磐田警部は走り出した。

小野の部屋の前には人だかりができていた。

小野は部屋に鍵をかけ、中にこもっているようだ。

「あかん、合鍵待ってられへん。菅田、このドアぶち破れ」

「ええんですか？」

「あいつ・・・死ぬ気かもしれんぞ」

そのとき、何か硬いものが窓の外を落ちていく音がした。

「菅田、行け」

「菅田君、いいからドアを開けて。県警が責任をとります」

早紀も柄にもなく躊躇する首狩り族に声をかけた。

ぬおおおっと声をあげて黒く大きな巨体がドアに体当たりする。

薄っぺらな扉は一撃で吹き飛んだ。

窓枠から大きく身をのりだした小野が大声で叫んだ。

「入らないで。一步でも入ると、飛びおりますよ」

部屋の窓は開け放たれ、鉄の飾り格子はそこにはすでになかった。

さっきの音は格子が落とされた音だったようだ。

「小野君・・・もう止めなさい。あなたはもう逃げられない・・・」

早紀が警察官らしい説得をはじめた。

「私も逃げられるなんて思ってやしませんよ」

「変な気おこしちゃダメ。あなたの年齢ならいくらでもやり直しがきくわ・・・」

「磐田警部・・・でしたね。陳腐な説得は止めてください。ここで僕が死なないと、事件は解体されない。そうでしょ・・・神父さん・・・」

「あほなこと言うな。ええからこっちへ来い。この事件にはまだお前が知らんことも残ってるんや」

「・・・推理小説の多くは犯人が自殺を遂げてはじめて完結する。そうでしょ。最後まで格好つけさせてくださいよ・・・」

小野は不敵に笑った。

「小野、お前は勘違いしてる・・・妹の亜由美さんが亡くなったことは奥村君とは関係なかったんや」

小野の表情が一瞬、歪んだ。

「何を言っている・・・亜由美が死んだのはあいつのせいだ。あいつが亜由美を殺した・・・」

「・・・確かに奥村は責任を感じてそう言うたようやがな。お前が知っている内容はこうや。お前の妹さん・・・亜由美さんは当時つきあっていた奥村とのデートの日、原因不明の自殺をとげた。彼女の遺体には辱められた形跡が残っていた。お前は奥村に会うと言って出かけた彼女が変わり果てた姿で家に帰ったことから、妹の自殺の原因は奥村にあると思い込んだ。奥村も周囲に亜由美さんの自殺の原因は自分であるともらしていた・・・」

「そうだ。奥村こそ妹をレイプし、自殺に追い込んだ張本人だ」

「・・・奥村君はその日、バンドのライブでステージに立っていた。彼に亜由美さんを襲うことはできない・・・」

小野はそのとき、大きくふらついたように見えた。

「・・・そんな・・・」

「・・・二人にとって、ステージを隔てて音楽で通じ合うことがデートやったんやろな。亜由美さんはライブ会場の近くでどこの誰かもわからない男たちに襲われた。奥村君が待っているライ

ブ会場の近くでや。ひょっとしたら、会場から聞こえてくる彼のギターの音を聞きながら、絶望的な時間を過ごしたのかもしれない。それが彼女の自殺の原因なんや。奥村はバンドの仲間たちに言うてる。『俺があの日あの日のライブに亜由美を誘わんかったらあんなことにはならなかった』ってな・・・」

「嘘だ・・・あいつが・・・あいつが亜由美を・・・」

「石原君・・・さっき俺が電話で聞いた曲を小野に聞かせたってくれ・・・」

靴をはいたままの長髪の青年が、持っていたラジカセのスイッチを押した。

「これは奥村君のライブの録音や。亜由美さんが亡くなってからのものや・・・」

少しエコーのかかった、奥村の声が再生される。

「・・・皆さん、『虎武竜』というバンドの『ロード』という曲をきいたことがありますか？（ざわめき）このバンドのリーダーは、愛する人を事故で亡くしたことからこの曲を作ったそうです・・・（長い沈黙、ざわめき）僕も・・・最近、最愛の人を亡くしました・・・でも僕にはその人のための詩を書くことも、歌うこともできません・・・その人との思い出は僕にとってなによりも大切なものです・・・伝えたい言葉があまりに多すぎて、歌詞では表すことなんかできそうにありませんでした・・・でも、ギターなら・・・ギターでなら、僕の気持ちを伝えることができそうだと気づきました・・・僕はその人のために曲を作りました・・・その人のために作った曲を、その人のためだけに弾きたいと思います・・・聞いて下さい・・・『エンジェルOに捧ぐ』・・・（拍手）」

ギターの演奏が始まる。

どう表現すればいいのだろう・・・

あまりにも美しく、あまりにも悲しいギターのメロディ。

ジェフベックの「悲しみの恋人たち」よりもせつなく。

ミカバンドの「黒船」よりも圧倒的な生命力にあふれたギターの音色。

その音は誰かに語りかけるようで、

誰かの語らいに相槌をうつようで。

春の風、夏の日差し、秋の香り、冬の空気。

奥村という少年と亜由美という少女が、ともに過ごした時のすべてを凝縮したような、まろやかで、優しく、それでいて力強い音。

「小野・・・お前も音楽をやってるんやったらわかるやろ。この音は、ほんまの本気で亜由美さんのことを思っていないと、出されへん音や・・・お前も一遍でええから、あいつのライブを見ておくべきやったんやろな。そしたら自分の思い違いに気づいたんかもしれへんかったのにな・・・」

光線の加減だろうか。小野の目から、涙が一筋こぼれたように見えた。

「あくまでもこれは俺の勝手な思い込みやが・・・奥村君の部屋にあった薔薇の花束な、あれ、なんで二つあったんかわかるような気がするで・・・一つは月村さんに渡すもの・・・そしてもう一つは亡くなった亜由美さんへのもの・・・それにしてもベタなタイトルやで。『エンジェル・O』・・・『A・O』・・・『アユミ・オノ』・・・まあ、それくらい強い思いをこめて作

ったっちゅうことかな・・・この曲は・・・」

ベースとドラムス、キーボードが加わり、力強いロックバラードが演奏されている。しかし・・・ギターだけは、奥村のギターだけは、小野に、匠に、早紀に、聴くもの全てに語りかけるように鳴り響いている。

時間が止まったかのように、そこにいる者全てがラジカセから流れる音楽に耳を傾けている。そのとき。

「磐田警部殿っ、今、たった今連絡が入りましたっ」

階下から鬼瓦のダミ声が響いた。

「奥村君の、死亡が、確認されましたっ。これをもって本件は、傷害ならびに殺人未遂事件から、殺人事件に・・・」

「言うなっ！」

兄が叫んだ。

まわりの者たちは、鬼瓦の声と、兄に気をとられてその瞬間を見ていなかった。

しかし早紀だけは見ていた。

小野は寂しそうに顔をあげたかと思うと、窓枠を握っていた手を放した。

大きく手を広げ、ゆっくりと、どこまでもゆっくりと・・・

小野の身体は月の光りの届かぬ闇に向かって・・・

ゆっくりと加速しはじめ・・・

やがて彼は早紀の視界から消えた。

どこか疲れたような笑顔を浮かべたまま・・・

誰かが叫びにも似た声をあげた。

別の誰かが低い声でうめいた。

神父の扮装をした若者は、神に祈りを捧げることさえ忘れ、唇を噛みながらその場に立ち尽くしていた。

ラジカセからは奥村の曲が流れている。

そのギターの音が泣いているように早紀には聞こえた。

積もった雪はやがて溶け始めるだろう。

雲間から冬の月が見えた。

山麗館事件はこうして決着した。

磐田早紀警部が記憶している限り、ここまでが山麗館事件の全てである。

しかし事件の本当の意味での決着まではもうしばらくの時間がかかったことを付記しておかな

ければならない。

一つは事件解決直後、下宿人の白土秀樹が失踪したことにある。

あの日・・・関係者が二階に集まったとき。

白土は鬼瓦こと鷲見巡査長の介抱をしていた。ほどなく巡査長の意識が回復し、小野に自殺を決意させた『あの連絡』をするために二階に上がっているすきに・・・白土秀樹は姿を消した。

匠は白土が失踪したことを聞いて、とたんに不機嫌な顔になり、まる三日間、早紀と話をしなかったという。

事情はどうあれ、こんなにややこしい時期にプライベートで一番仲の良かった男が姿を消すなんて、面白くはないだろう。

匠の口から白土の名前が出たのは、事件からかなりの時間が経ってからである。

ともあれ事件そのものは被疑者死亡という最悪の形で既に決着していたので、警察も白土の件にはさほどの興味を示さなかったようである。

もう一つ。六甲大学文学部に在籍する伊豆景子が一冊の本を上梓した。

奥村博之と小野亜由美の悲しすぎる恋と、「エンジェルOに捧ぐ」という名曲の誕生を描いた物語であるという。石原たちバンド仲間の協力で、ライブ演奏のCDがついたものになるらしい。

。

あくまでも自費制作で、限られた部数しか制作する予定はないということらしいが、いつかの曲がFMなどでオンエアされる日がくるかもしれない。

早紀の周囲の者が事件の生々しい記憶から解放されはじめた三月のこと。

県警オフィスで事務処理に追われる早紀のもとに珍しい来訪者があった。

デカ乳、杉田警部である。

「相変わらず小さいわね、磐田警部」

口が減らないことだけは変わっていないようだ。

「あなたも相変わらずですね。胸も態度も必要以上に大きいですね、杉田警部」

早紀の切り返しを聞いてデカ乳はニヤリと笑った。

「身長のわりには言うわね・・・そうそう、あなたの素敵なお兄様に頼まれてたの。この資料渡しといてくださらない？」

どうやら兄は今回の一件で『哀れな』から『素敵な』に昇格したらしい。

「資料？」

A4版の書類がすっぽりおさまる大きさの、大きな茶封筒だった。

「中を見ればわかるわ。お兄様に伝えておいて。お礼にこんど是非デートに誘っていただきたいって。できれば神父様の格好で。あの人、普段の姿だと口もきいてくださらないでしょ・・・」

えらい変わりようである。

「伝えるだけは伝えておきますけど・・・」

「お兄様とは完全休戦。今度やっかいな事件があったらご指名してさしあげますわって伝えてお

いて。今度はパートナーとしてご一緒しましょってね。ただし、あなたは小さいわりに相変わらず目障り。あなたは私にとって永遠のライバルで、永遠に目の上のタンコブ」

「あなたの無意味に大きな胸や、太い足こそ目障りですわ。私にとって」

二人の女警部は顔を見合わせて、ニヤリと笑いあった。

・・・今度、この人と仕事するはめになっても・・・

前よりは上手くやれそうだ。早紀はそう思った。

早紀は再び山麗館に足を踏み入れた。

兄は最近、舞台関係の職場でアルバイトを始めた。照明や音響、舞台セットの仕込み、屋外ライブやイベントの会場設営などを請け負う会社で、結構忙しくしているようだ。

嫌な思い出だけが残ったこの下宿もそろそろ引き払う予定にしているらしい。

事件の後・・・大学の卒業時期なども重なってか、当時の住人たちのほとんどがこの下宿を出ていったようだ。この古い建物も近いうちにとり壊され、学生向けワンルームマンションに生まれ変わる予定とのことである。

学生たちが出払っている昼の時間帯のせいか、中は閑散としている。

ぎしぎしと音をたてる階段を上がり、早紀は兄の部屋をノックした。

相変わらず不機嫌そうな顔をした兄がいた。

「これ、杉田警部からの預かりもの。何なの？この中身・・・」

「・・・白土秀樹に関する調査の報告書だ。俺たちは彼のこと、何も知らなかったのかもしれない」

早紀は兄の言葉の意味をはかりかねていた。匠は黙って受け取った封筒を開き、中の書類を確認した。

「白土秀樹・・・株式会社丸太トラベル勤務というのはどうやら経歴詐称だったようだね。それどころかそういう名称の旅行会社は阪神間には存在しない。白土秀樹という名前の青年は三年前までは千葉に住んでいたが、公務中に亡くなっている」

「それって・・・どういう意味？」

「我々が知っている白土秀樹は偽物だった、ということだ」

何ということだろう・・・あの人のよさそうな顔をした人物が・・・偽物？

「これが本物の白土秀樹の経歴だ。阪神大学文学部大学院卒。専攻は犯罪心理学。犯罪者のプロファイリングに関する論文を書いている」

プロファイリングという技法は早紀も聞いたことがある。最近、署でも話題にのぼることの多い言葉だ。

「プロファイリングという言葉は早紀も知っているようだね。もともとは動機の希薄な犯罪や、快楽殺人などの犯行の手口から、犯人像を絞り込む統計学のようなものだ。できるだけ多くの犯罪者との面接を繰り返し、データを集積させる・・・犯人の心理状態や性格はもちろん、体格や容貌に至るまでをサンプリングして、似たような手口の犯罪が発生した場合、それらのデータから犯人の風貌・年齢・性格を割り出す・・・アメリカのFBIはこの方法でかなりの成果をあげ

ているらしい・・・」

それが・・・今回の事件とどう関係してくるというのだろう。

「この白土秀樹と同時期にアメリカで研修していた学生が、面白い論文を書いたそうだ。林 輝という男らしいんだが・・・彼の提唱した理論はこうだ・・・過去の犯罪者と共通した風貌・年齢・性格の被験者に、動機と周到な犯罪計画を提示すれば、その被験者は犯罪者となりうるのではないか・・・」

動機と・・・周到な犯罪計画？

「プロファイリング理論の裏返しの理論だ。もちろん彼の論文は黙殺され、林は犯罪心理学界から追放された。林という男の現在の所在は不明だ。危険思想の持ち主として、一時公安警察からもマークされていたようだが・・・彼はいずこかに姿を消した・・・それとほぼ同時期、犯罪者心理分析官として本庁で勤務していた本物の白土秀樹が公務中の不慮の事故で殉職した・・・」

もし・・・林の理論が正しければ・・・そして、もし彼が自らの理論を実践しようと考えたのなら・・・

「・・・そしてこれが林の顔写真だ・・・」

早紀は自分の目を疑った。

あの夜・・・

私が・・・

「白土」と呼んでいた人物が、そこに写っていた。

「・・・もう少し早く気づくべきだったのかもしれない・・・あの夜の出来事はある意味で出来すぎていたんだ。タイミングが良すぎるギター演奏、スライドギターの講釈、ビデオ録画・・・聞こえてきたギターの音にアタッチメントが使われていないこともあの男からの情報だ。派手なアクションでアンプからプラグを抜いたというエピソードで僕の推理を誘導したのもあいつだった・・・あの夜、部屋に早紀を呼ぼうと言い出したのもあいつだ。ひょっとしたら、奥村君の指のケガもライブの曲目の変更も、この男の計画の一部だったのかもしれない。それ以前の・・・亜由美さんの自殺にさえ関与していたのかもしれない・・・」

「早く・・・あの男を逮捕しないと・・・」

「どういった罪でだい？彼は何もしていない。亡くなった小野君でさえ自分が誘導されて殺人まで起こしたことに気づいていないのかもしれないんだぞ」

「でも、でも・・・一体なぜ・・・」

「恐らく・・・自分の理論の正しさを立証するためだろう。そのためだけに小野君は選ばれてしまった・・・この事件は後に自分の理論が正しかったことを証明するために、何としても殺人事件として記録に残らなければならなかった・・・だから複数の探偵が必要だった。僕と早紀と杉田警部の三人だ。あとは事件が殺人事件として解明されるように誘導していけばいい・・・」

とてつもなく重い空気が部屋を支配した。

「あの人のこと・・・いつ・・・気づいたの？」

「あの夜、食堂で推理を開陳している最中さ。推理に必要なデータが、全て『白土』、いや『林』から提供されていたことに気づいたんだ。ということはつまり、推理のための情報に方向性が

かけられているということだ・・・小野君を追って二階にあがるとき、奴に声をかけた・・・『お前、どこから仕組んでたんや』ってね。うかつなことに僕のその一言で奴には逃げられてしまった・・・僕も、警察も、見事にしてやられたわけだ」

「あの人・・・またこういうことをやるのかしら・・・」

「わからない・・・しかし、もし今度奴と対決することになったら・・・そのときは負けない。絶対に尻尾をつかんでみせる」

兄は力を込めてそう言った。

その目は、私が大好きだった、キラキラ輝いている頃の兄の目だった。

私たちが「白土秀樹」と呼んでいたあの男の過去があきらかになった瞬間、早紀にとってこの事件は過去のものとならざるを得なかった。

次にあの男と会うときは、また新しい事件のファイルが開くのかもしれない。

そんな気がした。

早紀にとってそれは決して歓迎すべき予感ではなかったのだが・・・

「あれ、雪？」

窓の外を白いものが舞った。

「そんなはずはないだろう。もう三月だぞ」

窓の外を舞っていたのは、やはり季節はずれの雪だった。

春のやわらかな日差しの中を、小粒の雪がたよりなく舞っている。

兄は黙って部屋の隅にあるコンポステレオのスイッチを入れた。

そして、コンポの横のカセットラックから、一本のカセットを取り出した。

「あの曲のテープだよ・・・」

匠はそれをデッキに入れた。

「いい曲だからね、ダビングさせてもらった・・・僕にとっては忘れられない曲になりそうだ・・・雪の降る日にはこの曲を聞いて、彼のことを思い出すことにしてるんだよ・・・早紀も聴くか？」

早紀は黙ってうなずいた。

匠はカセットの再生ボタンを押した。

あの曲が流れる。

・・・エンジェルOに捧ぐ。

早紀の中でひとつの事件が、今、ゆっくりと終わろうとしていた。

炎の社（ほむらのやしろ）

炎の社(ほむらのやしろ)

壹

誰が名付けたかは定かではないが、その峠は唐人峠と云う。

唐人・・・それは異人、異形の者を指す。

どこの誰が云いはじめたかは定かではないが、この峠には異人が現れると云う。

峠の先には岬がある。

岬を取り囲むようにある岩場に立った異人たちはこの峠を超え、東西に広がる街道を歩いてそれぞれの思う行き先に散っていくのだと云う。

彼ら異人が何のためにここに立ち、彼らの目指す場所がどこなのか・・・この小さな宿場町に住まう人々は知らない。

寒い、峠の夜。

影がもみあっているのが見える。

乾いた大きな音がして、一方の影がゆらりと倒れた。

もう一方の影は音もなくそこから離れ、やがて峠の木立のなかに消えた。

ゆらゆらと風が木々を動かす。

ざざ、ざざと葉がこすれあう音だけが聞こえる。

群草と雲だけしか動かない長い時間の後、その動かぬ影に最初に近づいたのは、峠を根城とする野犬であった。

犬は警戒しながらも、その影に近づく。やがて獣は、「それ」が「食えるもの」であることに気づく。

一匹、また一匹と、野犬の数が増えていく。

彼らは知らない。自分が食らっているその肉塊は、かつて「異人」と呼ばれていたことを。そして彼らを追い回す宿場町の者でさえもかなわぬ力を、その「異人」がもっていたことを・・・

貳

佐久間忠勝と云う武士がいる。唐人峠からほど近い、小さな藩の下級武士である。年齢は二十をすぎたあたり。まだ嫁はとってはいない。

忠勝は親の仇を追っている。

忠勝の父は藩代官屋敷周辺の町廻りを拝命していた。

深夜の見回りは、藩邸からかなり離れた唐人峠まで巡視せねばならなかった。

闇商人たちが御禁制の品を藩内に運ぶ際、人目につきにくい岩場から水揚げすることがあるからだ。

その夜も父は、いつも通りに出かけていった。

一刻、二刻・・・

いつもなら戻る刻限になっても父は帰らない。

「忠勝・・・」

虫の知らせというのだろうか。忠勝は父の声を聞いたような気がした。

気になりだすとじつとしてはいられないのが忠勝の生来の性分である。

忠勝は父の巡視路を逆にたどって父を迎えに行くことにした。

果たして父はいた。峠の近くに。生きてはいたが、手の施しようのない深手を負っていた。

「赤衣着物・・・卯之助・・・」

うわごとのようにその言の葉を繰り返し、手当てをする間もなく夜明けまでに息をひきとった。

父の供の者は二名。二人とも袈裟懸けに一刀のもとに斬られていた。肩口などは骨ごと断ち斬られていたというから、下手人はかなりの大男に違いない。

刀傷の位置から察するに、おそらくは身の丈六尺近く。忠勝よりも半尺ほど大きいということになる。

供の二人の侍は、刀を抜くよりも早く切り捨てられていた。かなり腕のたつ男とみてとれる。

忠勝は藩主に暇乞いをし、父の仇をとるべく「赤衣着物」の「卯之助」と名乗る侍を探すことになった。

忠勝は人を斬ったことがない。無論剣術の指南はうけてはいるし、道場でも腕がたつ男として知られてはいる。居合にも自信がある。竹も巻藁も斬ったことがある。しかし生きている物は斬ったことがない。

それでも父の仇ならば斬れる。いや、斬らねばならぬ。

父のことがなければ一生このようなことを考えなかったであろう若い侍は、父の百日目の法要を滞りなく済ませた後、仇討ちを果たすまでは屋敷に戻らぬと母に言い置いて旅に出た。

父の仇は峠の近くを徘徊する夜盗山賊の類か、はたまた町人たちの口の端に登る異人であろうか。

どちらにしても「唐人峠」へ行かねばならぬ。

夏の始まりのことだった。

「噂」を追うことは難しい。

まる一日、峠の近くの旅籠や茶店で、そこに出没する盗賊や異人の噂を集めてはみたが、やはり埒があかぬ。

赤衣着物の侍など、噂にさえもなっていない。

手がかりさえつかめぬうちに、日は西に沈もうとしている。

仕方あるまい。

屋敷にも藩邸にも、戻ることはできない。

父が襲われた場所の近くで、今宵は野宿。

父の仇の夜盗が現れるやもしれぬ。

赤い着物の侍。

追いはぎは犯して殺した女の着物を着込むことがあると聞いたことがある。仇が盗賊ならば、切り捨てても心は痛まぬ。

忠勝は峠の小道が見渡せる叢に身を隠した。

ちょうどよいところに楡の巨木がある。忠勝はその木にもたれかかって暫く眠ることにした。

峠の夜は涼しいものと思い込んでいたが、どうやらそうでもないらしい。

じめりとした湿気が尻の下から這い上がってくる。今宵は風もない。ねつとりとした汗が、身体の奥から噴き出す。たまらず旅装の帯をゆるめ、着物の前合わせを開いた。

蟲が身体のあちこちに纏いつく。

暑さと虫の気味悪さに閉口しながらも、一刻もすると身体が眠りを求めはじめた。

浅い眠りのなかで、若い侍は夢を見た。そこには父がいた。赤い衣をまとった女に、父は斬られた。何度も何度も、斬られた。それでも父は起き上がり、また斬られ・・・

女は般若面をつけている。父の身体を斬りつけるたび女の着物ははだけ、太股が露になる。父の返り血で次第にその太股は朱く染まっていく。父は幾度斬られただろう。父は遂に倒れて動かなくなった。最後に父は忠勝の名を呼んだ。

夢はそこで終わった。

ぐつしよりと汗に濡れて、忠勝は現に戻った。

生暖かい風がさわさわと。

草と木々の間を走った。

と、遠くからひたひたと峠の坂道を歩く音がする。

忠勝は楡の木陰に身を隠した。

もしや父の仇の夜盗か。

叢雲に隠された月明かりのなか、侍は目をこらした。

影はひとつ。

朱い、着物。

忠勝は刀を手繰り寄せた。父の形見の銘刀である。

何やらという高名な刀鍛冶が鍛えたものときく。

鐔の近くに刃毀れがひとつ。

恐らくは父が命を落としたときのもの。

この太刀で、父の仇を。

足音はさらに近づく。

小さな影だ。

見たところ刀剣の類は持ってはいない。

影が、さらに近づく。

間合いはおよそ二間。刀を握る掌が汗で濡れる。

もう少し。居合の間合いまで・・・いま半尺。

そのとき、

刀の鞘先が楡の幹に当たった。高い、鋼の音がした。

影が、止まった。

つ、と影が顔をあげ、忠勝の潜む叢を見た。

雲が切れ、影の顔あたりに月あかりがさした。

女。

かまわず忠勝は飛び出した。

夜盗の手引きの女やもしれぬ。山賊の配下の女やもしれぬ。

そうだ、夢のなかで父は女に斬られていたではないか。

もしや般若。もしや妖しのもの。

忠勝は居合の間合いまで一気に走り、影にむかって横殴りに太刀を振った。

わずかに手応えがあった。

見ると、影は刀の間合いに入る前に、しりもちをついていた。

「お、お助けください、命だけは・・・」

忠勝はずいと影に歩み寄った。

女というより・・・まだ娘、いや、女と娘の間くらいだろうか。

着物の帯のあたりが横一文字に裂かれている。手応えは布のものだったか。

帯が裂かれているのとしりもちをついたのとで、娘の衣は乱れ、たくしあげられた着物の裾からは白い足が見える。

その足は、わなわなと震えている。

忠勝は呆然と女を見ていた。

私は、斬ろうとした。この女を。

あと一寸、踏み込んでいけば・・・この女の身体は、軀(むくろ)となっていた。

雲の間から月がわずかにさした。

女の太股が艶(なまめ)かしく闇に浮かび上がった。

自分の足のあたりを見られていることに気づいたのだろう。娘はしりもちをついたまま衣の前合わせを開いた。

まだ大きくはなりきっていない娘の乳房が露になった。

「私の身体はどうなってもかまいません。ただ、病気の父に薬草をとどけねばならないのです・・・どうか、命と薬だけはとらないで・・・お願い致します」

忠勝は女の足から慌てて目をそらせながら云った。

「安心せい。夜盗の類ではない。お前を抱くつもりもない」

そして娘のかたわらにしゃがみこみ、衣を直してやった。

「父の仇の夜盗を追っている。夜道ゆえ、お前が女だとはわからなんだ。許せ」

忠勝は嘘をついた。本当は・・・女だと知って斬りかかったのだ。

夢にでてきた、朱い衣の女が・・・怖かったのだ。

「私は佐久間忠勝という者だ。怪しい者ではない」

忠勝の言の葉を聞いて、娘は泣きだした。忠勝の胸にもたれかかって。若い侍のはだけた胸に

娘の髪があたった。

泣きじゃくる娘の肩を抱いてやりながら、忠勝は月あかりに白く浮かぶ娘の太股をいま一度じつと見た。

参

娘は茜と名乗った。十五になるという。

そして最初に、私は嘘をついていました、お許しくださいと忠勝に詫びた。

委細を尋ねてみた。

榆の葉が風に揺れて、忠勝と少女を朧に照らす月明かりがゆららと揺れた。

「私には病気の父などおりません。私は忠勝様同様、許嫁と父の仇を追っているのです」

落ち着いて話してみると、言葉遣いが町人のものではない。

「茜殿は武家の出と拝察するが・・・」

「そうかもしれませんね・・・」

「・・・それにしても、武器も持たずに仇討ちとは感心せぬな」

「・・・女には女の武器がございます」

気の強そうな大きな瞳をした娘はきつぱりと云った。

茜は町人娘の旅装束をしている。朱、というよりは桃色に近い着物。着物は膝の上までの長さしかない。素足に白い脚絆。

「この旅装もその武器を際立たせるもの。着物の帯も解けやすく細工しております」

なるほど、私が悪い男であったなら・・・そのままこの娘を襲っていたやもしれぬ。

「しかしな、茜殿・・・夜盗に抱かれても、仇討ちにはなるまい・・・」

「許嫁の命も、私の操も、すべてあの男に奪われました・・・刺し違えても仇討ちを果たす覚悟でまいりました。彼奴にもう一度会うまでは、私は死にませぬ」

「しかし・・・仇に会うまでに襲われて、てごめにされて、殺されてでは死に損ではないか。そうだろう。悪いことは云わぬ、仇討ちなど止めにして国許へ帰れ」

何故か・・・わからない。忠勝は茜の仇討ちをどうしても止めさせたかった。

「私を抱いた者は、皆死にます。私は、女の身体にしか隠せない武器をいくつも用意しております。切っ先に毒を塗った簪、櫛に仕込んだ剃刀、ほかにもいろいろ。忠勝様・・・ここで私を抱いてお試しになりますか」

思いの裏側を見透かされたようだった。

忠勝はこの娘を、確かに欲していた。しかし・・・自分は武士のはしくれ。しかも仇討本懐を願う身。

「大人をからかうものではない」

茜から目をそらしてそうつぶやくのがやっとであった。

「忠勝殿・・・」

茜は無邪気な声で云った。

「口ではそうおっしゃっても、身体は正直のようですよ」

大きくはだけた忠勝の着物。若侍の股のあたりを見ながら、茜は笑った。

「大人をからかうものではない」

慌てて着物を直しながら、忠勝は無意味な虚勢の言の葉を繰り返すしかなかった。これではどちらが大人かわからない。事実、忠勝はまだ女を知らない。一方、許嫁の仇討ちを願う茜は生娘ということはなかろう。忠勝は女そのものを知らぬが、茜は男そのものを知っている。

それだけではなく、茜は忠勝よりもはるかに知恵がまわり、狡猾で、周到である。ほんの短い間語り合っただけではあるが、忠勝にはそれがわかった。

この娘は賢い。

本懐を遂げたら・・・このような娘と、否、茜のような娘と、否、茜と・・・夫婦になりたいものだ。

娘の笑い声が途切れた。忠勝はじつと茜をみていた。その眼差しに気づいたのか気づかなかったのか、茜のほうが目をつらせた。

娘の白いうなじに月の光があたる。

忠勝は茜に近づき、その小さな肩をそっと抱いた。

「なりません・・・忠勝様・・・」

「本懐を遂げたら・・・母に会って欲しい・・・」

茜は意味を解したのであろうか。小さく首を横に振った。

「なりません。忠勝様のお優しいとことは、亡くなった私の許嫁とそっくり。なればこそ、なればこそいけませぬ」

「茜殿・・・」

「私の仇・・・卯之助という侍を討ち取るまでは・・・なりませぬ」

忠勝はその手を離した。

二人は、同じ男を追っている。

同じなのだ。私の仇も同じ男なのだ。

忠勝が、茜の背中をもう一度抱き、そう声にしようとした刹那・・・

二人の周りの叢がざざと音をたてた。

迂闊。

二人は夜盗に囲まれていた。

四

忠勝が正気に戻ったのは、しばらく経ってからだった。見ると、禪一枚の姿。身ぐるみ剥がれたというのはこういうことだろう。そればかりか手足まで縛られている。

周りは六人ばかりの大男に囲まれている。賊一味に不意をつかれ、不覚にも気を失ったらしい。息をすると胸のあたりが痛む。鳩尾か脇腹か。そのあたりに重く鈍い痛み。

茜は縛られてはいなかった。しかし刀をつきつけられている。

あの刃の光りようは、おそらくあれは父の形見。

「うぬら、好いとる者同志か。愚かよのう。ここほど物騒な場所は、ここら在所ではほかにはな

いというに」

「駆け落ちか？お侍様と町人娘の道ならぬ恋か？」

「そこの茂みでいいことでもしとったか？わしらもおこぼれにあずかりたいものじゃのう」

下劣な笑い声が叢に響いた。

「妾(あたい)みたいな男に抱かれる商売の女がお侍様に惚れちゃいけないって云うのかい？」

茜の声だ。まるで・・・町娘のような・・・遊女のような・・・喋りかただ。

男たちの笑い声が止んだ。

「妾はね、この人とのことに命かけてんだ。この人の命を助けるためだったら何でもする覚悟ができてんだよ。妾の惚れた男に妙な手出ししたらただじゃおかないよ」

娘をとりまく空気が変わった。

「こちとら伊達に男相手に足広げてきたんじゃないよ。女だからって甘く見てると、大火傷するよ」

ほう、と夜盗たちの間からため息が聞こえたような気がした。

男たちの目つきが変わった。

止せ、茜と忠勝は叫ぼうとした。が、言の葉を紡ぐための息が痛む胸を押さえつけ、喉から音がでない。

「女、お前、遊女あがりだな」

盗賊の頭とおぼしき大男がうめくように云った。

「だったら何だい」

遊女あがりと思わせれば尚更。今宵女に飢えた獣たちを満足させてしまえば、お前はこれから毎夜、生きたまま奴らの玩具にされてしまう。譬え満足させることができなくとも、お前は犯され、弄ばれ、飽きられれば殺される。

どちらにしても、地獄。

何故それがわからない。

こうなってしまうえば・・・今ここで殺されたほうが楽かもしれぬのに。

「われらにもいい思いさせろや」

「そうじゃ、ただとは云わぬ。男の命と引き換えじゃ」

「抱かせろや。そうすりゃ男の命だけは助けてやろう」

お前が武器を持っていても・・・この人数では・・・勝てぬ。

仕込み剃刀も、毒簪も・・・男ひとりが相手なら・・・卯之助ひとりが相手なら仇の命を奪う武器にもなるうが・・・

痛みで霞む目を見開いて、忠勝はうめき続けた。

「妾の身体と、うちの人の命、本当に引き換えにしてくれるのかい」

「お前にそれができるかのう、この人数相手じゃと、朝までやり通しかもしれんのう」

下卑た笑い声が、峠の道に響いた。

茜、茜、茜と、若い侍は出ぬ声で娘の名前を呼び続けた。

「仕方ないね。相手してやるから、ついて来な」

「ほう、好いた男の前ではさすがに腰を振りたくはないか」
見張りの一人を残して、娘と賊たちは茂みの奥へと消えた。
あれは何の音だろう。
風の音に似た衣擦れの音か、
衣擦れの音に似た風のなる声か。
気が変になりそうだった。
茜が、茜が・・・
拙者の妻になる女が・・・
獣たちに汚されてしまう。
茜、茜、茜、茜。
涙が流れ出た。
私はこんなにも、無力だ。

どれくらい時間が経っただろう。
一人残された見張りの男が、不意にぐえと声を出した。
蛙のような、奇妙な声だった。
その声を聞いて忠勝は顔をあげた。
そこには先程と同じ姿勢で、賊の配下の者が立っていた。
が、しかし。
違う。何かが。
首がない。
首のない男がそこに立っている。
痛む身体を庇い、頭だけを動かしてあたりを見渡した。
見張りの男の首が、忠勝の足元に転がっていた。
男は自分が斬られたことすら気づいていないのかもしれない。
目だけをぐりりと動かし、その口からはひゅうひゅうという息が漏れている。
と、闇のなかで何かが動いた。
赤い着物の若い男が立っていた。

五

男は「風」と名乗った。齢は十五。侍ならば元服する年頃である。女のような長い髪。その顔はまるで人形のように作りものめいて見える。よく見れば、男のくせに芝居役者のように化粧をしている。

「お待さん、ここらの夜盗どもは性質が悪い。ご注意なされませ」

風という男は音もなく忠勝の縄を解いた。

「私は幕府の隠密でございます。お上の命により、女を追ってこの峠までまいりましたが、どうやら逃げられてしまいました・・・」

茜を、私の妻を助けてやってくれと伝える声が出ぬ。

「風」はじつと忠勝の目を見た。

「胸のあたりが痛むようですね。お待ちなさい・・・」

若い男は自分の手を忠勝の胸のあたりに当てた。

幻術をみているのかと忠勝は己の眼を疑った。

男の手は鬼火に包まれたかのように、ぼうと光り・・・

しばらくすると嘘のように痛みが治まった。

「あなたが茜と呼んでいる赤い衣の女を追っています。あの女の本当の名前は卯之助。おそらくはあなたのお父上の仇でしょう・・・」

・・・何も喋らぬうちに男は忠勝の知っていることを口にした。そればかりか知らぬことまでも。こやつ、化物か、妖怪か。

「さとり、という妖怪が伝えられておりますよね。私はそのようなものです。私は人様の考えを悟ることができます。ただし私は妖怪ではない。いくぶん妖怪じみてはおりますが」

しかし・・・

茜が、あの茜が、父の仇の卯之助・・・

「あの娘もまた妖怪のようなもの。あなたの妻にしたり、仇として狙ったりできるような相手ではありません。あの女のごことはもうお忘れなさい。仇討ちのことね」

忠勝はまだ、自分が裸であることに気づいた。

「衣を召されませ。そして、お屋敷にお戻りなさい。あなたの仇討ちはもう終わったのです」

草が燃える匂い。否・・・髪を焼いた匂い。獣を生きたまま焼いた匂い。疫病に冒された屍を焼く匂い。・・・つまりは人が焼ける匂い。

茜が消えた叢から、夜盗の頭領とおぼしき男がふらふらと現れた。

獣のような形相。

その向こうに、茜の裸の背中が見える。その背中が桃色の着物にゆっくりと隠され・・・

娘がこちらを振り向くと同時に・・・夜盗が口から火を吐いた。

否。息が炎と化している。それは男が出そうとして出ている焰でないのは、男の悶え苦しむ形相から見てとれる。

男は身体の内側から焼かれているのだ。

「卯之助は焰を操ります。念ずるだけで、生き物を焼くことができる。この力が御国の転覆を図る悪党どもに使われると・・・藩も幕府も・・・いや、この国そのものが・・・滅びてしまいます」

叢に見え隠れしながら、炎を操る化物が来る。

妖艶な笑みをうかべながら。

茜・・・

信じたくはなかった。しかし、断末魔の叫びとともに炎をまき散らし、どうと倒れた盗人の屍が、「風」の話を裏付けている。

「人の恋路を邪魔するたあ、下司な真似やってくれるじゃないか、風の」

「貴女こそ下司ですよ。仇討ち本懐を願う若侍をつまみ食いですか？趣味の悪い」

「妾の尻を追いかけまわすだけじゃあなくて、今度は惚れた男にあることないこと告げ口かい？」

「私は貴方の身体が欲しくて追っているのではない。悪いことは云いません。屋敷に戻りなさい。それがあなたのため、そして何より・・・」

「將軍様のためかい？」

口を開かずに・・・二人は話している。

会話が、直接・・・頭の中に入り込んでくる。

化物。こやつらは、化物。

「ここで幕府の談義をしている暇はない。奴らが来ます。あなたも感じているでしょう」

「ああ。奴らとはそろそろ話をつけなきゃならないと思ってたのさ」

「待ちなさい・・・奴ら唐人の力をあなどってはいけない。逃げましょう。戦うのはもう少し先でもいい」

人の形をした化物たちは、忠勝などそこに居ぬかのように語りあっている。「奴ら」とは誰なのか。

話の筋から察するに・・・どのみち・・・化物だろう。

忠勝は妖怪どもが話している間に、盗人たちがひとまとめにしていた自分の衣を着て・・・そして・・・今となってはひどく頼りなく感じる刀を帯に差した。

「さあ、早く。このお侍様は私がお護りしましょう・・・」

「おやおや・・・そうもいかないようだ。もう遅いね。奴らのお出ませだよ」

峠の、道を。

三つの影が、近づいてくる。

おそらくそれは、人ではない。

人の形をした、なにかである。

六

大きな影だった。

それはまさしく、唐人だった。

唐・・・それが幕府とも商いのある、明国の古い呼び名であることは忠勝も知っている。

ただ、彼ら三人が、明国からきたものであるか否かは忠勝にはわからない。

三人のうち二人は浮世草子に描かれる「鬼」のように背が高い。

天狗のように鼻が高い。

肌の色は・・・死人のように白い者と、鴉のように黒い者。

あとの一人、背丈顔色は忠勝とはあまり違わない。

「アカイキモノ」

「ウノスケ」

「アカイキモノ。ウノスケ」

妙な響きだった。「赤い着物」でも「卯之助」でもない。意味がある言の葉ではなく、意味のない音の塊。

白と黒の唐人は、それぞれに叫びながら、二人との間合いを縮める。忠勝など、まるで見えていないかのように。

ただ一人、小さい影だけは少し離れたところで止まった。

白い唐人が、長く細い剣を抜いた。巨大な針のような剣。先端が尖っている。

唐人はその剣を片手に持ち、忠勝の道場で云う中段あたりに構えている。

どうやらこの剣は突きにしか使えぬものらしい。

黒い唐人は拳に白い手甲のような帯を巻いている。

小さな男は素手。この一人だけは腕組みをしながらやや離れている。

高みの見物と洒落こむつもりか。

「風」が白い大男と向き合った。

「風」の指先が蛍のように光りはじめた。

茜、否、卯之助の前には黒い男が立ちはだかっている。

卯之助の瞳が紅く光りだす。

夜の闇が濃くなったような気がする。

これまでわずかばかり吹いていた風が止まった。

今度は黒い唐人の拳と白い唐人の剣が、光りはじめた。

こやつらも、やはり化物。

化物、化物、化物。

百鬼夜行。

妖怪たちの廻りを鬼火が飛ぶ。

否、飛び交っているのは鬼火ではない。

「風」の指と、白い唐人の剣。

卯之助の発する炎球と、それを防ぐ黒い唐人の拳。

卯之助の顔の前で、まず塵が燃え上がる。塵は燃えながら一つの塊となり・・・拳の大きさほどになると、唐人めがけて飛ぶ。唐人の光る拳は難なくそれを撥ね飛ばす。拳に当たった炎の球は、砕けて形をなくし、闇に吸い込まれるように消えていく。

黒い唐人が拳を振った。合気武術の突きのように見えるが、それよりもはるかに早い。

卯之助が身かわし、くねらせてその拳をかわす。

黒い影は早い。速い。迅い。

影の拳が、それをかわしきれなかった卯之助の腹に当たった。

さらにもう一度。そしてさらにもう一度。

ぐう、と苦しそうな声をあげて卯之助はその場に倒れた。

何やら聞き取れぬ言の葉を吐きながら、黒い男が卯之助に近づく。

舌なめずりをしながら、唐人は化物から男に変わった。

卯之助はぴくりとも動かない。

「ウノスケ」

黒い異人が娘の帯に手をかけた。

常人にははかりしれない力をもちながらも・・・倒されてしまえばその身体はやはり女。

脚も、腰つきも、胸も、肩も。

隠せるものではない。隠しきれものではない。

そういうことなのだろうか。

卯之助の衣が、いま一度剥がされようとしている。

卯之助が倒れる姿が目に入ったのか、「風」に一瞬の間ができた。

白い唐人がそれを見逃すはずはなかった。

光る剣先が「風」の眼(まなこ)めがけて繰り出される。

「風」は咄嗟に身体をかわそうとしたが、間に合わなかった。

その右眼を光る剣が貫いた。

「・・・不覚」

ふりしぼるような「風」の声が聞こえた。

「風」は反射的に自らの眼に刺さったままの剣先を握った。

剣を眼から抜かれては不利。片目ではあの速さの剣は避けられぬ。

しかし・・・力負けすればその切っ先は己が頭を貫く。

「風」と異人の、剣を奪いあう力比べ。

貫かれた眼からは、涙か血かわからぬどろりとしたものが流れ出ている。

その手の力を抜けばその先には「死」が待っている。

命がけの、静かな駆け引きが続いている。

「茜！」

忠勝は声を限りに叫んだ。

その名は騙り名かもしれぬ。

もしやあの女は父の仇かもしれぬ。

しかし。しかし。

たとえ半刻ほどでも・・・

茜は私が惚れた女(おなご)じゃ。

その女を、この獣は・・・

私の目の前で犯すというのか。

もはや生死さえわからぬ娘の名前を、忠勝はただ、叫んだ。

そのとき唐人たちに隙ができた。

唐人たちは忠勝の言の葉を解さない。

それ故に。

意味を解すことのできぬ言の葉を不意になげかけられたが故に。

ひととき、唐人の動きが止まり、ちらと忠勝を見た。

この刹那。

卯之助の念は黒い唐人の心の臓を捉えた。

「風」は剣を握ったまま、眼からそれを引き抜いた。

「燃えよ」

茜は念じた。

「風」はその光る指先を上段から振りおろし、白い唐人を袈裟懸けに・・・

斬った。

白い異人の肩口から夥しい量の血が噴き出した。

黒い異人は身体の内側から燃えはじめた。

二つの大きな化物の影は、ほぼ同時に崩れおちた。

永く止まっていた風が、微かに吹いた。

東の空が、少しだけ明るくなっていた。

何物も動かぬ時のなか、はじめて動いたのは唐人を連れてきた小柄な男だった。

男は踵を返し、もときた道を去ろうとしている。

「待て。逃げるか」

「風」が云った。

「唐人の妖術遣い・・・いかほどのものかと思えば・・・お前らにさえかなわなかったか。高い買い物をした・・・」

毅然とした態度からは敗北の苦さは感じられない。

「待たれよ、吉田殿。今ここで決着をつけようぞ」

「無駄だよ、風の。私をここで斬ったところで、お前らに時代の流れは止められはせんよ。近いうち、お前らの信ずる幕府は倒れる。間違いない。私の見立てが間違っているか否かは、生き延びて、その眼で確かめるのだな」

「何を云う。貴様等のような不逞の輩どもが、將軍様のお力を脅かすのじゃ。剣を抜け、吉田殿」

吉田、と呼ばれた男はゆっくりと振り向いた。

その言の葉の力強さの割には若い。

男は「風」を顧みず、云った。

「卯之助・・・美しくなったな・・・やはり私と共に戦うのは厭か？」

「私の答えは変わりません。私は影に生まれ、影に生きる運命(さだめ)。松陰様についていくことはできません・・・」

男は小さな声でそうかと云った。

「そこなお侍様はどうする？侍の世はもうすぐ終わる。侍などという狭い世界を捨ててわしと一緒に来ぬか？」

忠勝は・・・しばし考えた。これから起こることを。

「わかりませぬ。今は何も言えませぬ」

忠勝がそう云うと同時に「風」が動いた。

「吉田一っ！」

「風」の指先が光った。

「風」が忠勝の後方に立つ、松陰めがけて走る。

つぶれた片目から血潮をほとばしらせながら。

「風」が忠勝の脇を駆け抜けようとした・・・

おそらく、狙いは松陰の首。

そのとき・・・

忠勝は剣を抜き、「風」を斬った。

「・・・父上。仇討ち、果たしました・・・」

七

「卯之助・・・赤衣着物・・・」

父の最後の言の葉は、何を意味していたのだろうか。

「ウノスケ・・・アカイキモノ・・・」

そう云いながら現れた唐人たちのことを指していたのだろうか。

否。

白い異人ならおそらく父を突き殺していただろう。

黒い異人ならば父は殴り殺されていただろう。

ならば・・・

赤い衣を着た卯之助と名乗る女か？

これも否。

卯之助ならば父を焼き殺しただろう。

では？

赤い衣を着た男が「卯之助」と名乗ったのなら。

「風」は卯之助を追っていた。

この場所で赤い衣を着た「卯之助」なるものが現れ、それが噂になったなら。

卯之助は必ずこの場に現れる。そして自分の名を騙る者が誰であるのか確かめようとする。

卯之助はそういう女だ。

「風」はそう読んだ。

「風」は俄(にわか)辻斬りとなって忠勝の父を殺めた。

そして・・・卯之助が現れた。

そして・・・それにやや遅れて「風」が現れた。

「風」は忠勝に、父の仇は「茜」と名乗る卯之助と思い込ませようとした。

しかし・・・白い唐人を斬ったその刀傷は、父の仇のものとそっくりだった。

それこそが何よりの証左。

「風」が父の仇だった。

「忠勝様・・・人を斬った刀はねえ・・・」

卯之助が若い侍に声をかけた。

忠勝は、ただその場に立ちつくし、震えていた。

刀を持ったその手が固まって動かない。

「ちょっと、それをお貸しく下さいな・・・」

卯之助が忠勝を見て微笑んだ。刀を握る手の力が抜けた。

「人の血糊というものはね、すぐに拭き取らないと、斬れなくなってしまうのですよ。これはお父上の形見の、大事なお刀でございましょう？」

女はその刀を恭しく預かり・・・

懐から紙を取り出し、刀の汚れを丁寧に拭いていく。

忠勝は卯之助の手元を見ずに・・・紙が取り出された胸元をじつと見ていた。

「厭ですよ・・・」

卯之助は恥ずかしかったのか、くるりと忠勝に背をむけた。

「ときに忠勝殿・・・これからいかがなされるおつもりだ？」

松陰が問うた。

どうやら、「風」が幕府隠密だったことは真実。

仮令(たとい)・・・忠勝の仇討ちが正義のものだったとしても・・・恐らく忠勝は生涯幕府隠密から命を狙われることになるろう。

「武士というものは厭なものですね、松陰様」

卯之助から返された鈍く光る刀を鞘に直しながら、忠勝は云った。

卯之助が拭いてくれた刀は、気のせいかな、忠勝にとって幾分重いものに感じられた。

この刀が武士の魂。

この刀は父の無念の証。

しかしそれはいかほどのものか。

・・・武士とは・・・何なのだろうか・・・

松陰もまた、かつて武士(もののふ)だった身。先達はただ黙って微笑んでいる。

「松陰様。お供してよろしゅうございますか？」

「好きにされるがよろしかろう」

「卯之助殿は・・・やはり一緒に来てはくださらぬか」

一縷の望みをかけて忠勝は好いた女に尋ねた。

「いつか、また、どこかで。私たちは仇同士というわけではないのですから・・・そうでございましょう？」

「卯之助殿・・・最後にお聞きしてよろしいですか・・・」

「何でしょう・・・」

「あの男が現れたとき、人の恋路を邪魔するな、と言われました・・・私のことを、惚れた男だとも言われました・・・」

「・・・そうでしたね・・・」

「そのお言葉、真に受けてよろしいのでしょうか？」

卯之助はすぐには答えなかった。

「私は・・・きっと嘘つきなのですわ・・・ただ、貴方様のこと・・・憎くは思ってはおりません・・・」

卯之助はここで言葉を止めて、あちこちからちろちろと昇る戦いの残り火を見た。そして小さく云った。

「私の真実の気持ちは・・・そう、この世の全てを焼きつくす、炎(ほむら)のその向こうにあるのかもしれない・・・」

若い侍はわずかに肩を落とした。

「では・・・お別れなのですね」

「そうなりましようかね」

卯之助は、残り火に向かって手を合わせた。

その横顔はどこにでもいる、普通の娘のものだった。

忠勝も卯之助の横に並び、同じように拝んだ。

「忠勝様・・・人は死んだらどこへいくのでしょうか・・・」

考えたこともない問いに、忠勝は狼狽した。

「私はこう思うのです・・・地に伏した屍は朽ちて土に戻って仏になります・・・焼かれた屍は天に昇って八百万の神の列に加わります・・・」

焼かれた屍は天に昇る。天に昇って神になる。

残り火から黒い煙が真上に立ちのぼる。

ひと筋、ふた筋・・・

ならば・・・この煙は神の住まう社に向かう道筋なのかもしれぬ。

忠勝は神へと繋がる細く黒い煙を、ただただ見つめていた。

やがて陽が昇る。

八

「ありがとうございました・・・何とお礼を申し上げたらよいのやら・・・あの子は津和野へと参りましたか？・・・さようですか。これで私も安心してあの世とやらに行けそうです。これがお約束のお金でございます・・・無理な願いを申しました。本当にありがとうございました・・・

「そうでしたねえ、事が全てかたづいたら、委細をお話する約束でございましたねえ・・・

「実はねえ、あの子の父は、立派な役人なんかじゃなかったんでございますよ。あの人は・・・ええ、死んだあの子の父親のことなんでございますが、自分のお役目を利用して、お屋敷の近くの船問屋と組んで、御禁制の品を藩内に運び込んでいたんですよ・・・『おらんだ』や『ぼると

がる』、『おろしゃ』や『明国』の品が多うございましたかねえ・・・

「ところがある日、うちの人は品物を運んで来る異人さんの商人とえらく揉めまして・・・異人さんとはいえ相手は商人、あの人はその御方を無礼討ちにしてしまったのです。ええ、その日のことは今でもよく覚えています・・・寒い夜のことでしたっけ・・・

「しかしそれがいけなかったんでございます。その商人、江戸のお偉い方ともご昵懇の異人様でしてねえ。主人なんかとは比べ物にならないほどの『力』を持っていた方なんでございますよ。その異人様をご領地のなかで殺されたとなりゃあ、江戸からも詮議の手が入ります。

「あわてたのは主人と組んで悪銭稼ぎをしていた連中でございますよ。みんなして峠の夜盗の噂を流しはじめた。そうやって異人様が峠の夜盗に殺されたことにしようとしたんですね・・・あんな辺鄙な峠に夜盗盗賊なんて出るわけじゃないじゃないですか・・・

「『赤衣着物の卯之助』なんて男、最初からいなかったんですよ。あの人は正直な人だから、いまわの際まで悪い人に利用されたんですね。あの人を斬ったのは・・・そう、多分、あの人と組んでやりたい放題していた藩邸の連中でしょうねえ。本当に、馬鹿な人ですよ。どこの誰をかばっていたのか知りませんが、自分が殺されようとしているのに、その殺した奴のことをかばって・・・『卯之助』だなんて・・・本当、泣けてくるくらい滑稽な話でございますよね。

「下手人は『赤衣着物の卯之助』なんだ、だから異人さんを殺したのもきっとそいつだ・・・そういう具合に事を収めようとしてたんですがね、そこで算盤違いがでてきた。正直者の息子が父の仇討ちをすると騒ぎだした・・・

「でもね、江戸は江戸でこの件を重くみていたようですねえ。つい昨日、藩邸にお調べが入りました。たぶん・・・全てが明らかになって、藩の者が幾人か切腹して、いくつかのお家が断絶になって・・・そういうところでしょうねえ。

「うちですか？そうですね・・・まず間違いなく、おとりつぶしになるでしょうねえ。

「私には・・・そうなることがわかっていました。あの人がそういう悪事に手を染めはじめた頃からね・・・だから、だからこそ、あの子には一日も早くこの家を出てもらいたかった。佐久間の家は・・・うちの人に代で終わります・・・それならば、武士ではない、信用できる御方のもとで大きくなって欲しい。

「でも・・・いるはずのない仇を追い続けるなど・・・不憫すぎます・・・それに、もしやあの子が父の仇として誰かを斬ってしまったら・・・罪科のない誰かを斬ってしまったら・・・ここへきて私は決めたのです・・・あの子を・・・忠勝をだますしかないと・・・」

九

旅の見せ物一座が行く。

座頭(ざがしら)は、「火吹き of 寛治」。

この男は息をするように炎を吐く。

大きな荷車を押しているのは、二人の大男。

二人には名前はない。

「おろしゃ」やら「ぼるとがる」やらいうところで、金で売り買いされていたという。

座頭が虎の子の銭を投げうって、長崎の異人商人から買ったのだという。

この二人は、近頃よく笑うようになった。

少し遅れて、「幻術遣いの平太」。

齢は十五。

狙った相手に術をかけ、思いのままに操ることができるという。

眠らせることもできるという。

ありもしない景色を見せることができるという。

痛くもない腹を痛いと思わせたり、その痛みを取ったりできるという。

大きな行李をかついで歩いているのは、「人形遣いの八助」。

人そっくりの人形を作り、操る。

首のない人形も、首だけの人形も、そしてそれを動かすこともできるという。

人の身体に血糊を仕込むなどの細工も得手であるそうだ。

まるで夜盗のような髭面だが、心根は優しい。

先乗りでここにはいない「火仕掛けの壮太」も「螢火の鉄五郎」も盗賊と見間違えられるような顔だが、虫も殺せぬ小心者である。

今頃二人は薬草やら怪しげな弾薬やらを練ったり潰したりして、やれ燃えたただの光ただのと騒いでいることだろう。

この一座、実は金で仕掛けを請け負っているだとか、実は吉田松陰の手先で全国をまわりながら志ある若者を集めているだとかの噂になったことがあるが、真偽のほどはわかってはいない。

大男が押す荷車に、一人の女が乗っている。

女というよりは娘である。

名は「百化けの綾」。

一座の華、と自ら名乗っているが、女が一人しかいない一座故、ほかに華は見当たらず。

この娘、有名な盗人の娘である。

色仕掛けの盗みや掏摸は父に教わった技だという。

真剣と竹光とを一瞬のうちにすり替えるなど、朝飯前だそうだ。

綾は荷車の上で退屈そうに芒を振っている。

やがて意を決したかのように、親方あと座頭に声をかけた。

「どうしたい、綾」

「あのお侍様なんだけどさあ・・・」

「また惚れたか？」

後ろを歩いていた平太が楽しそうに話に加わる。

「綾は誰にでもすぐ惚れるからな・・・」

「廻りにいい男がないからさ」

「俺はどうだい？」

「あんたまだ子供だよ。もっと胸が厚くて、頼りがいがある男がいいんだよ」

「・・・振られたのう、平太」

座頭が笑った。

「おう、そうじゃ。お前に預けてあった、峠の仕掛けの見取り図じゃが、もう用はないからな。始末しておいてくれ。くれぐれも跡を残すなよ」

「火吹き of 寛治」はそう言って、また黙々と歩きだした。

綾は空を見上げた。

日差しはもう夏と変わらない。

「暑いなあ」

綾はつぶやいて、懐から峠の「仕掛け図面」を取り出した。

人形・・・人形の首・・・炎の細工・・・血潮の細工・・・

図面にはびっしりと仕掛けの場所と「役者」の立ち位置が書き込まれている。

綾はその夜のことを思い出し・・・微笑んだ。

もう一度空を見上げた。

「暑いなあ」

つぶやいて、その図面を丸めて放り投げた。

「燃えろ」

娘がつぶやいた。

仕掛け図面は・・・内側から燃えはじめ・・・地面につくまでに灰塵となった。

一座のものはその光景を誰ひとり不思議と思う素振りもなく・・・

ただ、黙々と進み続けた。

夏はまだ始まったばかりである。

レディ・ゴー

1

「レディ...」

コーチの声が聞こえる。膝を曲げ、身体を縮め、全身のエネルギーを封じ込める。

ふくらはぎ。ふともも。コース台をつかむ腕。腹直筋。広背筋。

身体じゅうのすべての筋肉が、次の一瞬を待っている。目の前に広がる蒼の世界。

「ゴー」

全ての力を解き放つ。下半身の力の全てを放出し、遠く、力強く翔ぶ。蒼い世界に向けて。

着水。そのとき、世界中の音が一瞬だけ消える。水が五感の全てを包み込む。

やがて水の音の向こうから、自分のキックが水をかきわける音が聞こえてくる。全身を細く長く伸ばし、水の抵抗を最小限に抑え込む。すぐにストローク。やがて自分のキックの音だけを伝えていた聴覚がゆっくりと機能を回復する。耳を包み込む水を通して、水上の音が小さく遠く聞こえる。

「セーイ、セーイ...」

コーチの力強い声。

ストローク。ストローク。

五十メートル先のゴール目指して、浩次は泳いだ。

*

「レディ...」

浩次は自分自身に言った。

このちっぽけな機械が浩次の命を握っている。

靴音がゆっくりと建物の正面に回り込む。

逆光の中、二つの影が出入り口からの光を遮った。

「ゴー」

コーチの声が聞こえたような気がした。

浩次は機械を素早く操作した。

二つの影がゆっくりと戸口から消えた。

暗がりに隠れていたもう一つの影がゆらりと動いた。

その手に握られている銃が、採光窓から漏れる弱い日差しをうけてにぶく光った。

「レディ…」

薄汚れた路地の奥に隠れるように身を潜めながら、浩次は自分自身に言った。

目の前にはくたびれた中年男の背中がある。

左腕に抱かれているのは紙袋。銀行に入っていくまではこの紙袋は持っていなかった。

男をぴたりと追いながら、浩次は下半身の筋肉に意識を集中させる。それは一瞬の勝負だ。男の注意がそれた一瞬。その一瞬を逃してはいけない。

男が横断歩道にさしかかる。信号は赤。

まだだ。もう少し。

横の歩行者信号が点滅をはじめめる。

横断歩道を渡ろうとしていた中年女性が、ふて腐れたような表情をしながら『カモ』のすぐ横で立ち止まった。

もう少し。あとほんの数秒。

「ゴー…」

浩次は走り出した。男の背中に向かって。

正面の歩行者用信号が青にかわる。

男の足が半歩動く。浩次はこの瞬間だけを待っていた。

『カモ』の注意はその一瞬だけ、自分が抱えているものから外の世界へ向く。

その一瞬だけ、紙袋への集中が途切れる。遙か上空から獲物を狙う猛禽のような迅さで、浩次は男に向かって走った。

浩次に与えられたチャンスはたった一度。それを逃すとこの『カモ』はとり逃がすことになる。

五メートル。三メートル。一メートル。

男の左手の『ブツ』に狙いを絞り、走る速さをあげていく。

ターゲットに向かって手を伸ばす。

キャッチ。浩次の右腕は男が抱えていた紙袋を捉えた。

ゴー。そしてこれまでよりも早く、走る。

男が大事そうに抱えていた紙袋は今では浩次の腕に抱かれている。

「セーイ、セーイ」

中学生のころ、自分に向けられていたコーチの声援が甦る。それは遠い昔というわけではない。中学を卒業してから、まだたった二年しか経っていない。

しかしそんな懐かしい時代は今の浩次の毎日からはかけ離れた、遠い世界だ。

走る。走る。走る。

背後から言葉にならない怒号が追いかけてくる。

いくつかの靴音も。

さらに走る速さをあげる。通りを右へ。そしてすぐに左へ。そこにあるビルに飛び込む。そのままエントランスを駆け抜け、裏口から飛び出す。

そこからまた走り続ける。

走りながら紙袋の中身をウエストポーチに移し、袋をポケットにねじこむ。

ゴールまでもう少し。次の通りを左に折れる。

『あいつ』が待っている。

『あいつ』はタイミングをあわせてバイクから離れ、こちらに歩いてくる。すれちがいざまにウエストポーチを渡す。『あいつ』は小さな動作でそれをショルダーバッグに入れ、何食わぬ顔をしてそのまま歩きはじめる。浩次は『あいつ』が座っていたバイクにまたがる。

ついさっき駅前のバイク置き場から失敬したものだ。

エンジンはかかっている。

「ゴー」

またコーチの声が聞こえた。

『ひったくり』。

中三で全国大会まで行ったスイマーの、これがなれの果てだ。

ごめん、コーチ。

浩次はそう思いながらスロットルを回した。

ようやく追いついた『息切れしかけた怒号』を背にうけ、バイクは白煙だけを残して走り去った。

3

『あいつ』が殺されたのを知ったのはその日の午後だった。約束の三時を一時間以上過ぎたが待ち合わせ場所に姿も見せず、メールも入ってこない。

『あいつ』にメールを飛ばした。

「どうしてる？」

数分後、レスがあった。

「トラブル発生。問題がクリアされしだいまたメールする」

楽天家でお調子者の『あいつ』らしからぬ緊張感あるメール。

問題発生。嫌な響きだ。『あいつ』の仕事は受け取ったウエストポーチをショルダーに隠し、そのまま電車を乗り継いでここまで運ぶこと。たったそれだけの仕事にどんな問題が発生するというんだ。

これ以上ここで待っていてもしかたがない。

浩次は待ち合わせ場所の倉庫から離れた。ゆっくりとあたりを歩きまわる。歩きながら、あたりの様子を探る。

港に近い、倉庫が建ちならぶエリア。

そのなかでも一番奥まったところにある廃倉庫が浩次たちのアジトだ。『トラブル』とは縁遠い、いつもと少しも変わらない港の景色がそこにある。

ポケットのあたりが妙にごそごそする。見るとさっきの紙袋が押し込まれたままだった。やばい。こういう中途半端なものからアシがつくこともあるかもしれない。浩次は紙袋をポケットから出した。念のため中身が空であることを確認する。紙袋はもう底に穴があき、その用途を果

たすことができなくなっている。

駅に通じる道をぶらぶらと歩く。そして駅前のコンビニのごみ箱にそいつを丸めて捨てる。

コンビニのごみ箱は『やばいブツ』を処分するには最適だ。一日数回、従業員がゴミ袋に移し変えて店舗裏のゴミ置き場にまわしてくれる。さらにそのゴミ袋は毎日業者が回収していく。公園などのゴミ箱のように、何日も同じゴミが残されることはない。

顔をあげると、倉庫とは逆方向の橋のあたりに人が集まっている。

けっこうな人ばかりだ。

ゆっくりとその人ごみに近づく。

「若い男が撃たれて落ちた...」

「撃った男はどこかに逃げた...」

「まだ若いのに...」

「かわいそうに...」

人だかりの中から断片的な言葉が漏れてくる。浩次は妙な胸騒ぎを覚えた。

野次馬の群れをかきわけるように橋の欄干に近づく。

橋の下では、紺の制服を着込んだ警官たちが忙しく動き回っている。

その中心に『あいつ』がいた。

うつぶせに浮んで、ぴくりとも動かない。

ついさっき、ウエストポーチを渡したときと全く同じ服装だった。

しかし、あのポーチは周りのどこにも見当たらない。

浩次は『あいつ』の名前を知らない。住所も、携帯番号も。

『あいつ』とはゲームセンターで出会い、意気投合してそのままツレになった。

『トシ』というあだ名とメールアドレス。それ以上のことは何も知らない。

人気のアイドルグループのヒット曲をチャクウタに使っているお調子者だ。

『あいつ』だって同じだ。浩次は『あいつ』には携帯番号も教えていないし、瀬名浩次という名前も知らない。それどころか、『あいつ』は浩次の名前を『ショウ』だと思い込んでいるだろう

。

撃たれて川に落ちたと野次馬は言っていた。

何故だ。何が原因でそんなことになったのだ。ひょっとしたら...

ゲーセンでよく会う奴に言われたことがある。浩次のようなひったくりのビギナーは、ときどきとんでもなく『やばいブツ』をひっかけることがある。

今日の浩次の『狩場』では、ベテランたちはほとんど『狩り』をしない。あの場所には暴力団の組事務所などが密集している。それとは知らずに危ない金に手を出してしまう危険性がある、と聞いたことがある。浩次などに見れば、むしろそういうベテランたちがいないために働きやすかったのだが。

それにしても何故トシなのだ。何故トシが殺されるのだ。

顔を見られた浩次が狙われるならまだわかる。

ブツを受け取ってここまで運ぶだけの役目のあいつが何故殺されるのだ。

「若い男が撃たれたのは午後三時半ごろ…」

また遠くから誰かの話し声が聞こえた。

浩次は顔をあげて無神経なそいつらの顔を睨みつけた。しかし外野たちは浩次の抗議の視線に気づきもせず、無責任な会話を止めようとしめない。

そのとき、男たちのはるか向こうで妙な影が動いた。

不自然な影。

群集を俯瞰するとよくわかる。

圧倒的多数が橋の下をのぞきこんでいるのに、ただ一人だけ見る向きが違う影がある。

そいつだけはさっきからじっと浩次のほうを見つめている。

影が、ゆっくりと動きはじめた。

男がこちらに近づいてくる。

浩次は身構えた。

間違いない。あいつだ。銀行から紙袋を持って出てきた、あの男。

逃げろ。浩次の頭の中で危険を知らせるシグナルが大音量で鳴った。

しかし浩次はすぐには走りださなかった。

ここでいきなり走りだすなんて自殺行為だ。

こういう現場には必ず私服警察官が紛れている。そして、遠くから人ごみそのものをじっと見ている。

どんな事情があるにせよ、こんな場所で不審な行動をとるなど、自分から事件関係者であることを宣伝するようなものだ。

周りの誰にも気づかれぬよう、静かに後ろ向きに歩く。二歩。三歩。肩が誰かの背中に当たる。謝りながら身体の向きを入れ替える。大股で二歩。三歩。やや歩みを早めて二歩。三歩。

「レディ・ゴー」

またどこか遠くから中学時代のコーチの声が聞こえたような気がした。

浩次は走った。

3

浩次の隠れ場所はやはりこの倉庫しかなかった。倉庫に置かれているバカでかい建築資材の陰に潜み、息をつめるように隠れる。

男はなぜあの場所に現れたのか。

浩次が紙袋をひったくった場所からここはかなり離れている。

なぜ？

わけがわからない。

あの紙袋の中には何が入っていたのだ。

わからない。

突然、倉庫の扉が開いた。

とんでもない量の光が飛び込んでくる。光を背にした男の顔は見えない。

再び扉が閉ざされ、もとの薄闇がその場所を支配した。

「いるんだろ？ ショウちゃん。追いかけては終わりだよ」

妙に甲高い声が響いた。

知っている。奴は浩次のゲーセンでの通称を知っている。

「便利だよなあ。携帯小型発信機って言うんだってよ。おめえらみたいに裏の世界の仁義知らねえバカがいるから、こういう保険が必要なんだよ。いくらブツがパクられても、今のご時世じゃ簡単に追いかけることができるんだってよ」

裏の世界の仁義。発信機。

それはつまり、あの紙袋が中にそういう仕掛けを仕込まなければならないほど、『やばいモノ』だったことを意味している。

「手間とらせんなよ。シャブと小銭返してもらっても意味ねえんだ。お前が持ってる『ブツ』がないと商売にならねえんだよ」

『シャブと小銭返してもらっても』

奴はそう言った。どういう意味だ。シャブと小銭は取り返した...

浩次がトシに渡した荷物がそれなのか？

少なくとも奴は浩次の素性を知っているようだ。

トシが話したのか？ それとも奴はゲーセンや夜の町で遊んでいた浩次たちと面識があるのか...

浩次の頭はパニックで暴走しそうになるのを必死でこらえ、断片的な情報を分析しようとしている。

「いるんだろ？ わかってんだよ。ブツ持って出てきてくれたら苦しまないように一発で殺してやるよ。お前のトモダチのカワダみたいにさ」

トモダチのカワダ。トシの名前はカワダっていうんだ。

初めて知った。

トシのようにはなりたくない。しかし、浩次にはどうすることもできない。男は出入り口を背に立っている。あいつがそこにいる限り、脱出はできない。

「出てこねえのか？ 迎えに行ってもやろうか？ ショウ君...」

そもそも浩次は男の言うブツなんて持っていない。

奪った袋の中身はすべてウエストポーチに入れたではないか。

それを取り返したと男は言った。それでもブツを返せと言っている。

男が欲しがっているブツはどこにあるというのだ。

まさか捨てた紙袋の中か？

紙袋は空だった。それは何度も確認したから確かだ。あの紙袋そのものがブツだったのか？ それもあり得ない。どこにでもある、普通の紙袋だった。

「我慢比べでもするか？ いいぜ、何時間でもつきあってやるぜ」

男は入り口近くの資材に腰をおろした。

静かすぎる長い時間。

男は動かない。黙ったまま、石像のように闇を睨みつけている。

浩次は考える。生き残る方法を。

男の言葉の何を信じて、何を疑ってかかるべきなのか。

どこからどこまでが真実で、どこからどこまでがハッタリなのか。

男はどこからどこまでを知っていて、どこから先を知らないのか。

紙袋。ウエストポーチ。シャブ。金。

川に浮んだトシの死体。銃。

男がここに現れたときの様子。

さまざまなピースが徐々に全体像をつくりあげる。やがて整合されない部分が見えてくる。

そして...

名前。

浩次の考えが正しければ、ひとつだけ突破口がある。

チャンスは一度。まもなくそのチャンスが訪れるはずだ。

だがそのチャンスは、たった一つのパーツが欠けているだけで成立しない。

浩次は闇を見つめながら、静かにその時を待った。

どれくらいの時間が経っただろうか。

倉庫の周囲を歩く、数人の足音。断続的に聞こえる無線機の音。

男はその音にびくりと反応し、物陰に姿を隠す。

靴音が倉庫の外周を廻る。

「レディ...」

また甦るコーチの声。

コーチ... 頼む。力を貸してくれ。

助かったら、あんたに言われてたように、もうムチャやめて真面目に働くから。

やがて倉庫の出入り口に現れた二人組の影。

「ゴー！」

大声の出しすぎで、ガラガラに枯れたコーチの声が聞こえたような気がした。

今だ。

この瞬間だ。浩次が待ちつづけていたのは。

すばやく携帯を操作する。

メール送信履歴からトシのアドレスを呼び出す。

件名も文面もなしにそのまま送信。

鳴れ、鳴れ、鳴れ。

二人組の影が出入り口から消えた。

それと同時に、男が隠れていたあたりから、微かだが、しっかりとしたメロディが鳴りはじめた。

何とかいうアイドルグループの大ヒット曲。

トシが携帯に設定していたチャクウタだ。

男はあわててその音源を探している。

倉庫の入り口に再び人影が現れた。

影は持っていた懐中電灯で音のあたりを照らす。

「警察だ。誰かいるのか？」

サーチライトに照らされた男がゆっくりと立ち上がる。

「危ない、そいつ、銃を持っています」

物陰に隠れたまま浩次が叫んだ。

もう一つの影が身構えた。

「川で殺されていた若い男を殺したのはそいつです。そいつは銃と、被害者から奪った携帯電話を持っています。それが証拠です」

男がこちらをにらみつけた。

しかしもう事態は変わらない。

懐中電灯を持った影が、男に言った。

「動かないで。両手を見える位置に出してください。別の場所でゆっくりとお話をうかがいたいのですが。ご同行をお願いしてよろしいですか」

*

警察署で出された生ぬるいコーヒーは、お世辞にもうまいとは思えなかった。

「で？ どうしてあの男が川田君の携帯を持っていると思ったんだね？」

初老の刑事が浩次に声をかけた。

「時間です。時間がどう考えてもおかしかったんです。俺が彼にメールを送ったのは待ち合わせ時間の三時から一時間を過ぎたころ、午後四時を過ぎたあたりです。そのメールには返信があった。トラブル発生。でもトシはその時点ではもう殺されていました。誰かが彼の携帯を奪って、代わりに返信したんです」

「何故そんなことをする必要があるのかな？」

「トシが死んだことを俺が知らないうちは、トシとしてメールを返信して俺をおびきだすこともできます。恐らくはそれを狙ったのだと思います。『問題がクリアされしだい』というのはおそらく俺の居場所がわからなかったら、という意味だったんだ。恐らくあいつはメールの後、トシの携帯の受信履歴を見て、待ち合わせ場所があつた倉庫であることを知ったのだと思います。倉庫では俺の姿さえ見えていないのに、そこに俺が隠れていることを確信していたかのような口ぶりでした。俺の隠れ場所についてよほど確実な情報をもっていたとしか考えられません」

「なるほどね」

「まだあります。倉庫に姿を現したあいつは、俺のことをショウと呼んだ。ところがトシのことはカワダと呼んだのです。これが決定的でした。俺がショウならカワダはトシでなければおかしい。俺たちの遊び仲間とか、ワル仲間はそう呼び合う。逆に、トシがカワダなら俺はコウジか、姓のセナでなければおかしい。ありえないんです。俺がショウで、トシがカワダと呼ばれる状況が。実際、俺はトシには本名を教えてなかったし、俺だってトシの姓がカワダだなんて知ら

なかった。考えられる状況は一つ。あいつは現実に俺たちを知っていたのではなく、携帯のアドレスから俺の名前を知ったんです」

浩次はここでもう一度まずいコーヒーを口にした。

初老の警察官は浩次の言葉を聞いてほうと息をついた。

「あの男は、おそらく俺がトシにウエストポーチを渡した瞬間を見たか、あるいは俺があまりにタイミングよくバイクで逃げるのを見て、トシが共犯だと気づいたのだと思います。男はトシの後をつけてここまで来た。そしてあの橋の上でポーチと携帯を奪い、トシを撃って逃げた。男の行動はかなり強引だから、行き当たりばったりで計画などなしにトシを襲ったんだと思います。しかしポーチの中には一番肝心なものが入っていませんでした。だから男は危険を感じながらもあの場所から動くことができなかった」

「君からこのSDカードを取り返すまではね」

刑事はビニール袋に入った切手大のプラスチック片を取り上げた。そして静かに話しはじめた。

「このSDカードはすでにコピーをとらせてもらった。十六メガバイト分、覚せい剤使用経験者の携帯番号リストが入っていたよ。驚くべき量の情報だ。これがあればいくらでも薬をさばくことができる。ある意味では現金や薬そのものより価値があるものだろうね。顧客リストデータを登録してある携帯電話がかなりの値段で取引されているといった話は聞いたことがあるが、データ入りのSDカードを売買するなんて聞いたことがない。なるほどこの大きさのカードなら携帯以上に受け渡しも管理も簡単だ。データに対応した機種さえ用意しておけば、カードの情報はすべて見ることができる。逆に、データ形式に対応した携帯なり変換ソフトなどがなければ、カードの内容は知ることができない」

浩次はまずいコーヒーを飲み干して言った。

「ポケットの中に残っていました。男が持っていた紙袋の底が破れていたみたいです。これを俺が持っていたからあの男が追いかけてきた」

「しかしそのおかげで我々はあいつを確保できたことになる。君の友人には気の毒な結果になったが」

浩次は自分が言うべき言葉を探していた。今の自分の気持ちを的確に表現できる言葉を。

「ああ、すまん。トモダチを亡くしたばかりだな」

見つかった。言葉が。

「もう...忘れました。あいつの顔」

刑事が意外そうな顔で浩次の顔を見た。

そして、まるで自分の息子を見るような表情で笑った。

「そうか。それならそれでいい。もう思い出すんじゃないぞ」

刑事は立ち上がった。

「私が君に聞きたいことはそれくらいだ。手間をとらせたね。ここまでは麻薬事件の参考人としての聴取だったが、ここからは別の捜査がひたつくりの被疑者として君を聴取することになる。それは聞いているね」

浩次は頷いた。

「君はなかなか頭の良い青年だ。これから自分がどうすべきかの答えはもう出ているんだろう？」

浩次は答えなかった。

「まあ、元気にやりなさい。君なら大丈夫だと思う」

刑事はゆっくりと戸口に向かった。

「ああ、そうだ。もう少し教えて欲しい。男がカワダ君の携帯を持っていると君が推理したところまではわかった。だが、男がその携帯の電源を切っていたという可能性は考えなかったのかな？男は倉庫に踏み込んだわけだ。その時点で予期せぬ着信音などを警戒して電源を切ることだって考えられるだろう」

「他人の携帯のスイッチを切るのには勇気がいりますよ。俺やトシのようにみだしかけている人間の携帯は特にね。もしも起動ロックがかけられていたなら、電源を切るまでは普通に使えていた携帯がまるで使えなくなります。男は俺たちが二人組であったことも知らなかったはずだ。紙袋をひったくった俺が間違いなくショウであることも確実ではなかったんです。男にとって『ショウ』と連絡をとる唯一の方法は携帯電話です。こんな状況で携帯の電源を切るなんてまず考えられません」

「なるほどね。では警官があの倉庫に来ることを予測した根拠は何だったのかね？」

浩次は笑った。

「事件現場には、検証をする警察官とは別に、野次馬を観察する私服警察官が必ずいるという話を聞いたことがあります。あの男に見つかって、俺は極力目立たないように逃げ出したつもりだった。一方、男は俺をみつけてすぐに追いかけてきた。『目立たないように逃げる』男を別の男が追いかける。逆に考えればこれほど目立つことはない。警察は必ず倉庫エリアを調べにくると確信していました」

今度は刑事が笑い、そして言った。

「やはり面白い男だ、君は」

*

「レディ…」

浩次が言った。

「ゴー」

その声に反応して、六人の小学生がほぼ同時にプールに飛び込んだ。

時給七百五十円。スイミングスクールのアシスタントコーチ。

真面目な生き方というものがどんなものなのか、浩次にはわからない。

プールに入って子供と遊んでいることが真面目なのかどうかもよくわからない。

しかし、他人のモノを奪って逃げたり、ゲーセンで遊んだりしていた半年前よりも、素直な生き方なのかもしれない。

少なくとも、『コーチ』にごめん、と謝りたい気分にならないだけでも、本当の自分に近い生き方なのだろうと思う。

コーチは二十五メートル先で、ストップウォッチを手にこわい顔をしている。

コーチが右手をあげた。

「位置について」

浩次の声で次の六人の子供が並ぶ。

いつか。

この子供たちの誰かが、道に迷ったとき。

その子は俺の声を思い出してくれるだろうか。

「レディ…」

浩次の声は未来に届くのだろうか。

浩次は叫んだ。

「…ゴー」